

NEW GAME はじまりの
とき

オオミヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十八の時、おれは、何かを必死に取り戻そうとしていた。

足掻いて、足掻いて、やっと一つの到着点が見えた。『イーグルジャンプ』。

そこにはかけがえのない仲間たちがいて、おれの中の過ぎ去っていた時間は、ようやく、はじまりに向かって動き出した。

※注意

この作品は、NEW GANE!の登場人物、八神コウや遠山りんが『イーグルジャンプ』に入社した、原作の開始から七年前にオリキャラを投入し、そこでの出来事を作

者が完全捏造でお送りしています。苦手な方はバックしてください。

目次

はじまり

1

一ヶ月後

16

運命の日

32

熱

47

あおはる

65

スタートライン

80

さてと

93

オーデイション

100

責任

114

このくらい

130

幕間

144

マスターアップ

158

ハッピーエンド

165

寂寥

175

Re ;

187

ひふみん

198

ハリネズミ

211

あまね

221

「大丈夫」

230

変調

237

何もない

251

嫌だ

257

……という夢をみたんだ

264

笑ってくれよ

278

たたかい

失恋

最低

これから

おわりではじまり

286

298

306

323

331

はじまり

朝、目が覚めると、頬が濡れていることが、よくある。胸のうちにある、靄がかかっているようで、そのくせ存在感は確かにある、ただの虚無。

その正体に、もう気がついてはいるくせに、わざとわかかってないような振りをして、必死に目を背けている。自分に対しての言い訳ばかり考えて、無理やり正當化しようとしているわけでもなく、ただただ、逃げる。決して、前進はせず、全てをなげなげにして、選択を嫌い、あーもーめんどくせーどーでもいーやで済ましてきた。

それは、自分の積み上げてきたモノを無かったことにした、そういう人間らしい生き方だ。

そんな僕も、ようやく決断らしきものを下したのは、ある意味、そのような日々には疲れたから、かもしれない。

#

泣きはらした顔を無理やり締め直し、無造作に伸びた髭を剃り、まだ新品同然のスーツに袖を通す。外に出て、朝の爽やかな空気を胸いっぱい吸う。

「…よし、行くか」

そう呟き、アパートの階段を降りる。ヘルメットを被り、社会人記念に奮発して買ったバイクにまたがった。

宮前司、18歳、社会人一年生。俺は本日付けで、ゲーム会社に入社する。

#

都内某所、ゲーム会社『株式会社イーグルジャンプ』。今のところはまだヒット商品が出ていないが、グラフィックやキャラクターデザイン、そして何よりも丁寧な仕事ぶりで一定の評価を受けている中堅どころだ。俺がこの会社を選んだのは（こんなことは面接ではもちろん言わなかったけれど）、僕が今までやってきたことの全く真逆のものだったからだ。自らで全くのゼロから創り出す仕事は、今までの僕を否定するのにちょうど良かった。面接では、ちゃんと、しっかりと、プラスなことを言ったつもりだ。事前練習を何百回もこなしてきた甲斐があったというものだ。…しかし、我ながらよくあの受け答えで入れたなと思う。もしかして深刻な人員不足なのだろうか。

そうやって思案しているうちに目的地に着いてしまった。駐輪場にバイクを停める。すると、見覚えのある金髪が目の前を横切った。

「おはよう。早いね」

そう言うのと、彼女は不機嫌そうにこちらを見ると、

「…あんた誰?」

と聞き返してきた。

「おいおい、なんだよ。覚えてないのか? 宮前だよ、隣の席だった。少し話をしただろう?」

そこまで言うと、30秒ほど悩んだあと、

「ああ」

と、どうでもよさそうに呟いた。

彼女の名前は八神コウ。俺と同期になった女の子、いわゆる同僚だ。面接の時、席が隣だったから少し話したことがある。その時は、話すどころか、口を開くのも面倒臭いといった感じだったので、大変印象に残っている。しかし、もし話をしていなかったとしても、席が遠くにあったとしても、彼女は強く印象に残っただろう。

確固たる自分を持ち、他人に迎合せず、自分の世界の中の自分の物差しで物事を測ることができる。

その姿は美しく、それと同時に眩し過ぎた。

面接の時から不機嫌そうな顔つきと態度だったため、もしかしなくても落ちるかもしれないと思っていたが、無事通ったらしい。

「別に。早く目が覚めたから」

「うんうん、そうだよな。今日は入社一年目だし、早く行っておかないと色々面倒だもんな」

「…あんな話聞いてた？」

「何が？」

「…はあ」

八神は大きさにため息を吐くと、すたすた先に行ってしまった。

その姿が、どうにも可愛い思えてしまい、どうしても笑みが零れてしまった。

#

新入社員に対しての説明があるから待っているようにと、あらかじめ指定されていた会議室に行くと、典型的な会議室の長机のそばに、やけに美人な先着がいた。

「あら、おはようございます。早いですね」

と話しかけられた時、ああ、隣のこの子よりなんていい子なんだ！と割と本気で思った。しかし、八神と違い、人の顔と名前を覚えることに割と定評のある僕が、全く覚えていないようなので、面接の時には会っていなかったようだ。

「おはようございます。俺、一番乗りだと思ったのに、八神さんと一緒に着いたし、先着さんがいるなんて思いもしなかったですよ」

そうおどけて言うと、彼女はくすりと笑って、

「そうなんですか。私、実は緊張してあまり眠れなかつたんです。人付き合いは好きなんですけど、こういうのって、初めてだし」

「それは大丈夫ですよ。誰だって初めてだろうし。俺も安心しました。話し易そうな方で」

そこで、遅まきながら自己紹介していないことに気付く。

「どうも、宮前司です。年は18になります」

「遠山りんです。年は同じです。よろしくね」

宮前司と言われた時、一瞬間が訝しんだが、すぐに戻った。これはよくある反応と
いうか、一部の人間だと、熱狂的な反応をされるので若干困っているのだが、それくら
いの有名人らしい。むしろ、八神さんの反応の方が珍しい。

すると、遠山さんは、1人だけが会話に入って来ないのに気付く。

「よろしくお願ひしますね」

と魅力的な笑顔を向ける。しかし、八神さんは答ええない。遠山さんはムツとした表情
を浮かべ、

「おはようございます」

と、八神さんの目の前に移動した。

「あ…」

と、若干驚いたようだ。

「お、おはよう」

遠山さんは満足げな顔を浮かべた。

「遠山りんです。よろしくお願いします」

和やかに言い、手を差し出す。

「…どうも。八神コウです」

おずおずと手を握り返した。

「わ。綺麗な手。何かお手入れしてるんですか？」

「い、いや…」

「え、してないんですか？うそ、信じられない！髪だつてこんなにサラサラで！」

「え、ええつと、ちよ、あの」

手をまじまじと見られ、髪を触られる彼女。くすぐったそうに身をよじるが、嫌がっているわけではなさそうだ。きつと、慣れていないだけだろう。

「かましいねえ。いい、実にいい！」

そうやって半ば叫ぶように部屋に入ってきた、ウェーブのかかったロングヘア、ストールを身につけ、眼鏡を掛けた人物を見て、俺は目を剥いた。誰だつて、自分の親類が仕事場にいたら驚くだろうけれど。

#

「おぼや…」

瞬間、殺気を感じた。どうやら最後まで言わせてくれないらしい。

「言いたいことがあるならどうぞ？宮前くん」

「い、いやあ…どうしよつかない？」

あんなもの向けられてどうしろと。死ねと言うのか。

「私は葉月しずく。ここではディレクターをやっている。君たちを採用したのも私だ。これから社内を案内するけど、何か質問あるかい？」

「じゃあ、あの…」

と、遠山さんが手をあげる。

「私たちの同期って、この三人だけなんですか？」

「うん、そうだよ」

「でも、それにしても人が少ないような…」

確かに。いくら中堅どころとはいっても、新人がたったの三人とは、幾ら何でも少ない気がする。

「それはね…」

葉月さんはもったいぶるように、

「君たち以外に可愛い子がいなかったから！」

「…」

絶句。

まあそんなところだろうと思つたが。葉月さんが職場に可愛い子を侍らせているのは親族の間でも有名な話だ。しかし、この答えにショックを受けたのか、呆然としているのか、質問した本人は固まってしまつてゐる。

「ああ、もちろん、君たちのことは優秀だとは思つてゐるよ？ただ、それより、自分の欲望がちょーつとだけ勝つてしまつただけなのさ！」

「良いのかよそんなので…」

「良いんだよ、人事つてようは自分勝手にできるつてことでしょ？」

絶対間違つてる。口には出ささんが。

「まあ、君たちの他にもいるつちやいるけど、営業とかそこらに、はなちゃん全部がもつてちやつたからなあ…。君たちしか私のストライクゾーンはなかったのさ。あ、宮前くんは除外ね。彼コネ入社だから。」

「まじで？？」

「ああ。そんなことでもないと私が男なんて採用するもんか。男なんて」

そう言つて、ずれた眼鏡を掛け直す。

「それにしても、君はどっちみち心配だったからさ。どうせなら、目の届くところに置いておくかと思つて」

その答えに唾然とした。

そうか。葉月さんにまで迷惑を掛けていたなんて。俺は本当にとんでもないやつだ。そして、気づく。そう言つた彼女の声が、優しさに溢れていたことに。

「ほんと、ありがとうございます…」

「何、良いつてことさ…。さて、さつき社内を案内すると言つたが、あれはうそだ。実は昨日までエンドレスでデンジャラスな締め切り地獄で、まだだいぶグロッキーだから、片付けるまでもう少しかかるみたいなんだ。だから、片付けが終わるまで少し待つててくれたまえー」

そう言つて、あくまで優雅そうに、去つていった。

「…」

残された俺たちに、沈黙が降りてくる。

「えつと、ごめんね？俺だけズルみたいで…」

「いや、それは全然良いんですけど…」

と、遠山さんが言う。八神さんは相変わらずどうでも良さそうだ。

「それより、だいぶ、その、何というか…」

「うん…」

遠山さんに八神さんが同意した。まあ、あの人が、さすがに少し『あれ』なのはわかる。うん。

「すごく濃いよね…。うん、その気持ち、すごくわかるよ。あの人昔からそういう人だから。俺はもう慣れちゃってるけど」

「あの、どう言った関係でいらっしやるの？」

「あの人がうちの母親の姉なんだ。つまり、俺の叔母なんだけど、俺がおばさんっていうと、ものすごく怒るんだよ。だから葉月さんって呼んでる」

「はい、お待たせー!」

びっくりした。もしかして『おばさん』に反応したのかと思った。

「準備ができたから、社内見学ツアーにご案内だよー!」

#

社内見学ツアーの結果は、一言で言えないような有様だった。よくクリエイター系の人、常に傍に栄養ドリンクを置き、締め切りに追われていると聞く。さすがに、いつもではないが、昨日まではガチでヤバかったらしい。今まで会った人が、めちゃくちゃハイになっているか泥のように眠っているかのどちらかだったからだ。どれだけ壮絶だったかは、想像に難くない。

「うちはまだ出来て間もないから、どんな小さい仕事でも、今は、コツコツ積み上げていくのが大事なんだ。…だとしても、さすがにあの締め切りはきつかったなあ。どんなに予定を切り詰めても納期ギリギリになってしまつて…。さすがに失敗だったなあ」

そう言う葉月さんの顔にも、化粧でうまく隠れてはいるが、疲労が色濃く残っていた。「ああ、いや、別にブラックつてわけじゃないから、安心してくれたまえよ？ きちんと給料もあるし、有給もあるし、労災もあるから。極まれに会社に泊まることもあるけど、うちはいたつてホワイトだからね？」

慌てたように修正する。

しかし誰もそんな疑いは持たなかったはずだ。なぜなら、ここにいる誰もが満足そうな表情をしていたから。

これが、自分の仕事だと。ここが、自分の居場所だと。それが、自分のやるべきことだと。

『イーグルジャンプ』に誇りと愛情を持っていた。

「ありがとうございました」

社内見学ツアー終え、俺たち3人は葉月さんに頭を下げた。

「いや、良いつてことよ。さて、それでは明日からの君たちの仕事だが、君たちのやりたい役職をこの書類に書いて持ってきてくれ。それに応じて、それぞれの役職に就いて

貰うから、自分の役割を1日でも早く覚えるように」

そして、「それで、これはビッグニュース何だけど…」と前置きをし、

「近々新しいオリジナル物の企画が通りそうなんだ。そうなったら、もちろん、君たち3人にもチームに参加して貰うから。これは決定事項だからね。じゃ、私はこれから打ち合わせがあるからこの辺で。」

明日から頑張ってね」

そう言っつて、手を振り、去っていった。

「じゃあ、帰りますか」

「ええ、そうね」

「…うん」

#

帰り道。たまたま帰る駅が同じだということ、3人で並んで帰ることにした。俺は今日はバイクなので、バイクを引く。

「しかし、ゲーム会社かあ…。何だか大変そうね」

「そうだね、うまくできるか結構不安だよ。遠山さんは絵とかどう？うまい方？」

「んー、どうだろ。建物の絵とか書くのは割と好きだけど、人を書くのは苦手なの。八

神さんは？」

「…キャラクターの絵とかはアニメのを真似して書いてたくらい。それ以外は…」

「そっかあ、俺は絵心、多少はあるつもりだけど、やっぱり厳しいかなあ…。どうせコネ入社だし。もう給料がもらえるなら何でも良いや」

俺がそう言うのと、遠山さんは朗らかに、八神さんは呆れたように笑った。

「とすると、2人は美術系の学校？」

「全然。私は普通の共学だよ」

「私は女子校」

「へえ。じゃあ遠山さんモテたでしょ。美人だし。八神さんは…女子校でモテるってあるの？」

「何？口説いてるの？」

「いや、別に、そんな…つもりもなきにしもあらず、みたいな」

「…ふーん。まあどっちでも良いけど、女の子同士で付き合ってる子はいたよ」

「まじで？わかんないものだなあ」

話しているうちに、改札の前に来てしまった。俺はバイクで、二人は違う線なので、ここでお別れとなる。

「じゃあ、また明日」

「うん、じゃあね」

「…」

#

また夢を見た。あの頃の夢だ。

何でも手に入った。何でも感じる事が出来た。人間として、最高の幸福だった。つまらなく感じた。冷たく感じた。世界がひどく小さく感じた。

全てを得たのは自分だった。全てを無くしたのも自分だった。

苦しい。辛い。苦しい。辛い。辛い。酷い吐き気がする。嫌だ。あの頃の自分に戻りたい。――でも、それが”今”だ。

#

目が覚めた。また、泣いていたらしい。

鏡を見る。目の前の俺は、卑しく笑っていた。

――また、逃げるのか。まだ、逃げるのか。

――救われない奴め。かわいそうな奴め。

――惨めだなあ。

「――うるさい」

顔を洗おう。この惨めな顔を洗い流そう。シャワーを浴び、伸びた髭を剃り、少しで

も自分をよく見せようと香水なんかも付けたりしよう。晴れた朝日を浴び、バイクで空気を切り、愛しき同期と、素晴らしい上司に会いに行こう。

また、見えない今日に行く。漕ぎ出す。踏み出す。前へ進む。生きる。生き延びるのだ。

一ヶ月後

「樫井さん。元のスケジュール表と、資料を持ってきました。あと、栄養ドリンクも補充しておきましたよ」

「ああ、悪いね。助かったよ」

俺こと宮前司、八神コウ、遠山りんの3人が『イーグルジャンプ』に入社してから早1ヶ月。俺たち3人は、つい1週間前から発足した、新企画『フェアリーズストーリー』（通称FS）制作チームに参加していた。なぜ俺たちのようなペーパーが新企画に投入されているのか。理由は2つ。1つは人材育成のため。新人育成には現場で揉むことが最適である、という理由から。2つ目に、新企画に回せる人数に限りあるからだ。たかが新企画ごときに、人材を多数投入して、他の仕事を遅らせるわけにはいかない。

ちなみに、俺がプロデューズ補佐、遠山がグラフィックチームの背景班、八神がグラフィックチームのキャラ班所属となっている。また、俺はストーリーの方にも少し噛ませてもらっている。何でも、俺が試しに考案した主人公のライバルの境遇や生い立ち、パーティ内での立ち位置が脚本家の琴線に触れたらしい。

ちなみに、今は俺と先輩であるイケてるクールビューティ系、ポニテがよく似合う系

女性社員、樫井ミユさんと、通算3度目のスケジュール組み直しの真っ最中である。

「ごめんね。何度も同じことさせちゃって。うちの連中も本格的なオリジナル物は初めてで、色々と分かってないんだよ」

「いや、全然大丈夫ですよ。勉強になるし、経験にもなるし。…でも」
チラリ、と後ろを見る。

視線の先には、女性、女性、女性。

「チーム内に男1人っていう方が、どっちかっていうと問題ですかね…」
そう言うと、樫井さんは、魅力的な苦笑いを返してくれた。

このチームでは、葉月さんの要望、もとい、圧力、もとい、職権乱用によって、俺を除く全てが女性という、大変辛い編成となっている。何でも、めぼしい男性社員は皆、はなちゃんなる人物に取り上げられたらしいが、それにしたってあんまりである。しかも全員美人だから余計困る。本当に困る。居場所がない。ちゃんと役職あるのに。体重だって減った気がする。この前は、別チームの男性社員が同情してくれて、少し泣きそうになったのは内緒だ。

「しかし、君はもしかしてスケジュール管理に才能あるかもね」

「え、何ですか?」

「だって君の目星が大体当たってるもの。このくらいだろうって直感でわかるのね。」

まあ、ところどころあべこべで面白いけど。キャラデザが3日で終わるわけないよねっ
ていう」

「そ、それは、まだまだ経験不足なんです…よ?」

「ま、そりやそうよね。…そいえば、今日ってキャラデザ社内コンペの最終提出日だよ
ね?」

「ああ、そう言えば…」

口ではそう言いながら、実は滅茶苦茶気にしている。思わず、八神の席を見た。彼女は、正に鬼気迫る、といった風に一心不乱にペンを動かしている。今日だけでもすでに3時間、食事も水分も取らず、書いては消し、書いては消しを繰り返している。どうやら、周りは目に入っていないらしい。この1週間ずっとその調子だ。同じく八神に対して心配そうな目線を送っている遠山と目が合い、互いに困ったような顔をする。

「心配なんですよ?」

樫井さんが口を開いた。

「え? あ、いやあ…。バレてました?」

「あれだけ見てれば、そりやあ、ね。これからご飯行くでしょ? 私少し準備してくるから。声かけてきたら?」

「え、スケジュール表は?」

「食堂でやれば良いじゃない」

そう言つて、テキパキと片付けを始める。俺は、お言葉に甘えて八神の顔を拝みに行くことにした。途中で、八神のお気に入りの冷たいコーヒーも買つておく。遠山に目配せすると、察したらしく、自販機でミネラルウォーターを買つて行く。

八神の背後に忍び寄り、首筋にコーヒーとミネラルウォーターを同時に当てる。

「ひゃううつ」

あの八神から随分可愛い声が漏れ出した。

「八神さん、そろそろ休憩したら?」

「そうそう。あんまり根詰めすぎるのもよくないぜ?せめて水分くらいとらないと」

「…分かつてるよ」

ミネラルウォーターとコーヒーを受け取り、不承不承と言つた感じで言う。

「でも、やるからには勝ちたい。私だつてただ仕事だけをするつもりでここに入つてないんだよ」

そう言つた八神の目には、誰にも崩すことの出来ないような、確かな覚悟があつた。

俺たちは八神のことを知らない。この一ヶ月一緒に、仕事仲間として過ごしたが、八神がどういう人生を送つてきたか、何が心を占めているか、まるでわからない。そこそこ打ち解けたつもりだが、八神はそういうことを掴ませない。自分と他人との間に、決

定的な境界を作っている。多分八神はこの18年間、そうやって生きてきたのだろう。だからこの時、なぜ八神がここまでやる気を出しているのか。それはわからなかった。

しかし、そう言つて先輩のキャラクターデザイナーを見る八神の目が、まるで仇を見るような目をしていたのは、気になった。

何というか、危うい。

「だからあんまり思い詰めるなよ。確かにコンペなんだから勝ち負けはあるだろうけど、チャンスはこれっきりつてわけじゃないんだし」

そう言うと、八神は信じられない、といった風に俺を見る。

「…なんでそんな風に思えるの？」

「え、何が」

「チャンスはこれっきりじゃないとか、なんで『次がある』つて思えるの？」

「な、なんでつて、そう言われても…」

「もしその『次』がなかったらつて、そう思えないの？」

「いや、思わないわけじゃないけど、まだ新人なんだし、経験を積む、みたいな意味で」
「それは言い訳だよ。周りは新人だからつて手加減してくれない。次も。その次だつて。一度でも手を抜いたり、悔いが残ったら、それで終わりなんだよ。『その程度の

奴』って思われる。そうになったら、自分でも自分を信じられなくなる。それが嫌だから、私は勝ちたいんだよ」

「八神さん……」

「心配してくれて、ありがとう。でもこれは私の問題だから、あまり関わらないで」
そうして、再び自分のデスクに向き直った。遠山は心配そうに八神を見ている。

「……」

「……行きましょ。確かに、邪魔しちや悪いわ」

その後、まだ仕事が残っている遠山と別れ、先輩と約束してあった食堂へ向かった。

#

「大丈夫だった？ちよつと揉めてたみたいだけど」

食堂で、あらかじめ買ってあった菓子パンを頬張りながらスケジュール表を作成している、樫井さんが心配そうに口を開いた。どうやらあの話は大分大きい声だったようだ。

「あー……いや、あれはなんと言うか、その、意見の不一致というか。八神もかなり張り詰めてるみたいで」

「まあ、よくあるよ。私たちはクリエイターだから。自分に絶対の自信を持つてるし、負けず嫌いだから。負けたくないっていうのもすごくわかる。それはクリエイターに

とって必要なものだから。そういうった面では、八神さんは将来有望だと思う。だけど……」

すると、樫井さんはすぐく申し訳なきように、

「これは聞いた話なんだけど、八神さん、キャラ班の中でかなり嫌われてるらしくて」
「……え？」

「なんでも自分で出来ると思ってるみたいって。すぐく生意気で、態度も刺々しいって……。こういう噂話はいけないってわかっているけど、同期の君には伝えた方がいいかなって。私も気になってはいるんだけど、役職が違うから、聞きにくくって……」

絶句した。

八神が嫌われてる。そのことは、鉛のように心に重く沈み込んだ。確かに、何日か前からキャラ班からの八神に向ける視線に違和感を感じていたが、まさか、それが敵意だったとは。

八神の性質は敵を作りやすいとは思ってはいたが、こんなに早く問題が起きるなんて。

「さあ、さつさと終わらせちゃうよ。話を振った私が言うのもなんだけど、目の前の事を終わらせなくちゃ。友達のことを考えるのは後。スケジュール表終わったら、次は店舗の挨拶周りに行かなくちゃいけないんだから。大変だよ？」

「…はい。分かっています。」

#

なんとかスケジュール表を完成させ、ディレクターの葉月さんに提出しに行く。

「ご苦労さま。今度こそこれで最後までいけると思うから、ありがとうね」

「それでは、挨拶周りに言ってきました」

「あー、ちよつと待つて。宮前くん」

葉月さんに呼び止められる。

「…どうしました？」

「コウくんのことなんだけど、少し時間あるかい？」

「いや、これから挨拶周りなんですけど…」

「そうなの？」

と、榎井さんに確認を取る。

「まあ、そうなんですけど、少しくらいなら大丈夫だと思います」

「そっか、悪いね」

拜むように榎井さんに断った後、葉月さんは俺の手を掴んだ。

#

葉月さんに連れて来られたのは、無人の会議室だった。奇しくも、初めて俺たち3人が出会った場所。

「八神コウくんのことなんだけど」

その話が振られることは、なんとなく分かっていた。

「はい」

「彼女は、今苦しい状況にあるんだ。もともと、グラフィックチーム…特にキヤラ班は、人間関係が険悪になりやすい、というのはあるんだ。競争が激しいからね…。人事異動も多い」

そこで、彼女は今から言うべきことを確認するように、唾を飲み込み、ため息を吐くように軽く息を吐いた。

「この件に関して、私は介入出来ない」

「…」

「今までなんども潰れて行く子を見てきた。いじめとか、そういうわかりやすいケースは今までなかったけれど、空気が重い。耐え切れないって、彼女たちは言ってた。それをあえて、私は無視してきたんだ…。なぜだかわかる?」

「…その子が上司に告げ口したとか、そういう噂が広まるだけでもその子の事態がさらに悪くなる可能性があるからですよね」

「それも、かなり高い、ね。だから、私は手を出せずにいた」

葉月さんは、悔しそうに、自分の肩を抱いた。

「でも、例えば、その子たちの同期とかはどうだったんですか。さすがに何もしいつてのは……」

「普通は、誰だって初めての仕事、初めての環境で、他人を気にかける余裕はないよ。いくら同期だって、時が経つにつれ、繋がりは薄くなる。だけどー」

葉月さんは、俺の目を見る。縋るようだった。

「君と、遠山りんくんはどうやら特別らしい。優秀なんだ。だから、君と彼女は八神くんが苦しいそうだ、とは薄々感じてるだろう？ 違う？」

「… 違わないと思います。まあ、半分は単純に八神が無理してそうってのもあるけど……」

「ーなら」

葉月さんが俺の肩を力強く掴む。メガネの奥の目は泣きそうに歪んでいた。

「頼む。八神くんを、頼まれてくれ……！」

その目に無防備に晒されて、俺は、

「……」

ついに何も言えなかった。

「…今君が思つてゐることは、だいたいわかる。でも、それをいい加減克服しなきや。これはそのためのものなんだよ。君にはね」

真つ直ぐに俺の瞳の奥のものを見る。

瞳の奥の、汚い、おぞましいものを

「君はもう、あの宮前司じゃないんだよ」

それが引き金となつた。

「…俺は！」

思わずこぼれ落ちる。

「俺は、一度失敗した人間だ…！そんな奴が、これから上に行こうとしている奴に関わつちやいけないんだ…！八神は、関わるなど言つたんだよ…。俺がもし関わつたら、八神まで落ちてしまふかもしれない…！これから報われるべき人を、俺は、汚したくないんだよ…！」

「でも」

「君はその痛みを知っているじゃないか。だからこそ、苦しんでる人に寄り添えるし、その苦しみを理解できるんだよ」

「だから、彼女を助けるのは、君なんだよ」

「…私は、そう思うんだけど」

「…」

今度こそ何も言えなかった。俺が八神を助けることができるだつて？
本当に？

#

無事に、最後の店舗まで挨拶周りが終わった。

「お疲れ様。今日はもう解散でいいよ」

「先輩はこれからどうするんですか？」

「合コンよ！いい男をゲットしてやるんだから！」

そのセリフをこの一カ月もう通算何度聞いてきたか…。長続きしないのかそもそも捕まらないのか、相変わらず謎である。

「おい、なんか失礼なこと考えてるな？」

「いや何も。では、合コン頑張ってください」

「あ、待って」

そうやって、俺を呼び止める。

「何か相談事があればいつでも言ってみてね。私も……不意に顔を軽く伏せる。」

「私も、もう、失敗、したくないからさ……」

「……」

「だから君は……。……。何言ってるんだろ、私」

「先輩……」

「じ、じゃあ私行くわ！ごめんね、引き留めたりして。バイバイ……」

「相談します。絶対」

「え……」

樫井さんは驚いたような顔をする。

「俺も、失敗したくありません。だからー」

頭を思い切り下げる。

「だから、俺のこと、助けてください。お願いします」

沈黙が場を支配する。街の喧騒がやけに騒がしい。しかし、そんなもの聞こえないはずなのに。

涙が落ちる音がした。

… 気がした。

慌てて頭を上げると、彼女は、悲しみに顔を歪ませながら、眩しそうに、俺を見ていた。

「うん…！私にも、協力させて」

#

午後8時。会社に戻り、オフィスを覗きに行くと、机に突っ伏して寝ている八神と、それをそばで見守っている遠山を見つけた。

「おい、ちよつと…」

「しー」

遠山が口元に手を当て、八神を見る。そして小声で、

「八神さん、起きちやうから」

そう言つて、近寄ってくる。

「何か用事？」

「ああ。ちよつといいか。話があるんだ。」

#

向かったのは、会社の屋上。ここなら、この時間にくる社員はほとんどいない。一番安全な場所だと言える。

「八神のこと、葉月さんから聞いたよな」

「…」

それを聞くと、遠山は悲しそうに俯く。

「私、悔しいの」

そして、ぽつりと呟く。

「八神さんが辛そうなのを、ただの疲れだと思ってたことが。八神さんの周りのことを、全然考えてなかった」

「…仕方がないと言えば、そうなる。まだ入って一カ月だから、職場の人間関係を掴みずらいのはあるよ。だから、これから八神のことを心配してやればいい」

「宮前くんも、わからなかったの？」

「何か違和感を感じてたけど…。なんというか、確信が持てなかった」

「そう…」

そうして、遠山は押し黙ってしまった。びゅうびゅうとビル風が鬱陶しい。

「遠山、俺—」

「私…」

遠山が被せるように言う。

「私は、八神さんの力になりたい。八神さんが今苦しい思いをしてるなら、余計なお世話って言われるかもしれないけど、助けてあげたい」

君は、どうなの？そう、遠山の目が問いかける。

ふと、葉月さんの歪んだ顔、樫井さんの涙の音を思い出す。

…俺はどうしたい？

心は決まった。

俺はもう、後悔したくない。

「俺もだ」

迷いなく答える。こんなことで自分を偽ってどうなるというのだ。

こうして、俺たちのやるべきことはつきりした。それは、たった一つ。

八神コウを悲しませないこと。

叶えるためなら、なんだってやってやる。

これは、俺が人間に戻るための第一歩だ。

運命の日

翌日、つまり、キャラクターデザイン社内コンペが開催される日になった。

審査の方法は、まず、キャラクターの面々が責任者（この場合は葉月さん）に各々のキャラクターデザインを提出。そして、その後、社員それぞれのPCに、誰がどれを描いたかわからないように送られ、社員は、気に入ったものを一人一つだけ選ぶ。最終的に、一番選ばれた数が多いものが、メインキャラクターデザインになる。

「よう。八神」

駐輪場で頭からヘルメットを取りながら、八神に挨拶をする。すると、八神は少しだけ居心地悪そうに、

「…おはよう」

そう返してきた。

「昨日は悪かったな。部外者が知ったような口きいて。お前がどれだけ本気なのか分かってなかった。本当、ごめん」

「…私も、当たっちゃって、ごめん」

八神は、軽く頭を下げる。

「言い訳するつもりじゃないけど、やっぱり不安で…。昨日もあんまり眠れなくて」

「なんだ。八神も緊張とかするんだ」

「当たり前でしょ？ 私だって人間だよ。それに…」

「それに？」

八神は、言いにくそうに、しかし、心から嘯みしめるように、

「それに、夢、だったからさ。キャラクターデザインの仕事。だから、余計にチカラ入っちゃって」

「…そっか」

夢。

この、たった一文字に、どれだけの重みがあることか。

皆、これに救われ、これに殺され、これに笑い、これに涙を飲まされる。

俺のソレは、もうとつくに錆びついてしまった。

俺が八神から目が離せないのは、八神の強さ。決して周りの迎合しない、気高さ。そういうものは、この『夢』からきているのだろう。

それは、きつと八神の宝物だ。

「また、無神経なこと言っつて悪いと思うけど、俺は八神は勝つと思うよ。いや、正直に言っつと、勝つて欲しいと思っつてる」

「…それって、私が同期だから？」

「それは、違うな」

八神が怪訝そうな顔をする。

「じゃあ、なんで？」

「俺は、絵の良し悪しは分からない。お前も含めて、皆うまいと思うよ。だから、ぱつと見じゃ、どれがいいか分からない。でも、俺は、少しの間だけど、お前が絵を描くところをずっと見てた」

必死の形相で筆を走らせ、何時間も書き直し、書き直し、納得いかないと頭を抱える。それでも、それこそ納得できたものが仕上がった時は、見るもの全てを魅了するような笑顔を咲かせる。

「絵を描いてる時、すごく幸せそうだった。そんな奴こそ、応援したくなるってもんだろ？」

おそらく、ずっと見てきた、のあたりで何か勘違いしたようで、顔が薄っすら赤くなっている。それでも口を開き、

「ありがとう…」

そう、言ってくれた。

「おーい。八神さん、宮前くん。おはよう」

「おう、おはよう」

「…おはよう」

俺と八神が話しているところに遠山が合流した。

「今日は、ついに社内コンペだね…！私、一番に八神さんのこと応援するから！」

「うん、ありがとう」

「なんだよ。遠山には『なんで？』って聞かないのか？」

「…だって、なんて言うか、分かりやすいから」

「あ…。確かに」

「ん？なんの話？」

和やかな雰囲気俺たちを包み込む。

「でも」

八神が切り出す。

「社内コンペで審査される絵は、誰が描いたか分からないようにしてあるから、二人とも、自分の好きなものを選んでね。…応援してくれるのは嬉しいけど、私は、私の力で勝ちたいんだ」

「当たり前だな」

「うん。そうだよ」

「…え」

八神が驚く。まさか、ここまであつさり引き下がられるとは思ってなかったのだらう。

「だって、私たちの応援するって言うのは、八神さんが選ばれたら嬉しいし、落ちたら悔しいって言うか…。うーん…」

「要するに、心はお前と一緒にすることだよ。安心しろ。終わった後の飯は俺持ちだ」

「本当!? やったあ!」

「…」

遠山とやりとりをしていると、八神はいつの間にか俯いている。

「どうした、八神?」

「どこか具合悪いの?」

心配して、顔を覗き込もうとする。

「い、いやっ! ちよつと、まっ」

そこには、顔を真っ赤にした、俺たちが見たことのない、全く新しい顔をした八神がいた。

「…なんだよ。照れてるのか?」

「だ、だって、さっきみたいなこと言われたの初めてだし、まずそんな親身になられた

「ことなかったし……!」

ついには「ううう……」と頭を抱えて唸ってしまった。そうしたと思ったら、顔を上げ、真つ赤な顔と、少しだけ潤んだ目を存分に晒しながら、

「うれしい……。ありがとう……」

瞬間。

両名に衝撃走る。

「あれ、どうしたの……?」

「い、いや……。大丈夫だ。安心しろ」

「キヤラ班はあらかじめ集まるんでしょ……。だから、私たちのことは気にせず、先に
行つて……!」

「う、うん」

そう言つて、会社に入つて行つた。

「……」

「……」

二人が見つめ合う。お互いに、思うことは同じだった。

「やばかったな……。あれ」

「うん……。ちよつと、だいぶ心にきちやつた……」

「破壊力がな……。八神、すげえわ」

「どうしよう。私、イケナイ道に入っちゃうかも……!」

#

社内に入ると、妙な緊張感が満ちていて、思わず悪寒が走った。その空気を作っているのは言わずもがな、キャラ班だ。皆、目が血走っている。今は、離れたところで、葉月さんがキャラ班に向かって何か話している。

しかし、この時間、俺たちにできる事は何も無い。デスクトップに絵が映し出されるまで、何もできないのだ。

「宮前くん」

「あ、樫井さん」

少し遅れて、樫井さんが出社して来た。

「どう？八神さんの様子は。大丈夫そう？」

「はい、今のところは。さつきも遠山と二人で励ましてたところですよ」

「そっか。それはよかった。まだコンペまで時間あると思うから、今のうちに今日の分の仕事やり始めちゃおうか」

樫井さんは、「はいこれ」とノートパソコンと昨日終わらせたスケジュール表を渡し

た。

「とりあえず、スケジュール表の打ち込みと、あとは午後から芳文堂と打ち合わせだから、その確認をお願いね。私は、予算の組み直しをしちゃうから」

そう言って、自分のデスクトップに向かってしまった。

「…」

「…」

ただキーボードを打つ音だけが鳴る。

「あかさ…」

しばらくすると、樫井さんが口を開く。

「この前はごめんね。急に泣き出したり、変な態度とったりして」

「いやあ、全然気にしてませんよ。うちの爺ちゃんが言っていましたよ。『いい女の涙の

理由は聞くな』って」

「…ふふ。なに？口説いてるの？」

「そんなつもりじゃないんですけど…。いい人見つけたみたいだし、そんな野暮な真似はしませんよ」

「ん？どうして？」

「だって服。昨日と同じ」

榎井さんは、あからさまに「しまった！」という顔をして、急いでジャケットを羽織る。

「やだ、バレてた!? あー、どうしよー! はしたない女だと思われるかなあ」

「いや、大丈夫だと思いますよ。周りはそれどころじゃないと思うし」

「そっか。それもそうだね…。いや、こんな状況だからこそ、そんな事してる場合じゃないっていうか」

「別にいいんじゃないんですか? いつ誰が誰と付き合おうが関係ないと思うんですけど。少なくとも僕は、おめでとうって言うっておきます」

「う、うん…。ありがとう」

その後も黙々と作業を進めていく。しかし、どうしても八神のことが頭にチラついて集中できない。それでも集中できないなりになんとか手を動かしていると、

「みんな、少しいいかな」

葉月さんの声が聞こえて来た。

#

「席を立っている人は一度自分の席に着いてくれ。今から社内コンペを始める」

その声に従って、今まで騒がしかった仕事場がすぐさま静まり、キャラ班含め、全員が着席した。

「みんな分かっていると思うけど、これは匿名性だ。誰がどれを描いたのかも、誰がどれに票を入れたのかも分からない。だから、人間関係とか、そういう面倒くさいものはみんな頭から消してほしい…。これは、これから作っていくゲームの一つの完成形なんだ。私たちの成功がかかっているとも思って貰って構わない。各自、本気で、自分が一番良いと思っただけの絵を選んでほしい。以上」

そう言うと、葉月さんは、自分のデスクトップで何か操作をする。すると、俺のノートパソコンに一通のメールが届いた。それを開くと、中には十二枚のキャラクターの絵がある。今回のゲーム『フェアリーズストーリー』の主人公、『シン』だ。事前にバックボーンや性格、着ている服や装飾品、重要なセリフは定められており、それぞれの絵には共通点は多かったが、それでも一つ一つの絵は全く違った。各々の絵のタッチはともかく、描いた人物が『シン』のどの部分に重きを置いているかが違う。ある人は表情に。ある人は服や装飾品に。または、全体的に収まりが良いかどうか。正直、どれも素晴らしいと思った。どの絵が『フェアリーズストーリー』のメインキャラクターデザインだと言われても、納得してしまう。この中からたった一つを選ぶなど、とてつもなく残酷なことをしているのではないか。そんな考えが、頭をよぎった。

——私は勝ちたいんだよ

その時ふと、八神の顔を思い出す。私は勝ちたい。あの表情には、どんな気持ちも隠

れていたのか。

どこまでも本気で、自分を決してまげない。あの表情、あの瞳を、どんな理由があろうとも裏切つてはならない気がした。

「…」

どれを選ぶべきか。自分の心の底に問うてみる。そうすると、今まで悩んでいたのが嘘のように簡単に答えが出て来た。結局、何かを信じる気持ちは、どんな形をしていても、何も変わりはない。その形は、絵だったり、音楽だったり、情熱だったり、負けたくないという気持ちだったりするのだ。なら、自分は、その信念を汲み取ればいいだけ。

その手は、いつの間にか一枚の絵を選んでいた。

#

一度投票した後、葉月さんが集計に入る。その間は自由行動だ。仕事をしてもいいし、少し早めの昼食休憩にしてもいい。俺はもちろん仕事だが、今度は集計の結果が気になって集中できない。

「…君、もう休んできていいよ。なんだか全然進んでないみたいだし」

「…いやあ、そんなことないっす」

「今どい」

「6月です」

「来年の1月まであるんだけど」

「重々承知しております」

「ここまで言えばわかるよね」

「や、でも、正直仕事してないと落ち着かないっていうか」

「…」

榎井さんは、いかにも「まったく…」という呆れた顔をする。

「気持ちにはわかるけど、自分のやるべきことがあるでしょ？それができないなら、一旦休んだ方が効率がいいんじゃないかっていつてるの」

「…確かに、その通りなんですけど…」

「…分かった。あんまりあーだこーだ言わないようにするよ。でも、くれぐれも無茶しないでね」

「はい、すみません…」

そう言つて、榎井さんは、さつさと自分の作業に戻つてしまった。俺もすぐ戻る。でも、なんとなく手が動かない。仕方なく、手元のコーヒを飲み干す。それで思考がクリアになった気がして、再び向き直るが、これもまたなんとなくやる気が出ない。さつきからこれの繰り返しだ。思わず机に突つ伏す。

「はあ…」

今更だが、樫井さんの言う通り、一度休憩した方がいいかもしれない。こうやって無駄な時間を過ごしている方が、よっぽど薬にも毒にもならない。しかし、今さつき意地を張ったばかりなのにもうくじけるのかという無駄な気持ちもある。

「どうすれば…」

「宮前くん！」

悩んでいるところに、何やら焦った様子の遠山がやって来た。

「どうした？ 顔が真っ青…」

「八神さんがいないの！ どこにも！」

そういえばさつきから見かけない。

「でも、確か投票が終わったら、キャラ班は会議があるって…」

「それはとつくに終わってる時間なの！ 他の人はもうほとんど戻ってるのに八神さんだけいないって、おかしいよね!？」

「まさか…」

頭の中に最悪の考えがよぎる。

「今すぐ探しに行こう！ このままじゃ八神が…!」

「うん！」

すぐに樫井さんのところへ向かう。

「樫井さんすみません！ちよつと所用ができたので、抜けて来ます！」

「あ、ちよつと！どうしたの！」

流石に大声で言うわけにはいかず、声を小さくする。

「八神が行方不明で…」

「え…」

樫井さんの顔から血の気が引く。

「分かった。私も行く」

「え、大丈夫なんですか」

「私の分はもう終わったから！」

樫井さんが有能で本当に助かった。彼女がいれば百人力だ。

「ありがとうございます！助かります！」

「よし、じゃあ三手に別れよう。私は会議室を見てくる」

「じゃあ、私はオフィスを」

「俺は空いてる部屋を探して来ます」

オフィスから飛び出した。

#

「どこだ、八神……！」

空いてる部屋を片っ端から探す。『イーグルジャンプ』擁するビルはそこまで大きい建物ではない。周ろうと思えば一時間もかからない。だから、失踪なんてそう簡単にはできないはずだ。すぐに見つかるはず……。

「クソツ……！」

暗くなった部屋を見渡す。これで四つ目、あと残っているのは三つだ。だんだん不安になってくる。早く見つけてやらなければ……

「……」

曲がり角からやって来た人と目が合う。二人だ。薄笑いを浮かべている。

「……」

すれ違った。二人のうち一人が手を抑えている。もう一人が、含み笑いをしている。通り過ぎた。二人が一番近い部屋のドアが少しだけしている。

ドアノブに手をかける。

開けた。

「……」

中には、ぐったりと横たわっている、八神が……

「やがみ…」

頭が真つ白になる。熱い。ショートしそうだ。何も考えられなくなる。とにかく動かなければ。八神の元へ。早く。

「八神、どうした…?」

「…?」

肩を揺ると、八神が焦点の合っていない瞳を向ける。

酷い有様だった。血走った目。顔中にある涙の跡。腫れた頬。あんなに綺麗な、希望に満ちた顔をしていたのに。

「誰が…!」

歯をくいしばる。悔しくて悔しくて堪らなかった。守ると誓ったのに。終わったら、泣いてようが笑ってようが、三人で飯を食おうと、最後には笑おうぜと、約束したのに。

「おい八神! しっかりしろ!」

「みやまえ…」

「そうだ、俺だ! どういうことだ! なんでそんな風になってる!?!」

「…これは」

八神は目線を床に向けると、

「…いいの。別に。気にしないで」

「そんなことできるか！まさかー」

脳裏に先程の二人が思い浮かぶ。

「あいつらか！クソつたれ…っ！」

「やめて！」

涙でいっぱいになった瞳に睨まれる。

「やめて…っ。これは私の問題なの。首を突っ込まないで！」

今までとは違う、明らかな拒絶。感じたことのないような負の感情に、思わずたじろいでしまう。

「もう、いいから…」

そう言つて立ち上がろうとする。

「…？」

だが、うまくいかない。体に力が入らないのだ。

「あれ…？あれ…？」

何度も試みるが、足が動かない。ぼろぼろと涙が溢れ出た。

「なんで……?なんでよ……!」

「おい、八神」

手を差し出す。

「お前の言う通り、首を突つ込まない。けど、今は助けさせてくれ。正直……今のお前は、見てられない……」

「う……」

八神は、俺の手を取る。俺は、そのか細くて弱々しい手を、逃すまいとしつかり握る。

「ほら、立てるか?」

俯いてしまった。どうしようもないらしい。

「よし、じゃあ」

八神の手を背中に回す。

「え……」

「おぶつてつてやる。もう今日は仕事出来なさそうだし、早退しよう。な?」

返事も聞かず、引つ張りあげる。人間一人抱えているのだ、重いと思つたが、想像以上に軽かった。力を入れれば、すぐに折れてしまいそうな細腕。化粧で隠された濃い隈。こいつは、今までどれだけ無茶をしてきたのだろう。

「やだ……」

わがまま言うな。そう言おうとしたが、八神は脱力しきっている。耳を澄ませば、うすうすと寝息が聞こえる。安心しきったような表情に、少し救われた。

「あ、もしもし。遠山か？ちよつと来てくれー」

#

目を開けると、自分の部屋にいた。

「…!?」

体を起こそうとする。なんだか体がだるい。動かない。

「おい、無理すんな。まだ寝てろよ」

どこかから声が聞こえてくる。どうやら、キッチンの方からだ。男の人の声…。

「!?み、みやま…」

「あー、だからいいって。あとで事情を説明するから。おーい、八神起きたぞー」

「え、うそ、ほんと!？」

ベランダからドタドタと足音が聞こえてくる。

「八神さんっ、大丈夫なの!?熱は下がった!?食欲はー」

ま、待って…。

「待った待った。まだ起きただけでまだ話せる状態じゃないんだ。質問攻めはまた今

度な」

そうやって、宮前はこっちに来る。お盆に何かを乗せている。

「ほら、おかゆだ。あんまし上手にいかなかったかもしれないけど、一応、遠山にコツを聞いたんだぜ」

「そうそう、病人にはおかゆが一番！おかゆには梅干しを乗せるのがコツね！梅干し食べると口がさっぱりするから。さ、食べて食べて」

「ほら、あーん」

宮前がスプーンに乗せたおかゆを差し出して来る。まだあたまがぼうつとして、うまুকかんがえられない。

「あー……」

少しあついけど、とても食べやすかった。

「おお、食った」

「かわいい……」

なにか言ってるけど、うまく聞き取れない。

「びょうきって……？」

「そう、すぐくびつくりしたのよ。宮前くんから連絡貰って、八神さん寝てると思ったらすつごいお熱があつたの。それで、とりあえず会社早退してきて、八神さんの家まで運んできたの」

「何があったか知らねえけど、安静にしてろよ。とりあえず、仕事は全部終わらせてきたから」

「お掃除とお洗濯と、身の回りのお世話は私」

「それ以外は俺だ」

「ちよ、ちよつと待つて」

矢継ぎ早に状況を説明されたせいであまり飲み込めない。けど、それよりもきになることがあった。

「コンペの、結果は…？」

そう言ったら、二人は顔を見合わせて、

「お前が早退したから、発表はまた後日だよ。さつき葉月さんから連絡があった」

「そう気を逸らせずに、ゆっくり休んでね」

遠山さんが、薬を持ってきてくれる。

「もう今日は寝てね。一晩じっくり休めば、良くなるはずだから」

そう言つて、薬を飲ませてくれる。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

「…」

二人がいなくなつて、部屋が完全に真つ暗になる。一人になると、否が応でもいろいろと考えさせられる。今日のことだ。とても嫌なこと。早く忘れてしまいたいのに、頭にこびりついて離れなてくれない。

——あんたじゃふさわしくないのよ！

——調子に乗らないで！

——何よその目は……！

頬が疼く。もう腫れはだいぶ引いたけど、痛みが熱のように、うねつて這い回る。また、涙が溢れて来てしまう。自分は何も言えなかつた。理不尽なことを言つて来る相手に対して、黙つて、俯いていることをしか出来なかつた。わけが分からなくて、ただ恐ろしかった。

宮前には、悪いことをした。自分を心配してくれたのに。でも、これ以上の優しさを向けられたくなかつた。遠山さんにも、呆れられて、見捨てられるかもしれない。……でも、それでいいのかも。

私は、一人の方がいいんだ。

いつの間にか、意識を手放していた。どこからが夢だつたのだろう。なぜか、その日は久々に安らかな気持ちだつた。

#

「…よし、寝てるな」

ドアを少しだけ開けて、寝室を確認する。穏やかな寝顔を見て、思わず胸を撫で下ろした。昼間の、まるで世界の終わりのような表情を思い出す。本当に、無理やり連れてきてよかった。

「どうだった？」

「ああ、良く眠ってるよ」

その後すぐに遠山を連絡したのも良い判断だった。連絡後、ものの数分で飛んできたと思ったら、「家に連れて行くわよー」と八神の家に直行し、八神のカバンを漁って鍵を開け、俺に料理を命じ、八神の服を剥ぎ取り、パジャマに着替えさせ、ものすごい勢いで掃除をし、洗濯をしたのだ。正直、遠山がいなかったらどうなっていたことか。

「遠山。改めて、本当に助かった。ありがとう」

「いいよ。私も力になれてよかった。樫井さんにも、お礼言っておかないとね」
樫井さんは、急に抜けることとなった俺たちの穴を埋めてくれたのだ。

「じゃあ、何があったのか、話してもらえる？私、何も知らないの」

「ああ…。つつても、俺だって、ほとんど知らないんだ。あの後別れてから、第二会議室に辿りついたら、八神が倒れてたんだ。その時、少し気になることがある」

「気になることって？」

「第二会議室に行く途中、二人の女とすれ違ったんだ。二人のうち、一人は笑っていて、もう一人は手を抑えていた」

「笑っていて、手を抑えていた…」

「最初の方はわからないけど、後の方は、おそらく手を痛めたから抑えていたんだ。多分、平手を喰らわそうとしたら頬骨に当たったんだと思う」

「…殴ったの？女の子を？女の子の顔を？」

遠山の声に怒気が籠る。

「…じゃあ、もう一人の方は、いい気味だつて思ったんだよ。だから、笑つてたんだ」

「…十中八九、キャラ班の誰かだろうな」

「…どうする？葉月さんに相談する？」

「…いや、どうだろう。実は…」

遠山に、この前、葉月さんに言われたことを話した。特定の誰かを守るというわけにはいかないこと。それは、どうしようもないことと言われたことも。

「…そんなの、そんなのおかしいよ！なんで弱い立場の人に味方してくれないの？それが上司なの？」

「遠山、それが人の上に立つってことなんだ。決して私情で動いちゃいけない。葉月さんだって、苦しい思いをしてるんだよ」

「うう…」

遠山は、とても納得したとは言えない顔をしている。それも当然だろう。味方になると思っていた人物が、協力出来ないを知って、裏切られたと思っっているかもしれない。

「まあ、聞けって。一つ考えがあるんだ。うまくいけば、葉月さんを味方に付けられるかもしれない」

#

考えと言っても、単純なことだ。八神がぶたれた証拠を集めて、葉月さんに提出すれば、葉月さんを動かすことが出来る。葉月さんが動いてくれれば、犯人を煮るなり焼くなり、好きに出来る。そうすれば、八神の敵はいなくなる。

翌日、出社した俺と遠山は、まず、今日は八神が休むことを伝えた。大分熱は下がったが、大事を取って休ませることにしたのだ。休むのは、こちらにとっても都合が良い。こそこそ嗅ぎ回るのは、八神に知られない方が、何かあった時に八神に被害が及ばない可能性が高くなる。

「じゃあ、また後で集まろう」

「うん」

遠山と別れる。背景班の仕事はかなり進んでるそうだから、もしかしたら、かなり暇

になるかもしれない。その場合、遠山だけでも動いてもらおう。怪しまれないために、フリだけでも仕事しなければいけない。

「おはようございます」

「おはよう。八神さん、どうだった？」

「はい。熱は下がったんですけど、大事をとって、一日だけ休ませました。昨日はすみません。仕事変わって貰っちゃって」

「ぜんぜんいいよ。気にしないで。ところで、今日の仕事の前に、渡しておきたいものがあるんだ」

そう言つて、樫井さんは一枚の紙切れを取り出した。

「これは？」

「開いてみて」

言う通りにすると、そこには名前が書いてある。

『山本真弓、押野梨々香』

「その子たちは、昨日、少しの間姿が見えなかった人。…探してたんですよ？」

「はい。でも、なんで…」

「なんとなく分かっちゃって。お節介だったらごめんね」

「とんでもない！とても助かります！」

この紙切れは、まさに天からの一条の光だった。

「そっか。よかった…。私も役に立てたんだね」

「…樫井さん？」

「ううん。なんでもない。頑張ってる」

「ーはい！」

すぐにキャラ班の所に行く。思わず逸ってしまった。

「…頼むよ。救ってあげてね」

その小さな眩きには、気づくことはなかった。

#

遠山の電話を鳴らす。

「俺だ。今ちよつといいか？」

『いいけど…。どうしたの？』

「キャラ班に殴り込みだ。名前と顔を把握した」

『…！ほんと？』

「ああ。樫井さんが調べてくれた」

『樫井さん…』

「準備はいいか？」

そう聞くと、遠山から、迷うような息遣いが聞こえてくる。

『…ごめん。やつぱり、待った方が良いと思うの』

「…理由は？」

『これは、あくまで八神さんの問題だから。私たちが勝手に突っ走っちゃいけないと思うの。このまま行っても、多分、八神さんは喜ばない』

まさに目から鱗だった。簡単に王手に至る道を見つけてしまつて、一番大事なことを忘れていた。八神の気持ち、考えていなかった。結果ばかりを求めて、重要な過程をないがしろにしていた。

「…そう、だな。一度、八神とちゃんと話をしなくちゃいけないな」

『じゃあ、また後で待ち合わせましょう』

「いや、今から行つてくる」

『え!?!』

「遠山は一応残つててくれ。そんなに仕事の多くない俺が行つた方がー」

『ちよつと待つて！私も行くに決まつてるでしょう!』

「いや、でも二人で動くと警戒されるかもー」

『そんなの関係ない！私が行きたいの!』

予想しなかつた遠山の劍幕に、一瞬たじろぐ。

「…分かった。じゃあ今から玄関に集合だ。急げよ！」
『うん！』

携帯電話を切り、集合場所に向かつて歩き出す。次第にじれったくなつて、早歩きに、そして、ついに走り出してしまふ。もう少して八神を助け出せる。あの輝く瞳を、あの強さをもう一度見ることが出来る。そう思うと、気持ちを抑えられなかった。

#

遠山と合流し、八神の部屋があるマンションへと向かった。八神の携帯電話を鳴らす。

『…もしもし?』

気だるそうな声が聞こえてくる。

「八神、宮前だ。体調どうだ?」

『うん…熱はもうないよ…』

「そっか。よかった」

「ちよつといい?」

遠山が貸して、と手を出す。

「もしもし、りんだけど、今大丈夫?」

そう言って、話始める。一言二言交わした後、電話を切った。

「どうだった？」

「大丈夫だった」

遠山は俺の目を見つめる。

「じゃあ、行こうか」

「…ああ」

マンションのセキュリティを解除してもらい、エレベーターに乗り込む。目指すは八神の部屋、301号室だ。扉前に立ち、インターホンを鳴らす。少し経って、トタトタと足音が聞こえてくる。

「はい、どうぞ」

扉が開き、八神が顔を出す。少し心配そうだ。

「どうしたの？仕事は…」

「ちよつと話があるんだ。大事な話で、先延ばしにできないから、仕事は抜けてきた」

「大事な話…」

八神は考え込むようにするが、

「とりあえず上がって」

と、促した。

中に入り、部屋にある背の低い机に囲むように座る。

「それで、大事な話って…?」

「ああ、これだ」

机に『山本真弓、押野梨々香』と書かれた紙切れを置く。

「この名前に、覚えはないか?」

それを見た途端、八神の顔が引き攣った。凶星だろう。

「言うまでもないかもしれないが、こいつらは、昨日お前に、酷いことをした奴らだろう。俺たちは、仮にも同僚で後輩のお前にあんなことをした落とし前をつけさせるべきだと思ってる」

「ちよ、ちよつと待つてよ! 私言ったよね、首を突つ込まないでつて! それを」

「悪いが、そんなことはできない。あれは嘘だ」

「そんな…」

八神はうなだれてしまう。

「やめてよ…。あんた達には関係ないでしょ…。分かったような口聞かないでよ…。

お願いだから放つておいて…」

「八神さん」

「私はこうなつた方がいいの…。一人の方が自由で好きなの…! 誰も助けてなんて

言つてない……余計なことばかりしないでよ……！」

八神は俺たちを睨みつける。

「帰つて！もう、顔も見たくないッ！」

「八神さん！」

突然、遠山が叫び出す。八神は予想だにしなかったのか、びくりと身体を震わせる。

「こうなつた方がいいってなに？一人の方がいいってなに？関係ないってなによ！たつた一ヶ月の間だけど、私達は関わり合つてきた！私達は何回も、お互いを頼りにしてきた！私達は、お互いを友達なんて陳腐な言葉で済ませたりはしないけど、それでも、私は、あなたのこと大切だに思つてる！たとえあなたが助けて、なんて言わなくなつて、辛い状況にあるなら！私は、あなたの力になりたいの！コウちゃんが一人になりたくたつて、私がコウちゃんと離れたくないの！」

遠山の目から、堰を切つたように涙が溢れ出す。鼻水も出して、顔がぐちゃぐちゃだ。それでも、八神の目をしっかりと見つめている。

「私は、コウちゃんと一緒にいたいッ！」

いつの間にか、八神も涙を流していた。初めは驚いた様子だったが、涙を止めることが出来なくて、ペたりと腰を抜かしてしまう。

「うう……っ、うううう……」

八神は、言葉を必死に紡ごうとするが、うまく出来ない。

「わ、わたし…っ。わたしも…っ。ご、ごめん…！」

「いいの。いいのよ…。コウちゃんはコウちゃんだもの。でも、私も、それに俺を見る。」

「宮前くんだって、いるもんね」

「…」

おれも、いる。初めてだった。誰かに、初めて、仲間だと認められた。それが嬉しくて。嬉しくて…。

「ああ…」

涙腺が緩んでしまう。だめだ。見つともないだろ。こんなところで、泣くなんて。二人の前で。でも、心の底から震えるほど、嬉しいんだ。心から、生きててよかったと思える。

「あたり、前だ…！俺もいるぞ！お前達には、俺がついてるからな…！」

あおはる

「さあ…。これからどうするよ」

三人で一通り泣き喚いた後の、妙な倦怠感を身体中に感じさせながら、俺はそう切り出した。

現在午前十一時。もうそろそろ仕事に戻らないと、控えめに言っただけかなり大変なことになりそうだ。

「八神、お前は…」

八神は俺を見つめる。

「私、行くよ。ちゃんと行って、解決してくる」

「大丈夫？なんだったら私が…」

「大丈夫だよ。二人がついててくれるんでしょ？もう一人じゃないもん」

「コウちゃん…！」

遠山は感極まったように八神に抱きつく。

「私もパワーを最大限まで注入してあげる！」

「もう…。まったく、りんは…」

八神は呆れたように、しかし慈しむように遠山の頭を撫でる。

「ほら、司くんも」

「司くん……？まあいいや」

八神の……コウの頭をグシヤリとかき回す。

「わっ、ちよつと」

「ん。行つてこい。お前なら大丈夫だよ、コウ」

「……ありがとう」

俺は立ち上がる。

「さて、じゃあ仕事に戻ろう。そろそろ行かないと俺たちのまずい」

「そうだね……。コウちゃん、いける？」

「……うん」

その時の八神の瞳には、かつての輝きが、また、瞬いていた。

#

『イーグルジャンプ』に着いた。その時は緊張で、俺はもう汗で、全身シャワーを浴びたかのように濡れていた。部署の部屋に入る時は、それが最高潮に達し、汗のかきすぎで寒かった。

「よし、着いたな」

「…うん。そうだね」

コウは俺とりんを見つめる。

「二人とも、改めて、本当にありがとう。二人のおかげで、私は前に進めるよ」

「…見守っててね」

瞬間、俺にはコウの背中がとても大きく見えた。この後、こいつはなにか変えるかもしれない。根拠なんてないが、そう思った。

「山本さん、押野さん。少しお話よろしいですか？」

コウが話しかけに行った相手。山本真弓、押野梨々香。コウに危害を加えた人間だ。

「…何よ」

不機嫌そうに返す右側の女、山本が言う。キツそうなキツネ目で、思わずたじろいでしまう。

「先日のお話の件なのですが…」

「だから何？あたしはもうあんたと話すことなんてないよ。それとも何？諦める気になつた？」

突然ニヤニヤと口元を歪める。

「それはないです」

「…は？」

山本は信じられないというように言葉に詰まった。

「おいっ、フザケンナ！お前ー」

「梨々香！やめてよ」

押野の声が響きかけたのを山本が止める。押野梨々香。背が小さく、なんとなく、いつも誰かの後ろにいそうな、そんなイメージを抱かせる人だ

「…分かった。話を聞くよ。前のところでいいよね」

「はい」

そうして出て行ってしまった。

「おい、どうする。出たぞぞ」

「追いましょう。行くわよ」

コウ達に気づかれないうちに後をつける。

#

コウが倒れていた場所、つまり資料室に、コウ、山本真弓、押野梨々香が集まってい

た。何やら話し声が聞こえてくる。

「で、なんなの、話って」

山本はすこぶる不機嫌そうに 言い放った。それをコウは静かに聞いている。

「私は、メインキャラデザの仕事を受けます」

「はあ!？」

驚いたのは押野だ。

「なに、あんた話が違うじゃない!」

「でも、時間くれるって言いましたよね」

「う…。でも、それは、あんたがもうとづくに諦めてると思つたから…。」

「そんなわけないじゃないですか。私だって、キャラデザの仕事を目指してこの仕事に就いたんですから。あんなことされたって、私の意思は変えられません」

「まあ、そうよね」

「真弓っ!？」

「でも、あたしだって、夢だった。デザイナーになって六年。やっと、チャンスを手にできたと思つたのに。あんたさえいなければ…。」

山本が語気を荒げる。

「あんたには先輩を立てるって考えがないわけ!?!新人には新人の筋の通し方ってもん

があるだろ！」

「ないですよそんなもの！」

コウが二人を睨みつける。

「そんなもの、くだらない！先輩を立てる？筋？そんなつまらないものにこだわってるから、六年やつても結果が出ないんじゃないんですか！」

「あんた……！何言ってる！」

「私は、違う！私は上下関係なんて、考えてない！私は最初から、あの場にいる全員がライバルだと思って戦ったんだ！そして勝利を勝ち取った！それを、そんなくだらない理由で手放してたまるか！」

「だったらなんだ！お前の考えなんて聞いてない！あたしは、ただ、お前に譲れと言っているんだ！」

「いやだ！」

パアン……！

頬を叩かれた音が部屋に響く。

「ふざけんな……！」

「ふざけてない！叩きたけばいくらでも叩けばいい！あなた達がなにをしようと、私は、私の道を行く！それは、誰にも変えさせない！」

「……」

山本があまりの迫力にたじろぐ。もう諦めたか。誰もがそう思った時、

「……いいの？」

押野が口を開いた。

「八神。あんた以外のキャラ班は全員買収してある。たとえあんたがメインになったとしても、誰もあんたに従わない。それでもいいの？」

「いいですよ」

「……は？」

「別に、私に従う必要なんてないです。メインの仕事は、矢面に立つこと。私に従わなくても、全員がいいゲームを作りたいと思えば、それは必ず、いい方向に進んで行く。私はそう、信じています」

「……」

押野はもはやなにも言うことができない。満を辞して出した最後の策が、まったく相手にされなかった。

「ま、まって……」

それでも、山本は引き下がった。纏るように手を伸ばす。

「お願い……。ずっと夢だったの……。私も、同じ目にあつて、ずっと辛い思いをしてた

…。やつと…。やつとここまで来たのに…！」

「…私は」

コウは山本に目線を合わせる。

「確かにあなたに起こったことは、不幸だったと思う。でも、これは当たり前前だけど、自分がされて嫌だったことを赤の他人にやるのは、はつきり言つて間違つてると思う。…私は、正直、ほんのすこし前までは、諦めるつもりだった。それでも私が抗つたのは、私を理解して、励ましてもらったから。背中を押してもらえたから。あなたと私の違いは、そこだと思う。…私が言うのは筋違いかもしれないけど

…どうか、諦めないでほしい」

「…」

「………ううっ」

「ふぎけんなっ！あんたが言うなっ！そんなこと…！どの口が言うんだ！あたしがどれだけの思いで、今まで頑張つて来たか…！頑張つて頑張つて…。………。がんばつて…。」

がんばって、あたしは…。なんだ？あたしは、ただ、嘆いただけ…。こんなはずじゃ、

なかったって、ただ悔やんでいただけだった…。それを周りの所為にして、大事な人を傷つけた…。だけ…」

「…あなたは、まだ、始まっていないんです」

コウがゆっくりと語りかける。

「諦めずに進んで行けば、あなたが目指すところに辿り着きますよ。目の前のことを、一個一個…。私も、一個一個やっていかないと」

コウは立ち上がる。

「私は、もう行きます」

「あつ…」

押野は、それを止めることができなかった。

#

コウが部屋から出てくる。

「コウ！」

「コウちゃん！」

急いでコウに駆け寄った。

「つかさ…。りん…」

全身から力が抜けたように、ぐらりと揺れる。

「おっと…」
倒れないように抱きとめる。

「大丈夫か？」

「うん。…ううん。やっぱ大丈夫じゃない。…少し、休ませて…」

「ああ。当たり前だ…。頑張ったな」

「うん、本当に…。頑張った…。」

いつの間にかりんが泣いている。

「おいおい。そっちこそ大丈夫かよ」

「だいいよばないよおお…」

りんの目からぼたぼたと涙が溢れている。

「じゃあ、これから葉月さんのところに行ってくるね…」

コウはまだ気怠そうだ。

「しょうがねえなあ…」

コウを抱き抱える。

「うわっ、ちよ…」

「ほら、いくぞ。倒れられたら困るからな。付いてってやる」

「わ、わたしも…ひつく。いく…」

「はいはい。分かったよ…」

#

「まゆちゃん…」

押野が山本に声をかける。八神がいなくなってから、ずっと呆けたように項垂れている。

「まゆちゃん…。だいじょうぶ?」

「…りり」

「うん」

「私って、間違ってたのかな…」

「…」

正直、押野には答えられなかった。心のどこかでは山本を止めなければと思っていたのに。それでも、山本を一人にしてはいけなと思ったから、押野はここにいるのだ。

「わたしね。わたし、まゆちゃんのことを好きだよ。好きだから、まゆちゃんには嫌われたくなかった。あのことがあってから、わたしと、まゆちゃんとみゆちゃんが離れ離れになっちゃって…。美幸ちゃんは、今でも悔やんでる。わたしは、美幸ちゃんに頼まれてるんだ。まゆちゃんをお願いって。泣きそうな顔で…」

押野は山本の手を取った。

「今回のことは、正直、正しいとは言えなかったかもしれない。あの子の言う通り、わたしは、まゆちゃんの友達なのに、まゆちゃんの苦しみを、ちゃんと理解できなかった。だから、ごめんね……まゆちゃん、ごめんね……！」

「なんであなたが泣くのよ……。質問の答えになつてないわよ……。それにこれはあたしの問題なの。あなたには、どうこう言う資格はないの……」

「それでもだよ……わたしは、まゆちゃんのそばにただただいた。いるだけで勝手に自己満足で、まゆちゃんの気持ちを分かつてなかった！本当に、ごめん……！」

「……ばか」

山本は押野を抱き寄せる。

「そのいるだけが、どれだけあたしの力になったか。それこそあなたは分かつてないよ。それに、あたしの気持ちを分かつてないなら、これから知つてつてよ。あたしも、あなたのことが分かりたい」

「うん……！」

山本は天を仰ぐ。

「とりあえず、一個一個か……」

「どうしたの？」

「……一個。手伝って欲しいことがあるの」

「なに？」

「ミュに、謝りたい。見守っててくれる？」

「もちろんだよ」

#

「私、メインの仕事、受けます」

「そうか……」

あの後、俺たち一行は葉月さんの元へ行き、無事に、コウがメインキャラクターデザインになることを告げることができた。

「考えさせてくれと言われた時は、正直どうしようと思っただけど、よかった」

葉月さんは不安そうな顔をする。

「……何か、あったのかい？」

コウは、一瞬迷うようしてから、

「いいえ。何も」

そう、笑顔で答えた。

その後、約束通り三人で焼肉を食べに行った。明日も仕事があるのに、とコウが反対したが、そんなの関係ねえ!!とばかりに無理やり引つ張って行った。おそらく明日はニンクスの匂いで吸血鬼を撃退できるだろう。焼肉の最中、コウが今回の事件についてぼ

つぼつとこぼした。どうやら、キャラ班は、投票の結果を事前に知ることができらしい。だからこそ、今回のようなことが起こったと言える。嫉妬が度を越えた結果、暴走してしまったのだ。まあ、もう過ぎた話だが。

「すいません。注文いいですか」

近くの店員に呼びかける。

「ちよつと、さすがに食べ過ぎじゃない？」

「なーに、大丈夫よ。肉じゃねえから」

ずつと言ってみたかった言葉を、今こそ――

「生ひとつ」

「だめええ！まだ未成年でしょ！」

「ふふふ……あははは！」

三人で結局日付が変わるまで語り明かした。りんの内緒で飲んだビールはとてもうまくいったし、りんの過去の失敗談は本当に笑えた。コウもとても幸せそうに笑っている。

もう俺たちは学校に通っていない。立派な社会人のつもりだ。

でも、この時の風景に、思い出に、もし名前を付けるなら。それは、『青春の一ページ』だろう。

お仕事は、
青春だ。

スタートライン

何も無い部屋に電話が鳴り響く。

何時だ。まだ7時じゃないか。もう少し寝たいんだけど。…うるっせえ。昨日遅かったんだ。もう少し寝たって遅刻はしないだろう…。

……。

……。

……。

携帯電話の通話ボタンを押す。

「…はい。もしもし」

『ちよつと。人にあれだけ頼み込んだくせに呑気に寝てるんじゃないわよ』

「…。…。ああああ?!」

そのとき、俺は思い出した。今日は。決して遅刻してはいけない、重要な会議があること。そして、それに備えて資料整理しなければならないという理由から、いつもより早めに行かなければならないこと。そして、そうするために、コウにモーニングコールを頼んだこと。しかし、あれだけ渋っていたのに、よくかけてくれたものだ。ちなみに、

りんは朝起きられないそうだ。

「す、すまん！ありがとう！この借りは必ず返すから！」

『はあ……。ま、いいけど。これで貸しひとつね』

「う、分かった……」

一瞬、コウに借りを作るのは危険な気がしたが、それも仕方ないと割り切る。そもそも忘れていた俺が悪いのだ。

「とにかく、ありがとう。助かった」

『はいはい。頑張つてね』

ぶつりと電話が切れた。

そこそこ寝起きの悪い俺だが、起きてからの行動は早い。速攻でシャワーを浴び、速攻で冷蔵庫から卵と醤油、そして、あらかじめ凍らせておいた白米を取り出す。そして解凍した後、卵と醤油をぶち込み速攻で胃にかき込む。歯磨きをし、ワックスをセットして、扉に鍵をかけて最寄りの駅まで走り出す。ここまでの時間、約十分。『イーグルジャンプ』まではだいたい二十分かかるので、ちょうどいい感じだ。結果、かなり余裕を持って出社できた。

「おはようございまーす……」

薄暗い仕事場へと入る。誰も来ていないようで、人の気配がない。思わず小声になっ

てしまう。

「よしっ、やるか」

とりあえず電気をつける。外からの日光も相まって、かなり明るくなる。すると、誰もいないと思っていたデスクに、仕事をしていたような形跡がある。コウのだ。電源を落としたPCに、キャラクターの絵が描かれている紙が何枚か。これを見て、おれの中に一つの考えが浮かんだ。

もしかして、先日の事件でまだ燻ってる連中が、何かしたんじゃないか。

あれは一応の解決をし、和解も済ませたはずだが、別でコウのことが気に入らない奴らがあく工作しようと、デスクを弄ったのかもしれない。

「…まずいな」

コウのデスクに近寄る。何か失くなったものや盗まれた跡がないか探そうとすると、
「何やってんの？」

後ろから声が聞こえる。振り向くと、コウがいる。そいつは、とんでもない格好をしていた。

「…は …は」

開いた口が塞がらなかった。コウは、上に黒い少し大きめのシャツを着ている。少しラフだが、先輩たちもラフな格好はいくらでもしている。

しかし、下は穿いてない。下着だけ。下着だけだ。

「そりやないだろ…」

「何が？」

「いや、お前、せめて何かで隠すとかさ…」

「何を？」

気づいていない。前々から少しズボラっぽいなあとは思っていたが、これは致命的だ。

「とりあえず、目のやり場に困るから、スカートかズボンくらいはいてくれ」

「ああ、これ。だつて暑いし。動きずらいから」

「だからつて…。女なんだから。襲われても知らんぞ」

「襲うの？あんたが」

「いや…。どうだろ」

「ま、いいや」

そう言つて、自分のデスクにコーヒーを置く。

「それよりも、いいの？仕事。そのためにモーニングコールしたのに」

「ああ、うん。それはするけど…。お前は何でいるんだよ」

「私？私は仕事してたら遅くなつちやつて。そのままじゃあ明日の分の仕事しようか

と思つて」

「それで、その格好？」

「うん」

「そうか……」

そこまで堂々とされると、逆にこつちが間違つてるように思える。あんな格好ができるのも、ここが安心できる場所になつたからだろうか。そう結論づけ、自分の席に着く。

今日は、『イーグルジャンプ』の出資会社である『芳文堂』との重要な会議だ。樫井さんからはあまり気負うなど言われているが、それでも重要なのは変わらない。今日は五月の終わり。この会議は、今まで組み立ててきたスケジュール、予算、そして何より、先日無事決定したメインキャラクターデザイナー、八神コウのお披露目会でもある。大なり小なり緊張するはずだが……。下半身半裸で優雅に（呑気に）コーヒーを飲んでいるコウを見ていると、少々腹が立つてくるといふものだ。そこで、俺は報復のために、ある人物に連絡することにした。現在8時少し過ぎ。もうそろそろ起きないと会社に遅刻する時間だ。

#

凄まじい足音が聞こえて来る。

「コウちゃん!!」

まだ俺とコウしかいないオフィス。二人とも無言で仕事しているので、静かになるのは必然だ。そこに飛び込んできた大きな声。呼ばれた張本人が、前のめりに突っ伏す。

「りん!?なに、どうし」

「どうしたもこうしたもない! 司くんに頼まれて、コウちゃんに似合いそうな服持ってきたのに! その格好はなに?」

「格好?…あ、これのこと」

「女の子なんだから、もう少し自覚をもって! コウちゃん可愛いんだから!」

「かわ…!」

可愛いという言葉に反応して赤くなるコウ。そして、忌々しげに俺を睨む。

「司…! あんたか!」

「いや、俺はなにも言っていないぜ? ただコウの服がダサいから、女っぽいかわいい服を持ってきてやってってくれって連絡しただけだ」

「とにかくこつち!」

「あ、ちよ、りん! 司、あんた覚えてなさいよ!」

別の部屋に引つ張られていく。

10分後。

コウは、驚くほど綺麗な格好をしていた。

「おう…」

上はレースが編み込まれた薄手のセーターにカーディガンを羽織っている。下は上品なロングスカート。何というか、先ほどまで半裸だったとは思えない。思わず見とれてしまうほどだ。その横で、りんは、鼻高々といった風に、コウを見つめているが、当の本人は、顔を真っ赤にして少し、いや、すこぶる照れているようだ。どうやら今までこういった格好をしたことがなかったらしい。

「そ、そんなに見ないで…」

パンツ一丁は恥ずかしくないのに、こっちは恥ずかしいらしい。感性が違いすぎるよ
うだ。

「よく似合ってるよ。見違えた」

「ほら、やつぱりコウちゃんは可愛いよ。よかったね、褒められて」

「いや、そういう問題じゃ…」

普段から涼しい顔をしているせいで、余計に赤くなった顔が目立つ。

「さ、なんかいいもん見たし、お仕事しますかね」

「あ、そっか。私も準備してこないと。じゃコウちゃん、メイクもしてあるんだから、崩しちゃダメよ」

「そんな…」

その後の仕事は、なんだか引くほどに集中できた。やはりコウのおかげだろうか。

#

「さあ、準備はいい?」

樫井さんが声をかける。

「もちろんです。いつでもいけますよ」

それに、余裕を持って答えた、つもりだ。本当は、かなり緊張している。今まで十八年間生きてきて、こういった会議に参加したことがなく、得体の知れなさに戦々恐々している。そうこう考えているうちに、会議室の前までついてしまった。樫井さんが、ドアを4回ノックする。

「失礼します」

中に入ると、そこにはすでに、ディレクターである葉月さん、メインキャラクターデザイナーのコウなど、それぞれのチームのリーダーが出席している。そして机の反対側には、メガネをかけた、ブロンドの若い美人の女性がいる。

「お、きたか。早速着席してくれたまえ」

葉月さんがおどけて言う。それに対して、ブロンドの方は、「まったく…」といった表情をしていることから、二人の付き合いは長いのだろう。

「初めまして。私は、『フェアリーストーリー』のプロデューサーの樫井美幸です。

こちらは補助の宮前です」

「初めまして。宮前司です。お見知り置きをお願いします」

こちらの挨拶にブロードの女性は厳しそうだっただ顔が崩し、にこりと笑みを浮かべる。

「初めまして。私は大和・クリステイナ・和子といいます。このチームの総合プロデューサーを務めさせていただいております。本日は、芳文堂からの具体的な条件などをお話するために参りました」

「わざわざご足労頂き、感謝いたします」

「いえ、これもひとえに、いいゲームを世に出すためですから」

樫井さんと芳文堂のプリンシパー社員、大和さんとの挨拶が続く。ああいったビジネストークはまだ完全ではないので、全くの樫井さん頼みだ。

「この子は名前でもうわかると思うけど、フランスと日本のハーフさんなんだ。表情動かないから誤解されがちだけど、これ照れ隠しだから。かわいい子だから、優しくしてやってくれよ」

「ちよ、ちよつとしづく！余計なこと言わないでくれる!?!コホン。失礼。少々取り乱しました」

「は、はあ…」

これには流石の樫井さんも苦笑いだ。

大和さんはもう一度咳払いし、緩んだ空気を締め直す。

「さて、本日は会議の第一回ということで、まずは、そちらの具体的なスケジュールや予算をご説明頂いてよろしいでしょうか」

「はい」

樫井さんが先ほど俺がまとめた資料を手に立ち上がり、備え付けてあるスクリーンのそばに立つ。プロジェクトを起動し、カレンダーを映す。

「五月現在、それぞれのチームのメンバーが大方固まり、キャラクターデザインや作画、音響などのトップからそれぞれの作業の目処を提出してもらい、マスターアップを十一月末、発売予定日を十二月始め、これらを目標とした、詳しいスケジュールがこちらとなります」

スクリーンのカレンダーのそれぞれの日付に、具体的な作業が書かれた。それを見て、大和さんが口を開く。

「少しよろしいでしょうか」

大和さんが手をあげる。

「この書類に、このゲームはフルボイス仕様と書いてありますが、メインキャラクターのキャストが揃うのはだいたいいつ頃になるのですか？」

確かに、このスケジュールにはキャストのことが書いていない。というのも…。

「はい、そのことなのですが、なにぶん、この会社にはそのようなノウハウがなく、声優事務所に対しての問い合わせが追いつかず…。実は、そのことを本日はお願いしよう」と

「わかりました。では、この件は我が社持ちということで」

「ありがとうございます。次に予算ですが、大まかには、資料の4ページに書いてある通りとなっております」

大和さんは、資料をじっと、集中したように見つめる。

「はい、了解しました。では、このように、上には報告します」

思わず、安堵して、息を吐いてしまう。これで、ゲーム制作が金銭面で滞ることはないはずだ。

「では、最後に芳文堂からの要望をお話しします」

大和さんの顔がますます真剣になる。

「まず最初に、売り上げです。我が社としては、初めてのゲーム業界参入。あえて夢を見ずに、手堅く、元が取れる程度に、ということ、十万。十万本を目標に据えたいのですが、これについて、何かございますか？」

開発チームがにわかになぞわつく。売り上げ十万本。利益はだいたい一億前後だ。手

元の資料、予算に関するページを読む。開発費約1200万円。これは、仮に大失敗したとしても、ギリギリ元が取れる、売り上げから見れば失敗と言えないように、また次に繋がるように構築されている。しかしこれには一部のチームから反対意見も出てくるのも事実だ。堅実すぎると。ここでもし、あらかじめ想定していた売り上げ数を言っ
てしまえば、それは最終的な決定になり、会社全体に伝わる。つまり、会社全体の士気に関わる。誰しも失敗前提のゲームより、十万本を目指しているゲームの方がやる気は出るだろう。皆それが分かっているから、迷ってしまう。そうするうちに、ある人物に視線が集めりつつある。

「了解だ」

ただ、それだけを言った。その姿は自信満ちでいて、初めて、この人は人の上に立っている、責任を持っている人であることに気づいたことを自覚した。さすがに無茶だと思っただのか、ディレクター補佐の女性が苦言を呈す。

「は、葉月さん。幾ら何でも初出で十万は…」

「何言ってるんだい？ここには、今世に出ているの有名ゲーム会社に匹敵、いや、それ以上の逸材がいるじゃないか。この面子が揃っていて、万一にもつまらないゲームなんて、果たして作ることも出来な？出来るわけじゃないじゃないか」

葉月さんは、周りを、この会議に出席している全てのメンバーの顔を見つめる。

「売り上げ十万本？上等じゃないか……！私達の力を見せてやろう！大丈夫だ。責任は、全て私取る」

思わず、拍手が出てしまう。周りも同じのようだ。

葉月しずくは不敵に笑う。それを見たら、先ほどまで感じていた不安が嘘のように消えてゆく。この人がいれば大丈夫だ。根拠などないが、勇気が溢れてきた。

さてと

「では、第一回の会議は、これにて終了ということ。お疲れ様でした」

「はい。こちらも、とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございます」

「はいました」

樫井さんと大和さんが互いに礼をする。そうして、『フェアリーズストーリー』の初めての会議は、何の波乱を起こすことなく、無事終了したのであった。

#

「き、緊張した……」

会議室から出るやいなや、コウは全身を脱力させて、倒れかかった。難なく受け止めたが、正直、今更かよ、と思っただけでなくもない。

「よく言うぜ。会議前はパンイチで歩きまわってたくせに。あのあとりんにと叱られてたよな」

「しようがないじゃん。スカートとか、なんかこう、ムズムズするから」

「全然全くしようがなくなる。スカートが嫌なら、ズボンでも履いてこればいいじゃないか」

「違うの。下に何か来てくるのがやなの」

「こいつは…。」と思いはじめると、ちょうど目の前をりんが通りがかった。

「あ、コウちゃん、司くん。葉月さんが呼んでたわよ」

「葉月さんが？なんのようだ？」

「私も、つて言つてたけど…。とりあえず、一緒に行こっか」

#

「君たちに、話してたおかなければならないことが一つある。これは、社会人にとっては重要かつ死活問題だ」

「…」

いきなり始まった物々しい雰囲気、何も言えない。

「普段はこんなことしなかった。我々だって、予定以外のことはしたくない。しかし、これは我々の信用問題だ。関わるんだよ、すごく」

「…」

「そこで我々は、ある決断をすることにした。これはイーグルジャンプの、総意だ」

「…あの、なんの話ですか」

「君たちの給料の話だが」

「…ああ」

そう言えば月末だったな。

「本来なら二日前には支払われる予定だったんだけど、どうにもドタバタしているうちに支払いが滞ってしまってたね。初任給に気持ちをちよつと上乘せというわけさ」

「気持ち上乘せ…?」

「やったねコウちゃん!これでもつと豪華になるね!」

「うん。夕食のグレードをあげてもいいかもしれない」

不意に葉月さんの電話が鳴った。

「うん?うん。うん、了解だ。うん。今から行く。うんうんわかってるって。…悪いね。パブリツシヤー様からの呼び出しだ。話はこれで終わりだけど、何か質問ある?…よし、じゃあ、給料は今日、しっかり振り込んでおくから、確認しておいてね」

#

ディレクターの事務所を出る。

「初任給かあ…。なんか、お給料もらうと社会人って感じがするなあ」

「そうだね。いつまでも学生気分じゃられない」

りんのつぶやきに、コウが同意する。

「司くん?どうかしたの?」

りんが顔を覗き込む。どうやらぼうつとしていたのを見抜かれたようだ。

「いや…。なんか懐かしくて。仕事で給料もらうのは久しぶりだから」

「ふーん…。なにかバイトとかしてたの？」

コウが聞いてくる。

「ああ。まあ、そんなかんじ。…そう言えば、夕食とかなんとか言ってたけど、二人でどっか行くのか？」

「うん！私とコウちゃん、温泉巡り！お給料もらったら二人で行こうねって、ずっと前から計画してたの！」

「女ふたり旅だから。誘えなくて悪いね」

「いや…。全然。楽しんでこいよ」

#

帰り道、バイクを飛ばしながら、考えに耽る。

仕事の給料。労働に従事する時間を金で買うシステム。このたった十八万円が、金額以上に輝いて見える。今までの自分が稼いで来た金が、いかに汚れているか思い知らされるように、苦しくなる。

途中、銀行に寄って、少しだけ降ろす。そして、その足で花屋に寄り、そこでとびき

り上等な、美しい花を買う。これで準備は万端だ。

そうして国立に向かう。

一面に広がる、黒い景色。霊園に來た。その中の二つに、先ほど買った花を供える。

「元氣か？お父さん。お母さん」

#

「おはようございます」

六月の初め、土曜日。予算のさらに具体的な計算をするために、いつも通りの休日出勤。来る途中、動物園に向かう親子の和やかな会話を聞いて、情けなくも泣きたくなってしまうが、そんなことは関係ない。今日からコウとりんは岐阜の方に温泉に行っている。あいつらと仕事場で会わないのは新鮮だ。自分の席につき、デスクトップを立ち上げる。資料室から予算関係のものを片っ端から持って来て、計算する。

「…」

誰もいない仕事場に、キーボードを叩く音だけが聞こえる。普段から近くに誰かしらいる状況に慣れている身で、一人きりは珍しかった。

「あ、司くん」

「葉月さん」

葉月さんが入って来る。どうやら、俺がいるとは思わなかったらしい。

「ちようどよかった。君に言わなくちやいけないことがあるんだ」

「言わなくちやいけないこと？」

「今度、メインキャラクターのオーディションがあるでしょ？君にも参加して欲しいんだ」

「…え？俺がですか？な、なんでですか」

「おいおい、君が『アスカ』を生み出したの、まさか忘れたのか？」

『アスカ』というのは、『フェアリーズストーリー』で、俺が考えた主人公のライバルキャラだ。

「そりや覚えてますよ。でもいいんですか？俺みたいな新米が現場に乗り込んで」

「いやあ、現場責任者の大葉さんが呼んでこいって言うってたから。いいんじゃない？君も必要だよ」

「でも、まだプロトタイプもできてないのに…」

「あ、それは、ボイス付きにすることにしたらしい。この前の班長会議で決まったんだ」

「わかりました。そういうことなら、いくらでも参加します」

「よし、じゃあ、大葉さんに伝えておくよ」

そんなこんなでオーディションに参加。どんなことになるやら。

オーデイション

「やて…」

後日。キャラクターのキャストを決めるオーデイションにスタッフとして入り込むという想定外の自体に、とりあえずオーデイションを受ける役者の人たちを調べることから取り掛かった。

俺がキャラ設定を施した『アスカ』は、いわゆるダークヒーローだ。幼い頃、自分の街を魔王軍（まだ詳細な名前は決まっていない）に襲われ、両親や友達を殺された彼は、復讐のため、常人には耐えきれないほどの訓練を行い、凄まじいほどの力を手に入れる。同じく魔王軍を倒すという目的を持った主人公『シン』と出会い、互いに友情を感じ合うが、やがて方向性の違いや、生まれ育った環境の違いから、思いがすれ違い、最終的には敵対してしまうが、魔王の不意打ちから主人公を守るために命を落とす。ある意味、自分の理想を描いたので、それに伴う魂のこもった人に任せたい。

名簿上から順に名前をインターネットで調べ、事務所のサイトにあるサンプルボイスや、その人が出ている作品を見る。やってみてわかったが、以外に重労働だ。ただでさえ普段、アニメや漫画などのサブカルチャーには疎いのに、それをぶっ続けで見るのは、

少々堪えるのだ。

十数時間後。名簿を全て網羅した後、燃え尽きたように寝てしまった。そして、自分のスマホにメール着信音がなったことに気づかなかった。

#

「……んー……」

机に突っ伏したまま寝てしまったようだ。無茶な体制で寝てたせいで、体が痛い。ポキポキと骨を鳴らしていると、スマホにランプが付いているのが分かった。

「なんだ……? 『予定変更のお知らせ。オーディションの日付が翌日の朝九時から』……はあ!」

急いで時間を見る。現在朝の七時少し過ぎ。今から急いで支度して事前に調べておいたスタジオまでぶっ飛ばせばギリギリ間に合う。そう思った瞬間すぐに行動を開始した。……なんか前も同じようなことあった気がする。

#

「遅れてすみませんでしたア!」

結果、二分遅刻した。たかが二分と思うだろうが、社会人にとっての二分はいのちと同価値だ。

「うん? 大丈夫だよ。みなさんくるのは九時半だから」

スタジオの椅子の方から声が聞こえた。答えたのは音響監督の大葉サエさん。キャラクターのボイス、BGMや主題歌などを一手に管理する、ゆるふわヘアーのおしとかで美人な方だ。それを吟味してよく考えると、このチームは本当に女子しかない。

「そうですか…。良かった」

「うん。でも、次は気をつけてね」

「はい。それはもちろん」

話していると、？せぎすの背が高い、男性が近づいてきた。

「どうも。あなたが宮前司さんですね。会えて光栄です」

「はあ。あの、そちらは…?」

「あ、失礼しました。私、タテビジロウといいます。まだ駆け出しですが、小説家兼、脚本家をやらせていただいております」

そう言って、タテビさんは握手を求めて来た。それに応じる。

「何を隠そう、彼が、あなたを呼んだのよ」

「え、そうなんですか？てつきり大葉さんが呼んだのかと」

「アスカの設定を見た瞬間、まさしく電流が走りました。このキャラクターこそ、この『フェアリーズストーリー』に最も必要だと。このオーディション、アスカの生みの親であるあなたがなければ始まりません」

「そ、そんな。持ち上げ過ぎですよ」

「いや、私はまだペーパーですが、人を見る目だけはあると自負しているんです。私の目に狂いはなかった。あなたとなら、いい作品を作れます」

その真つ直ぐな瞳に吸い寄せられてしまう。タテビさんも、ある意味、コウと似た人なのかもしれない

コウは自分の力を信じていて、タテビさんは、自分を含めた周りの環境を信じている。「はい、やりましょう！僕たちならできます」

だからではないが、熱意に押されてしまうが、悪い気はしなかった。

#

午前九時半。オーディションが始まった。

参加者総勢三十六名。ベテランから新人まで、幅広い層が集まった。

スタジオ前のコントロールルームから、大葉さんがマイクの前に立つ。

「これから、『フェアリーストーリー』の主要人物、『アスカ』のオーディションを行います。この『アスカ』というキャラクターはこの物語の中で、最も重要な役所の一つですので、ぜひ、みなさんの奮闘を期待します。そこで、『アスカ』の生みの親である我が社のプロデューサー、宮前司さんに、ご挨拶いただきます」

ギョツとして大葉さんを見上げる。こんな聞いてないが…。

「大丈夫。一発かましてやって！」

「いやいや…」

勘弁してくれ、と言いついそうになるが、遅刻した手前、文句を言いづらい。こうなつたら腹をくくるしかないか。

「えーつと…」

立ち上がると、ざわつく。それもそうだろう。プロデューサーと言われた奴が、十代そこらのガキだったのだから。

「みなさん。改めて、今回は集まっていたいただき、ありがとうございます。今、僕が言いたいことは一つです。…こいつは、結構苦労して作ったもんで、言うなれば、僕の子供か半身です。そして、世に出すなら、こいつをもつともつと輝かせてやりたい。そのために、みなさんの協力が不可欠です。お願いします」

頭を下げる。すると、しばらくして拍手が鳴った。

「良かったよ。さすがうちのホープ」

「いやあ、勘弁してください…」

自分が何を話したか全く覚えてない。頭の中が真っ白になってしまった。再び、大葉さんがマイクを持つ。

「では、これより、開始します。配られた番号順にお呼びしますので、別室でお待ちください」

#

オーディションの審査員は、基本的には俺、大葉さん、タテビさんで、その補佐に芳文堂から一人来ている。しかし、彼の目的は進捗の確認なので、特に口は出さないそうだ。そんなに知名度も高くない会社の、初めてのゲームで、政治的キャスティングもクソもないだろう。

まず、最初は赤井プロダクションのザキシマナガノブさん。新進気鋭の声優で、近年有名になった。最近ではソーシャルゲームの課金芸で話題だ。

「とうっ！」

「やあっ！」

「俺は、お前とは違う……！」

と、アスカのセリフを言っていく。

「はい。ありがとうございます。…そういうえば、聞きたいのですが」

「はい、何ですか？」

一区切りついたところで、疑問も口にする。

「何で『ふりー!』のハルカと同じ演技なんですか？」

「…はい？」

「違うのを聞かせてください。そんなただのイケメンは、アスカじゃないです。：
オーケイ。じゃあ次、お願いします」

「…」

次はアチョキツク・モンチーの杉野智さんだ。

「…はい。ありがとうございます」

次は、たんぼぼの深沼慎太郎さんだ。

「…はい、ありがとうございます」

#

最後の一人が終了する。

「お疲れ様でした。宮前さん、どうでした？」

「…」

「宮前さん？」

タテビさんが話しかけてくるが、その時の俺には聞こえていなかった。なにか、モヤモヤする。引っかかる。

「…絶対にこの中から選ばなきゃいけないんですか?」

「まあ、そうね。でも、どうしたの? 人気のある方ばかりだし、素晴らしかったわ。この中から一人だけなんて、少し残酷よ」

「…なんか、違います」

「違うって?」

「確かに、みなさん素晴らしかった。しかし、その中に声をつけると、狭まるんですよ。僕の中にあるアスカが、しぼんでしまう。声がつくことで、死んでしまうような…。それに、僕は事前に、今日くる方達の声を聞いたんです。そして、今日を迎えた」

「…それで?」

「違わなかったんです。今まで見て、聞いて来たばかり何です。違うキャラなのに、声のトーンが全く同じなんです。それに、すごく違和感を抱きました」

「…でも、人間が出せる声の幅には限界があるわ。その声が過去の役と同じ声音だったとしても、それは仕方ないことなのよ」

「でも、そうすると、アスカが、全く関係のないキャラと同列視されてしまう。単に声優が同じだったという理由だけで」

「まあ、人気のあるから、今までたくさんさんの作品に出てるし、それも仕方ないことなんじゃないかしら」

「さつきから仕方ない仕方ないってなんなんですか！妥協してたら何も始まらないでしょうが」

「でもそういうしかないじゃない！わがままなんて言つてられないの！ここは社会なのよ！学校や家じゃないの！言ったことが何でも通るなんて大間違いよ！」

「そんなの分かつてますよ！でも、大葉さんからは、人気声優を起用して、それで数を稼ごうとする魂胆が見え見えです！」

「その何が悪いのよ！現にそうするしか方法はないの！彼らのファンに買つてもらえれば、数は伸びる！そうやって次に繋げないといけないの！生き残るために！」

「その弱腰な姿勢は、すぐに気取られます！そしてそれはゲームのクオリティーにも関わる！音響監督という一つのチームのリーダーであるあなたがそんなでどうするんです！」

「そんなの余計なお世話よ！まだ社会に出て一年どころか半年も経っていない小童が、調子に乗らないで！」

「もういい！」

タテビさんが口論を遮る。

「お二人の情熱は、身にしみました！しかし、ここで言い合いをしたって、何も解決しない！後に会議を開き、しかるべき決定を下しますから、それまで我慢してください！」

「…」

「…分かったわ」

そういうと、大葉さんは自分のバックを取る。

「お疲れ様でした」

帰ってしまった。ブースには、微妙な空気が流れる。

「さて、では僕たちも行きましょう。宮前さん、この後いっぱい、どうですか？」

「いや、気分じゃない以前に、未成年なので」

「そんなのバレません！行きましょう」

#

そうやって連れられたのは、居酒屋『さぎ』。

「ここ、さぎって名前のくせに、酒とツマミの味に騙しはないんです」

「はあ…」

のれんをくぐる。中には数人しか居らず、静かな空気が中を満たしていた。

「いらつしやい」

「おう、二人で」

「おや、珍しい。お連れ様がいるとは」

「あ、どうも…」

声をかけて来たのは、カウンターに立っていた若い男性だ。

「こいつは三代目の店主。こっちは僕の同僚」

「いらつしやい。ご新規さんが来てくれるのは嬉しいねえ。店主の☒です」

「はい、宮前です」

「気軽にワカって呼んでやれよ。まだ継いで日が経ってないんだから」

「まだまだ修行中です」

「おく、空いてる？」

「はい、ちようど」

「じゃあ、そこ行こう。あ、空持って来て」

「はい、喜んで」

通されたのは、奥の座敷席だ。

「よく、ここ来るんですか？」

「うん。嬉しいことがあった日も、悲しいことがあった日も。∴あ、そういうえば口調が」

「別に気にしてないっすよ。ていうか、俺の方が年下だし」

「そうなんだよね。でも、大人っぽいって言われたい？なんか修羅場潜ってそう」

「いや、そんな。まだ社会に出て一年どころか半年も経っていないただの小童ですよ」

日本酒とお猪口二個、そしておつまみが運ばれた。

「では、まずは、出会いを祝して、乾杯」

「いや、だから未成年」

「どうせ後一年ちよいでしょ？気にしない気にしない」

「…じゃあ、一杯だけ」

「お、いいねえ」

クイツと一気に煽る。日本酒独特の苦味と風味が口いっぱい広がる。

「あ、美味しい…」

「お、わかるかい？この独特の風味、好き嫌いが分かれるんだけど、君はなんか好きそうな感じしたんだよ」

「はい、ちよつと日本酒舐めてました」

「そのツمامミ食ってみな。枝豆と鶏そぼろ和えただけだけど、酒に合うんだ、これが」
「う、うめえ」

日本酒とおつまみのマッチ加減に舌鼓を打つ。

「…すいません、誘ってもらっちゃって。あの後一人で帰ってたら、きつと一人で悶々としてました」

「あんなのは、よくあることだよ。特に、新人のころは一番くる。社会の理不尽さを、

すこしは感じることができると

「はい。やっぱり、仕事の以上、売り上げは大事なわけで。名前で稼ぐのも、一つの方法なんですよね…」

「うん。大葉さんの言ったことは、残念ながら、正しいことだ。社会と数字はどうしても密接に関係してしまう。これはどうしようもないから。そして、クリエイターと製作は、分野が完全に違う。違うからこそ、お互いのお互いに対する齟齬ができる限り無くさなきやいけない。それでいて、音響というのは、クリエイターの中で製作にもっとも近い。なんとたつて声を司るから。人気声優の一人もいない作品は、価値がないと割り切つてるような所も、あるみたいだしね。…要は戦略さ」

「でも、それでも、あそこで俺が言ったことは全部本心です。声がつくと、自分の中のイメージがしぼんでしまう。それが嫌なんです」

「それはすごくわかる。キャラクターは、己の内にいるときは、どんな変化をも行うことができるが、一度外に出してしまえば、それはどんどん固定化されていってしまう。これもある種のジレンマだよ」

「…どうすればいいんでしょうか」

「さあ…」

「さあ…」

「だってこの問題は、あくまで君自身の問題はだ。僕ごときが口を出していいことじゃないさ。決めるのは君だ」

「じゃあ、タテビさんはどうしたんですか」

「抗ってるよ」

「え？」

「僕は、社会だかなんだか、知ったこつちやないとおもってる。僕は自分の納得するものを作りたいし、それができるとおもってる。自分がこれを作りたいっておもったら、理想まで全体を引っ張ってきた。今までもそうして来たし、これからもそうするよ」

「抗う……」

「でもこれは、一意見だ。これは、君が決着をつけなくちゃ」

#

ご飯を食べ、タテビさんと別れた後、バイクを引きながら帰った。決着をつけるのは自分だ。その言葉が強く胸に残っていて、だからこそ、前を向いて考えなければ、と思つた。モヤモヤなんかしてられない。前に進み続けなければ。立ち止まるわけにはいかない。一等星が、俺を燦然と輝かせた。

責任

翌日。出社した俺は、すぐさま葉月さんに呼び止められた。間違はなく昨日のことだろうと、怒られるのを覚悟していたが、

「昨日大葉ちゃんと喧嘩したんだって？昨日大葉ちゃんから電話があつてさ。たくさんいいねってさ」

「…たくましい？」

「うん。ほら、君、前は何か意見の食い違いがあつても、カンケーねーみたいに澄ました感じだったから。大葉ちゃん喜んでたよ。情熱がある子と一緒に仕事できて嬉しかった」

「そんな…。昨日だって、散々失礼なコト言ったのに」

「ケンカなんてこの業界じゃ日常茶飯事さ。妥協や馴れ合いじゃないんだ。各々が思ういいものを作りたければ、そりやお互いに思ういいものは違うんだから、意見の違いは出るさ。それを擦り合わせてその理想に近い、納得の行くものを作るのが、私たちなんだよ」

胸にしみた。昨日のタテビさんの言葉が土壌になって、肥料みたいに染み込んだ。そ

うだ。妥協じゃないんだ。いいものを作るためには、意見の衝突は避けられない。避けられないこそ、それを最大限利用するんだ。おかげで、自分のこれからのやるべきことが見えた気がする。

自分のスマホが鳴る。どうやらメールが来たようだ。差出人は、大葉さん。

『本日十四時。第二会議室にて、会議を行います』

これで後戻りは出来ない。しかし、もう腹はくくったつもりだ。あとは突っ走るだけだ。

#

「では、これより会議を行います」

大葉さんの司会で始まった会議だが、この場には三人しかいない。大葉さん、俺、そしてタテビさんだ。他の方々が、このことならこの三人に任せても問題ないと判断して、信頼してくれたおかげだ。

「この会議では、前回オーデイションで難航したアスカ担当声優を決めたいと思います。そのためには、議論を尽くす所まで尽くすつもりです。よろしくお願いします」

「…そのことなんですが」

あれからずつと考えていたこと。妥協じゃない、馴れ合いや諦めでもない、それなりに無謀な挑戦。

「俺の意見は前と変わりません。キャラクターに声をつけると、そのイメージが変わってしまう。その代案を考えました」

「…わかりました。それで、その代案というのは？」

「まだ世に出ていない役者さんを使うことです」

「世に出ていない…？」

「はい。デビューして間もなかったり、あまり出演作がない人たちです。言い方は悪いですが、その人たちはおそらく、人々耳に残ってないはずですよ。この際、まだデビューしてなくても構いません。…これが、代案ですよ」

「…」

大葉さんは、しばらく考える素ぶりを見せる。

「タテビさんは、どう思われましたか？」

「なかなかいい案だと思うよ。でも、そうするともう一回人を集めなきゃいけない。それに、わざわざ集まってオーディションしたのにそこから役が一人も出ないっていう文句も絶対くる。それはどうするつもりだい？」

「そ、それは…。誠心誠意、謝るっていう…」

「残念ながらそれじゃ甘いなあ。社会はそんな甘々じゃないんだ。謝れば許してもらえないのは学生までだぜ。それに、声優たちを集めた芳文堂の面子もある。おいそれと謝

れないし、まず、謝りに行かせてもらえるかどうか」

「そんな…」

「それに、仮に君が謝りに行ったとしても、君みたいな新人社員の頭なんて、何も価値がないって一蹴されるのがオチだ」

「…」

一気に目の前が真っ暗になる。ない頭を絞ってやつと捻り出した答えは、ここまで隙だらけだったのか。

「じゃあ、音響監督の頭なら？」

「…へ？」

「タテビさん。どうなの？」

「まあ、価値はないとは言い切れない。…ちよつと待つてくださいよ。本気ですか？」

「さあ？ 私は質問してるだけです」

「…大葉さん？」

「宮前くん。先日、君に言われたことを、自分なりに考えてみたの。確かに、私は音響監督だから、キャラクターの担当を決める権利、いや、義務がある。でも、それを必死に考え出したのは、あくまでキミたち、クリエイターだってことを、いつの間にか、忘れていた。あの時否定したけど、確かに私は、妥協をしていたのかもしれない…」

そして、俺の目をまっすぐ見つめる。

「これは、初めてのゲーム業界参入。失敗、挫折はかならずあるけど、それを乗り越えなきゃいけない。この一件は、一つの関門だと思う。あなたが、本気なら。本気でアスカのことを、そして、このゲームを良いものに、いや…一番にしたいなら、私は、このちっほけの頭を何度でも下げます」

もう戻れないぞ。目が語っていた。良きさ。やってやる。もとより玉碎覚悟の特攻のつもりだった。それに少しのリスクが加わったところで、痛くも痒くもない。

「はい。俺は、やりたいです。一番にしたいです！大葉さん。お願いします…！」
できる限り深く頭を下げる。この感謝が、少しでも伝わるように。

「参ったなあ。本当に出来ちゃった」

タテビさんは降参だというふうには、頭をかく。

「もしかして、とは思っていたけど、まさかなあ…。わかりました。じゃあ、自分も同行しましょう。僕の頭なんて軽いから、いくらでも下げられますよ」

「タテビさん…」

涙が出そうだった。もしかしたら少しチビってしまったかもしれない。そのくらい、全てに感謝した。この仲間と、環境に。

「じゃあまず、葉月ちゃんに直談判しに行きましょうか」

「はい」

「しょうがない。頬をひっぱたかれに行きますか」

#

「え、全然いいよ？なんかそんな予感したし」

「はい…？」

「まじ」

「…」

全く予想していなかった答えに、三人とも絶句した。

「大丈夫。私あつちに貸しがあるから。安心してよ。多分、その新人さん集めるってのもイケると思う」

トントン拍子に進む話に、着いて行けなくなってしまう。

「あ、そうだ。じゃあ私も謝りに行くよ。私ディレクターだし。こういう時に責任とらないと」

「あ、はい。…ありがとうございます」

「ま、まあ…。これで、だいぶ楽になったっていうか」

タテビさんがぼやくと、葉月さんが考え出した。

「楽になった…？君達も謝りに行くんだ。当たり前前だろ？」

「いや…。そのつもりですけど」

「…なんか気に入くわないなあ…。そうだ。じゃあ、条件つけちゃおつかない」

「条件…」

「タテビくん。あなたうちに入りなさいよ」

「あ、いつすよ」

「良いんだ…」

「葉月ちゃんが男を入れるだなんて…」

葉月さんも信じられないという顔をする。

「え…？？いいの？」

「大丈夫ですよ。今フリーだし。宮前くんともっと仕事したいしね」

「そ、そんな…。持ち上げすぎです」

「そこまで言うのか…。わかった。それじゃあ、私も着いて行こう」

「え、いいの？」

「まあ、私が行った方が誠意が伝わるんじゃないかな？正直、この相談されてからそうする方がいいかなって思ってたし」

「あ、ありがとうございます」

「なんのなんの。私って、ほらこういう時のためにはいるから」

話がまとまった直後、一同は荷物をまとめて芳文堂へと出発した。

#

「あ、私私ー。うん。いや、ちよつと問題が起きちゃつてさー。うん、そう。クリスちゆわんの助けがどーしても必要なのだよー。：あ、いや、ちよ、切らんで切らんで！ほら、言うこと聞かないと、あのことバラしちゃうぞお。：。：。わかつてくれたか！よし！じゃあ、君のオフィスで。うん。うん。もちろん。ほんじゃ」

通話を終える。

「いやー。セーフセーフ。これで大丈夫だよ。よし、じゃあ乗り込もうー…でも、その前に」

葉月さんが俺の方に振り返る。

「君は本当に、いいんだね？前も聞かされたと思うけど、君はもう社会人だ。君の発言には、責任も伴う。君のわがままで、最悪、チームから外されてしまうかもしれない。それでも、構わないかい？」

「はい。何が来ようと、全部を受け入れます。でも、自分の納得するまでやりたいんです」

「安心しな。声優事務所への謝罪は、俺も一緒に行つてやるから」

「ありがとうございます。タテビさん」

「これも悲しきかな。クリエイターの性だ。肯定するわけじゃないが、尊重してやるよ」

#

「全く…。とんでもないことを言ってくれますね」

事を話された大和さんは、はたから見てもひどくご立腹だ。

「会議で頼まれたことをそのままやったのに文句だなんて…。少しは立場を考えてください」

「…考えた上での、行動です。全ておれ、いや、私の責任です」

「なんの地位もないあなたが責任を取ったって、何も変わりはありません。悪化もしないし、良くもならない。そこをわかっているのですか？」

「…は？」

「私に言わせれば、心底甘い。社会というものをなめています。それに、あなたたちもです。こんな若造の暴走を止めるどころか、そのまま着いて行ってどうするんですか」

「いやー。乗りかかった船ってどうか。若気の至りを思い出しちゃって」

「そんな言い訳聴きたくありません。全く…」

大和さんは苦しげに眉間を揉む。

「私だってあまり厳しいことは言いたくありませんが、これは度が過ぎてます。あなたのわがままのせいでもそれだけの人の時間を奪うのか、わかっていますか？まず、声優さんを派遣してください。事務所への謝罪。そして再収集。これだけで、おこがましい。次に、スタジオのセッティング。これにまたもお金がかかる。そして再選考。そのための人員追加。あなたが伊達や酔狂で言い出したことで、これだけの人とお金が動くのです。正直、あなたはわかっているとは思えない。私が思うに、あなたはクリエイターという仕事に酔っているのです。いいものを作るためなら仕方ないと言って、責任を考えていない。愚かの極みです」

「うわ、厳しい…」

タテビさんが苦笑いをするが、これも事実だから仕方ない。

「はい。わかっています。重々承知しています。だから、全て私がやります」

「全て？」

「はい。事務所への謝罪も、スタジオのセッティングも、声優さんを集めるのも。そうすれば、他の人に迷惑をかけません」

「それこそ子供の発想です。仮に全てあなた一人でやったとして、一体どれくらいの時間がかかるのです。もう全体の計画書は我が社に届いています。遅れは許されません。あなたがもたもたしている間に、ゲーム製作はどんどん進んでいく。また遅らせた

責任が、あなたにかかります。それはどうします?。」

「…できる限り早くします」

「…はあ。そこまです。さつきと帰って、事前の声優で決めてください」

何も言い返せない。正論で、身体中を刺される。まだ自分はガキであると思いい知らされる。

「まあまあ。ちよつと待つてよ。こう見えて、彼は期待の新人なんだ。ここで潰すのは惜しい。でも、こうなった以上、責任を取ってもらわなくちゃ」

「何が言いたいんです?」

「この話をそのまま上に通してよ」

「…いい加減にして。このまま甘やかしていいと思ってるの?」

「思つてないよ。でも、もう騒ぎが広まり始めている。ならいっそ、お偉いさんにこの子の処遇を考えてもらおう。どうせ、君一人じゃ決められないでしょ?」

「…言つとくけど、私は知らないわよ。彼がどうなつても、私に大掛かりをつけないで」

「わかつてるさ。これはあくまで、宮前くんの問題だ。だから、彼が最前線にいるべきだよ」

「…はあ。もう、わかったわよ」

やがて、大和さんは諦めたように、電話をかける。

「了解したって。それと、宮前くんを連れてくるように言われたわ」

「ありがとう。愛してるよ」

葉月さんは俺に向き直る。

「さあ、窮地だよ。君がどうなるかは、私はもう知らない。助けることもできない。君は全て受け入れますって言ったね？ここからは君一人だ」

「…こんなもの、窮地なんて言いませんよ。まだチャンスがあるじゃないですか。だったら、突っ走るだけです」

「…そうだね。君は、そうだったね…。どうなっても、後悔しないように」

「うん。ありがとう…。しずくちゃん」

#

芳文堂最上階の一室。目の前に三人の偉い方々がいる。黒田さん、関さん、そして大塚さんだ。ここには、俺とこの人たち以外には誰もいない。まずは黒田さんが口を開く。

「大和くんから話は聞いている。宮前司くん。年は十八。そして、またの名を天草司…。まあ、いい。こんなことは今回関係ない。きみは、どう思っているんだ？これだけ

のことをして、多くの人たちに迷惑をかけようとしてまで、君は何をしようとしてるんだ」

「自分が納得する、そして、いずれ、一番になるゲームを作るためです」

次は、関さんだ。

「わたしや間違つてると思う。君がこの件を通したからと言って、果たしてそれがいいゲームになるのかい？あくまで君はチームのうちの一人だ。君一人が行動を起こしたからって、意味ないんじゃないか？」

「それは、わかってます。ですが、誰も動かないからと言って、行動しないのは、納得できません」

「だからその納得というのが今回の問題だとわからないのかね？」

そう言ったのは大塚さんだ。

「まるで美談のように語っているが、それはただの自己陶醉だ。そのおかげで工程が遅れるなど、話にならない。いい迷惑だ」

「…はい。それも、先ほど大和さんにおっしゃっていたきました。しかし、それでも、私はわがままを貫きたい。なぜなら、アスカは私の生み出したキャラクターだからです」

「それは違うよ。キャラクターは生み出した時点でもう君のものじゃない。そのチー

ム全体のもの、そして、それを受け取った全ての消費者のものだ。自分の生み出したキャラクターに愛着があるのはわかるが、それだけが理由など、少々おこがましいんじゃないかい」

「はい」

「それにおこがましいといえ、大和くんから聞いたが、全ての責任を背負うなどと言ったらしいじゃないか。君程度が責任を取ったからといって、どうするんだ。それで解決すると思っているのか」

「思っています。しかし、誠意は、伝わると思いますが」

「…そんな話は置いておこう。仮に、君の要望が全て叶ったら、『フェアリーズストーリー』は成功するのかね」

「はい。します。私はそう確信します」

「理由は」

「このチームには、素晴らしい人材しかいないからです。一人一人が本気になって取り組んでいる以上、成功以外の未来はありません」

「…」

大塚さんは考えている。おそらくその答えで、俺の運命が決まるだろう。

「黒田、関。まずは、どうだね。彼を、生き残らせるか？」

「…俺は反対だ。あえて、反対と言わせてもらおう。この失敗は、取り返しがつかなくなるかもしれない。そんなものを、こんな小僧に背負わせられん」

「わたしや、うーん…。まあ、賛成かな。ただし、重い罰を受けてもらう必要があるけどね。責任、背負わせる必要がある」

「二対一…。宮前くん。君はどうだ。まだ、仕事をしたいか」

「もちろんです。まだ、関わってほしいです」

「…」

再び考え込む。ここで、汚いかもされないが、俺は祈ってしまった。頼む。頼む。ただ俺はみんなと一緒にいたい。このゲームを完成させたい。何かを。素晴らしい何かを手に入れるために、神様がくれたチャンスを、ふいにしたくない。頼む。頼む…！

「わかった」

運命の時が…。

「君の要望を飲もう」

「…！」

天にも登るような気持ちになった。ようやく、報われる気がした…。

「この件は了承する。そして、それによるスケジュールの遅れも、可能な限り見逃そう。無論、これから起こる面倒ごとを、君が一人で対処するという条件付きで」

「あ、ありがとうございます」

「そして、オーデイションが終わった時、君はこのチームから退きなさい」

「……………」

「では、解散とする」

#

あのこととは、よく覚えていない。うわごとのように、ありがとうございますと礼をして、ノロノロと帰った。その後、メンバーにあったことを報告して、いつの間にか家に戻っていた。

なぜか涙が止まらなかった。

このくらい

なにかおかしい。

何がおかしいって、昨日から司くんが目を合わせてくれないことだ。

私の名前は遠山りん。イーグルジャンプに勤めて早三ヶ月目。そろそろ会社にもなれ、最近では一番の親友と箱根まで温泉旅行に行ってきたところだ。親友の肌が全国の子が羨むレベルできめ細かく、またスレンダーでスタイルがよく…いけない。ついつい物思いにふけてしまう。

おととい旅行から電車で帰る途中、もう一人の親友、司くんに帰ったという趣旨のメッセージをSNSで送ったところ、彼にしては珍しく既読がつくまで遅く、帰ってきたメッセージもおかえりの一言しかなかった。旅行に出る前、どうやらキャラクターのオーディションに参加すると言っていたので、仕事で忙しいのかな、まだ新人なのにごい、と同期であることを誇りつつ、あまり深く考えず、隣で眠っているコウちゃんの良い匂いを堪能していた。別に変な意味じゃない。

おかしいと感じたのは、出社した後だ。今日、会社に先に来ていた司くんにおはようの挨拶をしたら、ものすごく腫れた目をして、落ち込んだことを精一杯隠そうとした、み

たいな無理のある笑顔で

「おはよう……」

と返された。その時はまだ、仕事で疲れてるのか、と思いつつ、しかしどこかおかしいと思っていた。決定的だったのは、この後だ。

「……んで、ですか……」

「……それは……だ」

作業の進捗を報告しようと、葉月さんのデスクを訪ねたとき、偶然男女の声が聞こえた。女性の方はもちろん葉月さん。そして男性の方は、司くんだった。何か聞こえづらかったり、ヒソヒソ話をされると気になってしまうのが人の性だ。思わず身を潜め、耳を澄ませる。

「……お心遣いは感謝します。でも、これはあくまで俺一人の責任です。そんな意味のないこと……」

「意味のないことなんかじゃないよ。確かにあれは君の責任だけど、それでも、それに私たちも乗ったんだ。ここで真つ当な理由なんか話してみろ。有る事無い事言われるよ……」

「でも……」

「でももすともない。いいかい？これは親しい人にだけ話すんだ。君の信頼に足る人

物にね。そうじゃないと、私は許さないよ」

「はい……。ありがとうございます」

責任？有る事無い事？一体なんの話……？

このとき、私は油断していて、思ったより早くデスクから離れる司くんに対応できなかった。

「りん……」

「……あ」

明らかに悲壮な顔をした司くんを見て、私は自分の行いをひどく後悔した。そこで私
ができたことと言えば、ヘタクソな誤魔化しだけだった。

「つ、司くん！いたんだ。気づかなかったよ！えへ、な、なんの話してたの？」

「……あ、い、いや……。……なんでもない」

私の目を見ずに、そのまま通り過ぎてしまった。

「……」

「あちゃー。さっそくか……」

葉月さんが申し訳なさそうに佇んでいる。

「葉月さん……。司くん、どうしたんですか？」

「いやーこればかりはなんとも……。本人が言わないとねえ……」

どうにもはっきりしない態度。これはどうにもならないと確信して、私は報告を終え、仕事に戻った。

昼休み。いつもの三人でご飯を食べようとしたら、司くんがいない。コウちゃんに聞けば、昼前に会社から出る姿を見たという。

「挨拶まわりには見えなかった。樫井さんがいなかったからかな」

「そっか…」

私は、コウちゃんにも聞いてみることにした。

「コウちゃん、今日司くんと話した？」

「いや。話しかけても、困った顔するし…。何かあったの？」

「私にもわかんない…」

一瞬、先ほどの会話をコウちゃんに言うべきか迷ったが、いくら親しき間柄と言つて、何かはわからないが本人が傷ついていることを、他人に言うべきではないと思ひ直し、黙っていることにした。

「心配だよね…」

「そういえば、あのタテビつて人は？なんかいつの間にかチームに入ってたよね。元は外部の人でしょ？タイミングがタイミングだし、何か知ってるんじゃない？」

「そっか。タテビさん」

タテビジロウさん。最近台頭してきたシナリオライターで、数々の人気作に関わっており、その暗い雰囲気のかなかに一筋の希望を残すシナリオに、評価が集まっていると聞く。そんな有名な方がウチに入ったと、噂の的になっている人だ。

「あと、音響監督の大葉さんとか。私喋ったことないけど」

「大葉さんか…。私は何回か話したことあるかな」

「うわあ、やっぱすごいね。りんのコミュ力」

私は急いでご飯を食べ、タテビさんに会いに行くことを決めた。

「宮前さんのこと？ いやあ、僕が言えることはないよ」

「そうですよね…」

昼休み後、すぐにタテビさんに会いに行ったが、結果は予想どおりだった。

「でも、司くん、今日はすごく元気なくて。みんな心配してて…」

「そうか…。みんな心配ね。宮前さんの人徳かなあ。彼、なぜか人を惹きつけるんだよ。実に期待させてくれる」

「そうなんですか？」

「そうだよ？ 君達は、彼とあった時期が早いから、もしくは部署が離れているからかわ

からないかもしれないが、彼は情熱を持つてる。今回はそれが激しすぎて、山火事になつちやつたけど」

「今回つて、やつぱり何か起こつたんですよね！それつて…」

「ダメだよ。遠山さん。これは。こればかりは、当人の問題だ。僕達部外者が、ガー言える問題じゃない。けど…」

「けど？」

「僕は彼を信じてるよ。彼ならきつとうまくやつてくれる。誰かか何かが、彼を引き上げてくれる。そのチャンスを、きつともものにしてくれるはずだよ」

「タテビさん…」

「それくらいしか、できないからね」

「そう言うタテビさんの目は、少し悲しそうだった。」

「あれ、もうこんな時間？仕事に戻らないと。ごめんね。もつとお話しできたらいいんだけど」

「いえ、貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございます…」

その時私は見えてしまった。

ヨレヨレになつたスーツをきた司くんを。

「すみません！また後で！」

タテビさんに謝り、すぐに飛び出した。

「司くん！」

思わず大声を出して、司くんを呼び止める。

「りん…。どうして…」

今朝とは違う意味で顔が腫れている。青紫色だ。

「どうしてって…。どうしたの、その顔？」

「顔？ああ、いつも通りイケメンだろ？」

「バカ言わないで！どうしてそんなひどい顔してるのって聞いているの！」

「ひどいって…。参ったな」

「茶化さないでよ！」

「悪い…。でも」

司くんは悲しそうな顔をする。

「すまない。少し、一人にしてくれないか…。ちよつと、色々、整理しなきゃ…」

「司くん…」

その時、寸前だった私の心が、決壊した。

「…っ。ううっ…。ひくっ…」

「え、まって、ちよ、りん…」

自分でも意識していなかった。まさか泣いてしまうなんて。慌てて止めようとするけど、全くその気配を見せず、逆にさらにぼろぼろと溢れ出す。

「なんで、そんな平気、みたいなこと…。全然、平気じゃ、ないくせに…」
息を飲む音が聞こえた。

「葉月さんとか、タテビさんにも聞いたけど、みんな司くんが話すべきことだつて。それで、言ってくれるまで待とうと思つたら、そんなぼろぼろになつて。でもほつとけて。そんなの、できるわけないじゃない…!」

「りん…」

「こんな女の子泣かせるなんて、司くんの、ばか…。そうなつた理由を言つてくれるまで、泣き止まないんだから…」

「…わかつた。わかつたよ。話すよ。」

「…ぐすつ。ほんとお?」

「ああ。…正直、自分でも情けなくなるくらいで、あんまり言わずにすませたかつたんだけど、そんなわけにや行かないよな…。せめて、りとコウ、それに樫井さんには言つておかないと」

司くんは、迷いながらも、やがてはつきり言つた。

「実は俺、チームを離れるんだ」

「え……？」

「前、オーデイションあったろ？それで、俺がわがまま言っちゃってさ……。色々あつて、責任を取るって形で」

「そんな……。じゃ、その顔は……」

「ああ、これ？これは、オーデイションで失礼なことを言つて、そのことを謝つたら、ふざけんなつて殴られたんだ」

「そんな……」

「いいんだ。自分でも、納得してる。その後なんとか頼み込んで、次のオーデイションの新人さんをかき集めてきたんだ。これが俺の最後の仕事だ」

「じゃ、じゃあこの後、どうするの……」

「さあ……。まあ、イーグルジャンプに来る外部の仕事を受けたり選別したりするんじゃないか？なんか人が足りないらしいし」

「一通り話を終えた後、私の中にある想いは、ただ「嫌だ」だけだった。このまま終わりにたくない。でも、私一人じゃ何もできない。今まで仕事で悔しい想いは、すでにたくさんしたが、それらとはまた別種の、心の中に重く沈殿していくような想いだった。」

「どうにも、ならないのかな……」

「ああ。ごめんな。そんな辛そうな顔しないでくれ。そんなつもり、なかったんだが」
「するよ。そんな顔。だって辛いもん。司くん、頑張ってたのに…」
またジワリ。視界が歪む。

「ああ、もう。泣かないでくれよ。ありがとな。俺なんかをそんなに心配してくれて」
「当然よ。だって、友達でしょ？」

「…ああ。そうだな。ほんと、ありがとう」

「いこ？まずはコンビ二行つて、氷買ってこなきや。早く冷やさないと」
「ああ。悪いな」

夜七時半。そろそろ上がる時間だ。隣に座るコウちゃんに変わった様子は見られない。おそらく、まだ司くんから話されてないんだろう。私としては、まだ納得できずモヤモヤして、誰かに相談しなかったが、それもできずまたモヤモヤといって負の連鎖を続けていた。それでもなんとか今日の分のノルマをこなし、やっと帰ろうとしたところで、ふと葉月さんのストールが目に入った。置いたまま忘れてしまったのだろうか。

「どうしたの、りん。まだ帰らない？」

「ちよつと葉月さんのところ行つてくる。先行つていいよ」

「いいよ。待つてる」

ストールを手を取った。

「今日、司だけじゃなくりんもおかしかったな…。本当に何があつたんだろ」

「葉月さん」

「おや、りんくん。どうした？何か困りごと？」

「あの、これ。ストールを忘れたんじゃないかと…」

「…。…ああ。そういえば」

「そういえばって」

そのストールは葉月さんのチャームポイントだと思っていた。

ふと気づいた。これは、司くんのことを相談するチャンスなのでは？

「あの…」

「ん？もしかして、ほんとに困りごと？」

「はい、えつと、司くんのことなんですけど…」

「…それって、彼から聞いた話？」

「はい…」

「だとしたら、君が思い悩むのは宮前くんの本意じゃないよ。彼はできる限り変に思っただけじゃないと思う」

「はい。でも、納得できなくて。司くんがしたことって、そんなに重大なんですか？ それこそ、チームから追放されるくらいの…」

「いや、彼がしたこと。そうだね…。例えば、彼がしたことがオーディションでのダメ出し程度なら、ここまで大事にならなかつたかもしれない。でも、彼は人を動かそうとした。そして、一度しかないものを二回やろうとしたんだ。結果、芳文堂の面子を壊した。これが問題なんだ。彼の要望は叶えたいし、その引き換えだから、彼も納得してるんじゃないか？」

「そんな…。葉月さんは、これでいいんですか？」

「…ああ」

「…すいませんでした」

「またもや釈然としない想いを抱えたまま、自分の家に帰った。」

#

りんと葉月の話が終わると、部屋のドアが開かれた。

「ちよつとしづく。どういうつもり？」

そこから出てきたのは大和・クリステイナ・和子。芳文堂からのパブリッシャー社員だ。

「ごめんね、こんな時間に」

「こんなっていうほど遅くないでしょ。それよりいきなり隠れてるなんて。今の会話を聞かせたかったの?」

「まあ、そうなんだけども…。どう思った?」

「どう思ったって…。まあ、確かに新人に下る罰にしては重い気がしないではないけど、でも、私の意見はあの時彼に語った通りよ」

「確かにあの時は、正論だった。だからこそじゃないか?」

「…どうということ?」

「あの時正論を言ってくれたおかげで、彼に社会のルール、責任や重圧。新人にしては、酷すぎるほどの試練が与えられた」

「試練…?」

「このタイミングで厳しさを知ることが出来た。それは彼にとつてはプラスになる」「しづく…?あなた何も言ってるの?」

「実は、さつき芳文堂さんに言ってきたね…。条件を一つ、とりつけて来た。ー売り上げ累計15万。出来なければ、宮前と私の首が飛ぶ」

「…あなた正気?」

「どうせこれが売れなきゃ私は、っていうかこの会社は危なくなる。だったら、なるべ

くでかい花火を上げたいじゃないか」

「それだけの価値が、彼にあると?」

「タテビくんも大葉くんも乗ると言ってくれたよ。足りなければ、私たちの首も乗せろと」

「甘いわ」

「そうかな」

「そうよ」

「でも、こんなところで期待の新人を潰すわけにいかないだろう?」

大和は諦めたようにため息をついた。

「…私が言っても聞かないわね」

「わかってくれた?」

「そうじゃないわよ。ただ、こうなった貴方は、昔から止まらないから」

「わかってるじゃない」

「全く。変なところで熱血なんだから」

「何言ってるんだ。私は監督だよ?部下の可能性を信じることも、仕事のうちさ」

幕間

りに泣かれ、事情を説明してまた泣かれ、そして悲しい気持ちにさせてしまつてから数日経つた、六月末。二回目オーディションが終わり、若くて優秀な新人を獲得した。山宮修、二十歳。大学に通いながら声優活動をしている。彼のもはや演技とは呼べないような、むしろ執念とも言うべきものを目の当たりにした時、満場一致で彼に決まつた。これで、自分の最後の仕事は、満足する結果に終わった。あとするべきことと言えば、自分のデスクを綺麗にすることくらいなのだが……。いや、実はもう一つ、重要な問題が残っている。

まだ、自分がいなくなることをコウに告げていない。

前にりに話した時、あれだけのことになつてしまつた手前、話難いと言うか。樫井さんには案外あつさり話せたのに、コウに向かつて、となると、名状しがたき気持ちが渦巻く。今までなんどもチャンスはあつたはずなのに、どうしても怖気付いてしまう。まだ、コウに対してはカツコつけていたいと思う気持ちがあるのだろうか。しかし、もういい加減出ていかなければならない。

「はあ……」

そのことを思うと、またしても溜息が出てしまう。

「司?何してるの」

「げっ」

と悩んでる時に限ってタイミングが良い。いや、悪いか。

「ええっと、なんていうか、その…」

「…?なに、改まって」

ええい、覚悟を決めろ!

「実は、俺、話しておくことが…」

「宮前くん、いるー?」

「…」

「樫井さんが俺を呼んでいる。いかなきゃいけないのか、これ。」

「…えっと」

「いかなくていいの?」

「…うん」

結局逃げてきてしまった。全くタイミングが悪いのか良いのか。

「すいません。なんでしたか?」

「ああ、来たね。葉月さんが呼んで来いって言ったよ」

「…それだけ」

「そうだけど？」

「ああ…はい」

それだけか…。このままずる言わずに終わっちゃうのかなあ…。ただでさえぶれつづれな決心がさらにブレブレになる。終いにはゲル状になってしまいそうだ。などと無駄なことを考えてるうちに葉月さんのデスクに着く。

「はいーどーぞー」

ノックすると反応が帰って来たので、入る。

「失礼します…」

「なんだい、そんな顔して」

「いや、今日でチームを抜けなきゃいけないから、その、少し感傷的に」

「ふーん。ま、いいや。今日は君にとっても大事な話があるんだ」

「話…」

これからいなくなるやつに何を話すことがあるだろうか。

「まあ、私からじゃないけどね」

「え？」

「ここからは私がお話しします」

そうやって出てきたのは、このチームのパブリッシャー社員である大和さんだ。先日の厳しい言葉を受けてから、どうにも苦手だ。

「大和さん…。どうしてここに？」

「宮前さん。あなたに本社からの辞令が降りました」

「辞令…？」

「はい。あなたは、まだチームに残っていいそうです」

「はえ？」

変な声が出てしまった。

「ええと…。それって一体どういう…？」

「言葉通りですが」

「こ、言葉通りって…」

「良かったじゃないか。君も望んでいただろう？」

「いや、でも、なんかあからさまにありますよね？その、条件みたいなもの…」

「さあ。あるにはあると思いますが、知りません。聞かされておりません」

「…」

どうしよう。突然降って湧いた幸運に、対応出来ない。いや、幸運ではなく、不幸の前触れかもしれない。とにかく、こんなことはあり得ない。一度決まったことが、何も

せずに覆るわけがない。

「まあ、あれだ。この幸運に感謝して、ますますゲーム制作に勤しんでくれたまえ。話は以上だ。もう戻っていいよ」

「はい…」

#

なんだかよく分からずに残れることになってしまった。嬉しいが、釈然としない。これで良かったのか…？これは素直に喜んで良いのか？そもそも、こんなことって本当にあるのか？まさか、葉月さんが俺のために何かしたんじや…。

「司ってばー！」

「うわっ」

いつの間にかコウが目の前にいた。

「おう、コウか。どうした？」

「どうしたじゃないよ。なんかぼうつとしてるから、どうしたの？あとこれ。サブ

キャラのデザイン」

「ああ、どうも…」

コウが心配そうに顔を覗き込む。

「本当に大丈夫？なんか昨日からりんもちよつとおかしいし、何かあったの？」

「あ、いや、何かがあつたのは確かなんだけど…」

「…どういうこと？」

「ううん…」

どうしよう。今更言つたつてなあ…。もうすぎたことだから言わなくていい気がする。

「違うんだ。何もなかった。りんは…そうだな。女の子の日だったんじゃないか？」

「…あんたそれ冗談でも最低だよ」

「…ごめん」

割とまじに蔑まれる。

「あ、司くん」

「りん。ちよいちよい」

「ん？」

ちようどりんが通りかかったので、そのままコウと離れる。

「あんな、その…なんていうか」

「どうしたの？確か今日だよ。寂しくなるね…」

「うん。あの、そのこと、なんだけど…」

「大丈夫よ。たとえ仕事が変わっても、今までと同じようにご飯食べて一緒に帰りましょう?」

「うん…。ありがとう。でも」

「新しいところで慣れないかもしれないけど、司くんならできるよ。また次の仕事と一緒に頑張りましょう」

「あああ、もう!ありがとう!でも違うんだ!」

「違うんだって、何が?」

「だから、ええつと。…いなくなるのが、なくなった、らしい…」

りんは、一瞬、呆けたようになる。

「…それって、まだ残れるってこと…?」

「ああ。だけど、なんでかは分からないんだけど…」

「……」

すると、りんは、先ほどまでの朗らかな様子を崩すように、へたりと座り込んでしまふ。

「もおおお。できるだけ普通に、悲しくならないようにしたのいい。私の悶々とした時間を返してよお」

「ご、ごめん。でも、俺だつてさつき聞いたんだぜ」

「でも、良かったあ」

本当に嬉しそうな顔をしている。改めて、いいやつだと思った。友達になれてよかった。

「でも、なんでだろうな。こんなことってあるのか？」

「わかんないけど、きつと葉月さんがなんとかしてくれたんだよ」

「…何してんの」

声が出た方を向くと、コウが立っていた。

「ていうか、いなくなるってなに？」

#

「やつぱり無茶してたんだ。なんで言ってくれなかったの？」

「いや、タイミングが合わなかったっていうかなんとか…」

「でもりんには話してるじゃん」

「それは、たまたまタイミングが合ってた」

「でも、私たち何回か二人つきりだったよね。それでもタイミングが合わないの？」

「それは…。こ、心の準備が…」

「まあまあ、いいじゃない。全部解決したんだし。それよりも、司くんが残れることを

喜ばなきゃ」

「うん。まあ、そうだけど…。でも、これからは、私にも言つて欲しい。これじゃ、心配したくてもできないよ」

「わかつてる。何か困ったことがあつたら、お前にもちゃんと相談するよ」

「それならいいや。仕事に戻らなきや」

「あ、私も」

「俺は…樫井さんにも言わなきやいけないなあ」

#

「え？そんなこととつくに知つてたわよ」

「…」

「私も驚いたけど、わけは聞かないでくれつて、話してるじゃん口止めされてたから」

「そ、そうですか…」

「でも宮前くん」

「樫井さんは真剣な顔をする。」

「ここからが正念場だよ。そろそろプロトタイプ提出日だし、アルファ版の仕上げに入らなきやいけない。きつちり締めていかない」と

「はい！」

#

そして数日後。プロトタイプの提出を終え、アルファ版の制作も順調に進んでいる中、定例会議が始まった。定例会議とは、二週間に一回、各チームのトップが集まって、最終的なゲームの方向性を決めるものだ。今回は、脚本のタテビさんが議題を提出するらしい。なんでも、『超、新しいものを思いついちゃった』らしい。

「では、定例会議を始めます。えーまずは、芳文堂のクリスちゃんから伝言を預かっています。『プロトタイプの出来は素晴らしく、社内でも評価は高いです。今日は所用があつていけません、これからお互い頑張つていきましょう。あとクリスつて呼ぶな』だそうです」

プロトタイプの評価がいいといわれ、笑顔が広がる。

「プロトタイプの評価が高かつたからって油断しちゃいけないけど、いい調子だよ。この勢いのまま、どんどん行こう。さて、今回はタテビくんから何かお話があるそうだけど…」

「はー」

タテビさんがホワイトボードの前に立つ。そして何かを書き始めた。『エンディングについて』とある。

「僕が今日提案するのは、エンディングの仕様です」

「エンディングの仕様……？」

「はい、この作品では、というか、昨今の作品では、だいたいがノーマルエンディング、つまり、初めから終点が決まっているものです。しかし僕がこれから提案するのは、その逆、マルチエンディングです」

「……マルチエンディング」

「はい。まず、プレイヤーの選んだ選択肢によってエンディングが分岐。さらに、その分岐したエンディングがフラグとなつて、またエンディングが分岐。そして必要なエンディングをコンプリートした時、『真エンド』が解放される、という仕組みです。予定では、バットエンド含め、二十六のエンディングを用意します」

「でもそれでは、クリアするまでに時間がかかるのでは？」

「むしろそれが狙いなのです。携帯タイプならそうではないですが、このゲームは据え置きタイプ。つまり、家でゆっくり、そしてじっくりプレイすることができます。必要なサブクエストやアイテム、やりこみ要素をこれでもかと詰め込んで、プレイヤーをゲームの中に閉じ込めます」

「けれど、それだけのエンディングを用意するのは時間がかかりますよね。それだと、作業に遅れが出るのでは？」

「大丈夫です。もうすでに大まかなプロットは提出してあります。あとは清書するだけ。そこまで時間はかかりません」

「…他に質問は？」

葉月さんは周りを見渡すが、手をあげる者はいない。少なくとも、ここにいる全員は、この案は魅力的だと思っている。

「じゃあ、とりあえず、エンディングはマルチエンディングで進めよう」

「あの、マルチになると、グラフィックの仕事量が多くなるので、スケジュールを少しずらしてもいいですか」

「樫井くん。どう？」

「はい。十分に調整可能です」

「わかった。他に遅れるかもしれないところは？」

コウが手を挙げた。

「多分サブキャラ増えると思うので、もう少し時間が欲しいです」

「キャラ班も可能です」

「AD？」

「はい、大丈夫です」

「よし。では、決定ということで。他にはー」

#

定例会議が終わったあと、タテビさんを見かけた。

「タテビさん。お疲れ様です」

「お、宮前くん。どうも。残留おめでどう」

「あ、はい。ありがとうございます」

「改めてすごいと思いました。あんな案、あんまり聞いたことないです」

「まあ、負けてるわけにいかないからね」

「誰にですか?」

「いや?こつちの話さ。…さて、じゃあ僕は執筆に戻るよ。啖呵切っちゃったからね。

速攻で仕上げないと」

「はい。タテビさんの脚本、早く見たいです」

「おう。楽しみにしててよ」

このままいけば、予定の十二月にはマスターアップを迎えるだろう。順調すぎて、少し怖い。プロトタイプを提出し、アルファ版を完成させてしまえば、ベータ版で修正し、完成に向け、微調整を繰り返し、そうすれば完成して出荷される。このゲームが着

実に近づいているのを感じた。

マスターアップ

七月。この月は先月が空梅雨だったせいで、一月を通して雨模様だった。その上雷が頻発し、特大のものがイーグルジャンプのビルに直撃。ビル内の電子設備が全て狂い、作業が止まってしまった。急いで生き残ったでデータをサルベージし、作業の遅れを取り戻そうとしたが、これに一ヶ月かかってしまった。八月はそれで終了。

九月。遅れてしまったスケジュールを組み直し、予定より早くゲーム内のアニメーションシーンの制作に入った。制作は動画工房さんをお願いし、コンテ制作協力にコウが入った。どうやら互いに気があつたらしく、アニメーションは順調に仕上がっていた。アニメーションが入る箇所は、オープニング、それぞれの章の始まりと、特別なイベントシーンだ。容量に余裕があるなら、一度見たアニメーションをもう一度見れるように、アーカイブをクリア特典につけるつもりだ。完成したアニメーションを社内です映会として流した時、感極まって涙を流した者が多数いた。恥ずかしながら、俺もそうだが一番感動していたのは、間違いないコウだろう。上映会が終わったあと、惚けたようにぼおつとしていた。その後、本人の話によると、家に帰って一人になると、いつの間にか涙が出ていたという。恥ずかしがり屋なコウが、なんだか幸せそうに話している

のを見て、俺とりんは顔を見合わせ、笑いあった。コウ笑顔を見るとどういうわけか、心が満たされる気がした。

十月。七月の件で亀の歩みのごとく遅れまくっていたグラフィックがようやく目処が立った。キャラ班、グラフィック班、モーシヨン班が目を血走らせながらなんとか終わらせてくれた。これにはもう感謝の言葉しかない。この三つの班には、しばらく休憩を取ってもらうことにして、残った俺たちでこのグラフィックをゲームの中に組み込む作業を始めた。タテビさんのシナリオに合わせ、調節する。今回のゲームは戦闘の動きを自由に決められるターン制バトルシステムだ。これは、テンポよく、しかし奥深く、ということ。で今度はプログラムが大変になるが、かねてより基礎を作り込んで来たらしいので、案外すんなり進んだ。

十一月。ついに、ゲームの完成が見えてくる。キャラを作り、戦闘システムを作り、タテビさんのシナリオに合わせ、大葉さんが作った音楽を合わせ、マップを作り、モンスターや、敵キャラを作り、クエストを作り、駆け引き要素を詰め込んだベータ版がついに完成した。これをイーグルジャンプ社員全員でプレイ。特に問題はないと判断されたら、芳文堂に提出。良い評価が出たら、今度は事前に登録してもらった外部の人たちにテストプレイをしてもらう。

結果は、だいぶ満足のいく内容だった。テスターからも、王道を行きつつ新しい面も素晴らしい、といった風に評価が降った。

十二月。大詰めだ。細かい見直しを繰り返し、バグがないように努める。また、同時に初回限定盤についてくる特典を考えた。その結果、無難にサウンドトラック、ドラマCD、特製ブックレット、そして特別な武器のプロダクトコードがつくことになった。

ドラマCDの収録現場を見ていて、思ったことがあった。俺のわがままで、アスカの声優はまだ若い新人になった。全くの偶然だが、主人公のシンも新人さんが担当となった。しかし、それ以外の主要人物は、全員ベテランが担当することになった。俺は、人気な声優というのは、一年に十何本も主役級で出演する。しかし、主役級のキャラならともかく、ぼつと出のキャラのことなんてすぐに忘れてしまうのではないか、ましてや初めてゲーム業界に参入する会社の、初めて一から作るゲームなんて、対して記憶に残らんのではないか。そう思っていた。だからこそ、これはどうしようもないエゴかもしれないが、このゲームは、このゲームだけは、記憶に残って欲しい。シンやアスカといったキャラが、確かに生きていたことを覚えていて欲しい。だから、今までアニメに出たことがないような新人を要請した。理由はどうあれ、最後は納得のいくキャストイングができたし、その後に不可解なこともあったが、後悔はしていない。しかし、自分の考え、いや偏見がどれだけ愚かだったか思い知った。先ほど、一人の人気声優の方が、挨

拶に来てくれた。

「このキャラクターの声ができてよかったです。貴重なご縁を、ありがとうございます」

そう言ってくれた。これをただの世辞だと捉えるのは、愚かの極みだろうか。しかし、この一言のおかげで、少なくともこの場にいる人たちは違う、と思わせてくれた。

「ご縁、かあ……。そうだよな。みんな何かしらで繋がってんだよな……。関係ないと思いでんでも、偏見があつたとしても、それを理由に一方的に嫌うのは、間違つてるな……。俺はバカだなあ」

#

そして、十二月三日のりんの誕生日を過ぎ、十二月末。ついに、マスターアップの日を迎えた。苦節八ヶ月弱。全力疾走し続けた結果だ。あとは世間にどう思われるか。もしかしたら、何も思われなくてもいい。今更考えてもどうにもならないが、それでも、どうしても悪い方向に考えてしまう。

葉月さんの最後のスピーチが始まった。

「今更、私たち頑張ったよ、とか、きつと良い結果になるって、なんてくだらない慰めは言わないよ。もう、うだうだ考えるのは諦めよう。自分と、今までの積み重ねと、天

命を信じよう。以上」

そして、少し早いがこのまま正月休み入ること、そして今日は打ち上げをすることを伝え、今日は解散となった。次に会社が開くのは一月三日だ。店頭に並ぶのが一月の八日だから、会社が始まるまではリラックスできるだろう。…そんなことはないだろうが。みんな、長い時間をかけてできたゲームがやっと完成したという喜びと、本当にこれで大丈夫だろうかという不安がないまぜになつて疑心暗鬼になっている。だから、葉月さんの言う通りこれは天命に任せるしかない、というのも、わかるにはわかるが、しかし悲しいかな、そんな簡単に切り替えるのは難しい。

そしてその足で打ち上げ会場に行く。場所は居酒屋『さぎ』だ。これは俺とタテビさんの強い要望による。店に入り、一番奥にある団体用の席に通された。間も無くして飲み物（俺とりんとコウ以外はビール）が配られる。葉月さんが乾杯の音頭を取った。

「さつき言いたいことほとんど言っちゃったから、特にいうことありません！みんなお疲れ様！じゃあ、乾杯！」

みんな一斉に飲み物に口をつける。

「あ、りんちゃん。それ私のお酒」

「……………。ヒック。ウエへへへ。んなによ、コウちゃん。いつも私を誘惑し

てエ…。襲うわよオ！」

「は、何言つて、ていうか酒くさっ！酔い回るの早過ぎー！」

「良いではないかア…。良いではないかア！」

「いや、あん、ちよ、やめ、助けて！」

「なになに？おにやのこ同士の睦みあい？なら私も入る〜！」

「まさか、葉月さんまでもう酔つて!?!」

「いや、あれは素」

「…何やつてんだよ」

なんか色々やばいことになっているあそこの一帯は放つておいて、タテビさんと一緒にちびちびやりながら話していると、大和さんが近づいて来た。大和さんも、プロデューサーということに参加していたのだ。

「ちよつと、良いかしら」

「はい？あ、はい。良いですけど…」

大和さんの表情から、ただ事でない雰囲気を感じ、思わず姿勢を直した。

「ここじゃなんですから、一度外に出ましよう」

大和さんに連れられる。

もうすでに十二月末。二日後にはクリスマスだ。

「えつと…。それで、話つて…？」

「……」

「あの……」

「あなたに伝えるべきかどうか、正直、迷ってます。しずくは、言わなくていいと言っていました。私も、そう思っていました。ゲームもマスターアッパを迎え、もう、隠しておく必要は無くなったと思って。あのぶんだとしずくは、一生隠し続けるでしょうから」

「……」

うすうす気づいていた。これまででは、俺にとって都合が良過ぎた。これはなんでもおかしい。葉月さんにははぐらかされてしまったが、確かに、何かあるのだ。

「……今回の『フェアリーズストーリー』一ヶ月以内に累計十五万本売れなきゃ、しずくのクビが飛ぶの。しずくは、身を呈してあなたを守ったのよ」

ハッピーエンド

「…今回の『フェアリーズストーリー』一ヶ月以内に累計十五万本売れなきや、しずくのクビが飛ぶの。しずくは、身を呈してあなたを守ったのよ」

俺は何も言うことができなかった。自分の仕事に命をかけている葉月さんが、まさか俺のためにクビをかけるなんて。

「本当、なんですよね。それ…」

「ええ。私は監督なんだから、部下の可能性を信じるのも仕事のうち、だそうよ」

「葉月さん…」

大和さんは逡巡するように、目をさ迷わせたが、やがて俺を見つめる。

「多分、ゲームが目標に届いても届かなくても、しずくはずっと黙っているつもりだと思う。でも、そんなカツコつけみたいなのは、私は嫌だし、あなたも理由がわからないままじゃわだかまりが残るでしょう？」

「…はい。ありがとうございます」

「もう製品化が始まっている。どうにもならないけど、せめて、覚悟して欲しいの。…ごめんなさい。これは、私のくだらないわがままかしらね」

「いえ。そう言うなら、俺の方がもつとわがまま言わせてもらいました。ありがとうございます。本当のことが知れて、よかったです」

「そう…。そう言ってくれと、私も嬉しい」

ふと、急に冷え込んだのに気づいた。いつの間にか雪が降っている。

「正直に言うと、あなたを初めて見た時、なんか、全部がどうでもいいって思ってる人なのかと思った」

「ええ…。本当ですか？」

「でも、そうじゃないと分かった。覚えてる？あなたの初めてのわがまま」

「一生忘れませんよ」

「あの時、あなたにきつく叱ったじゃない？あの時、あなたのことを、本当に何も知らない、何もわかってない人だと思ったの。きつく言ったのは、あなたが憎らしかったから」

「…」

「私、しずくとは幼馴染なの。どんな時でも一緒だった。大学を出て、就職したら、今までみたいに一緒にいられないと思ってたけど、なんだかんだでまた一緒だった。もうこれは運命だと思って、私はしずくを支えたかったの。だから、あなたがあの時した行為は、しずくの邪魔をしているように見えた。…けど、結果としてうまく言った。私の

社内でも、当初予定していたよりかなりいいと言う評価だったの。聞いた？」

「いや、初耳です」

「ただの結果オーライだと思っただけど、その後もあなたはいろんな現場で緩衝材としてやってくれた。その姿を見て、認識を改めたわ。あなたは、誰にも負けないくらい的情熱を持ってってくれてるって。しずくがあれだけ高く評価するのもわかるわ」

「…少し違います」

「え？」

「あの時、大和さんが叱ってくれたおかげで、何ができて、何ができないか、物事に線を引きけるようになったんです。すると、途端に物事がクリアに見えるようになって…。だから、大和さんのおかげです」

「そう…。ありがとう」

大和さんは空を見上げ、そして息をゆっくり吐いた。それに合わせ、白い息が空気にゆっくり溶けてゆく。

「今日は話せて良かった。あなたに対して、私の意見を言えた。嫌いなもの、白黒つけたいの。社会には白か黒か、なんて決められないことの方が多いのに。私の悪い癖ね」

「俺も、話せてよかったです。来年も、よろしくお願いします」

「あら、十五万本行かなかったら、あなたもチームを外れるのよ？」

「その時は、その時です。そんなことは考えるより、俺は、またあなたと仕事をした
いって思います」

「ありがとう。私も同じ気持ちよ」

さあ、戻りましょうか。そう促されて、宴会に戻った。もう外は本格的に雪が降り出
し、先ほど大和さんが放った言葉に呼応してか、夜の暗闇の中にポツポツと散りばめら
れた白い雪が、最高に綺麗だと思った。

#

「さあ、もう帰るよー」

楽しかった打ち上げも終わり、二次会に行く面々と帰る面々に別れた。葉月さんやし
ずくさん、タテビさんたちは二次会組、俺やりん、コウは帰る組だ。すっかり出来上がっ
てしまったりんを背負っていいよ帰ろうか、と言う時に、葉月さんに声をかけられた。

「君は二次会行かないの？」

「え、いや、未成年なんで」

「でもタテビくんといた時には呑んでたらしいじゃないか。彼の酒は飲めて私のは呑
まないって言うのかい？」

「…そんなノミハラみたいなこと言うのやめてくださいよ」

「あはは、ごめん。…さつきクリスティーナと話してたね。何、話してたの？」

「…ただの、世間話です」

「別に隠さなくていいよ。私と司くんの仲じゃないか」

「…葉月さんが、身を呈して俺を守ってくれたって、教えてくれました」

「まったく。余計なことするんだから。あの子は」

「ごめんなさい。そんなこと、知らなくて。まったく意識すらせずに、のうのうと過ごしてしまつて」

「言つとくけど、私は君に感謝されたくてしたわけじゃないし、自己陶醉に浸りたかつたわけでもない。ゲームと会社のことを考えた結果だよ」

「…」

「なんでそんな悲壮な顔するのさ。頼むから気にしないでよ。君にそんな顔されて、私はじゃあどんな顔をしたらいいんだよ」

「…笑えばいいと思うよ」

「…あつはははは！そうだね！笑うことにする！」

葉月さんはげらげら大声で笑う。長いこと笑っていたが、その後もなかなか笑いが収まらない。

「あの、葉月さん」

「……。はあ、笑つた」

「みなさんもう行っちゃいましたよ」

「ああ、いいのいいの。先行つといてって言ったから」

「そうですか…」

再びの沈黙。

「君、変わったね」

「へ？」

急に言われて驚く。そんな自覚はまったくなかった。

「そうですかね」

「うん、そうだよ。少なくとも、二年前、私のところに逃げ込んで来た時よりは」

「二年前…。そうですね。確かに、変わったかも」

「よく笑うようになったし、怒ってるところもあつたし。感情が出て来た。これでもお

ばさん、結構心配してたんだから」

「…ありがとう」

「なによ、素直になつて。可愛いところもあるじゃん」

「もう、からかわないでよ」

「…はやいね。もう二年だ。一人暮らしはどう？順調？ちゃんと食べてる？」

「これでもしっかり料理してるんですよ。一回妥協したら終わりだ、と思つて」

「本当？じゃあ、今度なにか作ってもらっちゃおうかな」

「いいですよ。リクエスト言ってくれば、なんでも」

葉月さんは俺を、とても愛おしそうな目で見て、そのまま近づいて、ハグして来た。俺は抵抗せずに受け止める。

「もう、あんな風にはならない？」

「ならないよ」

「お願いよ。私にとっても、君はたった一人の家族なんだから。私を一人にしないで」

「それは俺の方だよ。しずくおばさんがいなくなったら、すごく困る」

「こら、おばさんって言うな」

「さっき自分で言ってたじゃないか」

「自分で言うぶんにはいいんだよ」

葉月さんは俺の胸の中に顔を埋める。

「私のたった一つの願い、聞いてよ」

「…なに？」

「君が幸せになってほしい」

「…ありがとう」

「なにか言つてよ」

「ありがとうしか、言えないよ」

「本気なんだから」

「じゃあ、葉月さんも幸せになつてよ。早く身を固めてくれないと、心配でおちおち女の子と付き合えないよ」

「私はまだ自由でいたいんだ。そう言うのは、いずれ、ね。私こそ、君がせめて一人前になつてくれないと」

「まだまだかなあ」

「全然、まだまだだよ」

葉月さんは、俺を解放した。

「じゃあ、そろそろ行くね。みんな待つてるし」

「うん」

「ちゃんと女の子たち送つてくんだよ」

「わかつてる」

「じゃあね。また連絡する」

「うん。また」

葉月さんは歩き出した。その姿が群衆に紛れて見えなくなるまで見送る。気づくとまだ葉月さんの匂いが周囲に残っていた。まるで葉月さんの優しさに包まれているよ

うで、安心できた。

「司ー、まだー？ 私一人じゃりん運べないから、手伝ってよ」

「悪い、今行く」

「きやははー、しゅごい、コウちゃんが三人ー！」

「この酔っ払いが…」

二人で協力して、なんとかりんをおぶることに成功し、そのまま帰路についた。

#

俺たちの頭上には、際限なく、黒い空が広がっている。時たまそれを眺めていると、俺を構成している過去や未来、現在が全て吸い込まれてしまいそうな、そんな錯覚に陥る。実際はそんなことなく、俺のこれまででして来たことも、これから起こるだろう出来事も、今も、何一つなくならない。なかったことにならない。なら、過去の失敗がなくならないなら、一体どうやって生きていけばいいんだろう。以前はこう考えていた。失敗できないなら、失敗しないようにすればいい。行動を起こさなきゃいい。その場で立ち止まって、緩やかに衰えていけば、何も起こらない。しかし、どうしたものか、考えついたら当時は名案と思つたのだが、今ではそれは悪手だと考えている。

後悔や恥や嘲笑が、少しずつつもり重なって足に絡みつき、さあ、諦めてしまえと、意地の悪い笑みを浮かべている。どれだけ走ったって追いかけてきて、どうしようもない

と膝を屈する。一旦振り切るのを諦めてしまえば、たちまち全身を覆い隠し、過去の苦しみで溺れそうになる。それはいつしか自分の姿になり、もう一人の自分に恨み辛みを言い続ける。この後悔に対抗する手段。それは、自分に胸を張れるようになりたい。そう願うことだと考える。過去の自分に、延々と自分を卑下し続けるかわいそうな俺を、優しく抱きしめてやれたら。自分に正面から向き合えた時、その時初めて、自分に胸を張れた、と言えるんじゃないか。

終わってから始まった、この俺に、怖いものなんて何も無い。

そう思わせてくれた人がそばにいて、笑いあえる。

それは、とても幸せなことじゃないか。

寂寥

クリスマスが過ぎて、世間はすっかり正月モードに移行した、十二月三十日。会社も休みで仕事がなく、里帰りといっても行くところがなく、かといつてわざわざ葉月さんのところに行くのもおかしいと思い、結局、積んでたゲームをただ消化する毎日を送っていた自堕落な男のスマートフォンに、一件の電話が届いた。

「もしもし?..」

『もしもし?..あ、司くん?急にごめんね。今、大丈夫?..』

声の主はりんだ。

「今っていうか、ずっと暇。仕事ないからやることないし」

『そ、それは...。でも、暇なら良かった。明日も何もない?..』

「うん」

『じゃあ、明日一日付き合つて。そのまま初詣しましょ。もちろん、コウちゃんも一緒

よ』

「別にいいけど、何すんの?..」

『お買い物。新春セールやるから。男の人いると助かるの』

「了解。いつどこ集合？」

『十時くらいに迎えに行くから、準備して待ってて』

「わかった」

その後も何かと世間話をして、電話を切った。急に明日の予定が決まったが、かといつて今日は何もすることはないので、のそのそと朝食を食べ、ゲームに戻った。

#

よく晴れた翌日。りんたちの迎えを待っていると、インターホンが鳴った。

「おはよう」

「…おはよ」

「おう。来たな」

ドアを開けると、いつも仕事場では見ないような服と化粧を身につけたりんとコウが立っていた。

「なんだ。見違えたな。二人とも綺麗だ」

「ふふ、ありがと。こんな時じゃないとおしゃれできないもの。ほら、コウちゃんもいつまでも恥ずかしがってないで」

「だって、こんな服、いつも着ないから」

「だからって女の子が部屋に引きこもってジャージでいちやダメよ。せつかくなんだから、楽しまない」と

「うう…」

「心配しなくても、お前も似合ってるよ」

「聞いてないよ！…でも、ありがと」

「じゃあ、行きましよう？もうすぐ開店するの。すぐ混んじやうから、早めに行かないと」

行き先は俺のアパートから比較的近い、若者向けのデパートだ。しばらく前まではクリスマスフェア、次は新春セール、正月が過ぎたら新春フェアと、なかなか忙しい。デパートの前まで行くと、そこそこの列がもう並んでいた。

「はあ、朝早くからようやるなあ」

「毎年こんな感じよ。今年はちよつと少ないかしら」

「あー、やっぱり通販とか？」

「かもね。でも、やっぱり私は自分で見て、試着して選びたいわ。司くんはちゃんと審査、お願いね」

「わかってるよ。あと、荷物持ちだろ？」

「うん。よろしい。コウちゃん、楽しみだね」

「ひ、人がいっぱい…」

「大丈夫よ、取って食べられたりしないから」

「こんな人が多いところ、初めてだから」

「いい経験になるじゃない。じゃあ、コウちゃん先頭ね」

「ええ…」

コウは露骨に嫌そうな顔をする。そうこうしているうちに、扉が開き、並んでいた列が一斉になだれ込んだ。

#

「はー、買ったねえ。お給料だいぶ使い込んだじゃった。コウちゃん、どうだった？楽しんで買ったでしょ？」

「…うん。たまには、悪くないかなって思った」

「ほんと!?じゃあ、また来よう! 司くんも、荷物持ってくれてありがとう」

「俺も欲しいもの買えたし、来てよかった。誘ってくれたおかげだ」

「そういえば、葉月さんの家まであとのくらしい?」

「もう見えてる。ほら、あのでっかいマンションだ」

「うわ、ほんとだ。高そう…」

葉月さんの住んでいるところは、いわゆる、超高級マンションだ。セキュリティも最新型、お部屋は広く、施設も充実している。中に入るには、住人にセキュリティを解除してもらわなければいけない。葉月さんの部屋は1101号室だ。取り付けられているインターホンに1101と押す。

『はーい。あれ、どうしたの?』

「えっと、年末の挨拶です」

『なんだそれ。まあいいよ。上がって』

『解錠』のランプが点滅し、扉が開いた。そのままエレベーターに乗り込み、十一階を
目指す。

「いらつしやい。さ、上がって上がって」

1101号室に備え付けてあるインターホンを押し、葉月さんが応答した。

「しつかしどうしたの? 年末の挨拶なんて。新年なら、まあわかるけど」

「葉月さんにはたくさん世話になったんで。感謝の気持ちをと。もちろん、新年の挨拶にも来ます」

「そうかな? まあ、いつでも来てよ。家にいると暇なんだ」

「でも、本当にすごいお部屋ですよ。ホテルみたい。家賃おいくらするんですか?」
「あー、これ、親の持ち物なんだよね。上京するって言ったら用意されちゃって。だか

らわかんないんだ」

「え？」

「うちのじいちゃんばあちゃん、すつごい大金持ちなんだよ。だから、いい家住めるんだ」

「でも、司のアパートってボロかったよね」

「ああ。俺は、縁切ってるから」

「そ、そっか」

しまった。さらつと重いことを言ってしまった。二人の顔が気を使う風になる。

「ご、ごめんね。変なこと聞いちゃってね」

「いや、いいって。もう昔の話だし。少なくとも、そっちが気にすることじゃないよ」

「そうかな…」

「…いや、じゃあ、気にしてよ」

「…？」

「ちよつと来て欲しいところがある。ほら、俺傷ついちゃったから、言うこと聞いてくれよ」

「う、うん」

「もちろんコウもな」

「わかってるよ」

「司、車出そうか」

「うん。お願い」

そうと決まったら吉日。すぐに駐車場に行き、葉月さんの車に乗り、目的地へと向かう。

「車は軽なんですわね」

「軽じゃないとぶつけちゃうんだよ」

車で片道二十分。目的地に着いた。

「ここは……お墓？」

コウの疑問には答えず、霊園の一面に向かう。ちょうど二日前に来たばかりなので、供えたスイートピーがまだ綺麗だ。

墓の前で、俺は二人に向き合った。

「わかったと思うけど、俺の両親、もういないんだ。俺のワガママに付き合わせて悪いけど、俺の両親に顔、見せてやってくれないか」

正直な気持ち、こんなことは友達に言いたくなかった。しかし、両親に友達を紹介したかったと言う思いも真実だが、何より、隠し事は極力したくなかった。このことが他の変なタイミングでポロリと出て、微妙な空気にさせたくないし、気を使わせたくない。

そして、いつまでも逃げ続けるわけにいかない。

一陣の風が吹く。十二月の霊園に吹く風は、まるで身を切り裂くように冷たい。だが、その時は、確かな温みを感じた気がした。もしかしたら、父さんと母さんが背中を押してくれたのかも知らない。

「俺は、十五の時に、父さんと母さんを亡くしたんだ。そのとき、天草司つて名前前で、俳優をやつてたんだ。色々大変な時期で、それに両親の死が重なつて、気が気じゃなかった日々があつて、ずっとここには来れなかつた。ほんと、人間、やめてみたいな感じだったから。でも、この前、初めてここに来て。その理由を考えたんだけ」

コウとりんを見つめる。視界はすでに歪んでいて、もうろくに何も見えやしないが、せめて、俺が感じている一欠片でもいいから、感謝を伝えたい。

「二人がいたんだ。二人が、俺といってくれたから、おれは、父さんと母さんに胸を張れる。ありがとう」

沈黙が生まれる。それはそうだろう。いきなりこんな話聞かされて、なんて答えていいか、分からないだろう。すると、突然。

「何言つてんの……?」

コウが口を開いた。

「私が居たからって、そんな、私の方が、りんにも、司にも助けて貰つて、私の方が、

感謝しなくちやいけないのに……。あの時のお礼、言わなきやつてずっと思つてて、言えなくて……。なのにそんなこと言われて……。もう、どうしたらいいの……？」

コウは目にいっぱい涙を溜めて、必死の言葉を紡いでいた。

「コウ……」

「コウちゃん……」

「まだ……遅くないかな？ 私は、司に報いたいのに」

コウはずんずんと墓石の前に進み、その場に座り込んだ。手を合わせる。

「司のお父さん、お母さん。私、以前に司にたくさん助けて貰つて。司はああ言つてたけど、私の方が司に支えて貰つてます。司が居なかつたら、今の私はありません。この恩は、一生忘れません。司を生かしてくれて、ありがとうございます」

言い終わったあとも、しばらく何かを祈るように墓前にいた。そして立ち上がると、俺の方へ向かつてくる。いきなり抱きついた来た。

「ちよつ……」

「ありがとう。司。私、司のお父さんお母さんに誓つたから。これから、私のことも頼つてね」

コウの言葉はまっすぐ俺の胸に届いて、染み渡るように、心を溶かしていった。

「ああ。ありがとう。俺も、コウにはずいぶん支えられてるよ。これからも、頼らせて

もらう」

「うん…」

俺への抱擁を解くと、次はりんに向き直る。

「りん」

「うん、おいで」

りんは優しげに手を広げる。

「ありがとう…」

「うん。いいのよ」

りんは、何も言わず、ただ抱きしめる。コウの頭をポンポンと優しく撫でる。

「じゃあ、おれ、水汲んで来るから…」

なんとなく、二人の空間を邪魔しちやいけないような気がして、墓を洗うために水汲

み場へと向かった。

#

「ぐじゅっ…」

「もう、コウちゃん、鼻水垂らして」

りんはそう言って鼻をティッシュで拭いてくれる。散々泣き腫らした後では、もう手

遅れ気がするが、やっぱり恥ずかしい。

「二人とも」

葉月さんが口を開いた。

「二人とも。頼みがあるんだ」

「…はい」

「…」

私たちを見つめる葉月さんの瞳がとても真剣だったから、私は思わず背筋を伸ばしてしまふ。

「これから、司と一緒にいてほしい」

私たちに頭を下げた。

「あの子は、心の何処かで自分は孤独だと思い込んでる。あの子はまだ、過去に囚われているんだ。だからお願い。あの子に寄り添ってあげてほしい。君たちにしか、頼めな
いんだ」

「そんなの当たり前じゃないですか」

思わず口に出た。

「私は、私がして貰ったぶんまで、司に恩返ししたいんです。それに…」

司の両親を見る。

「約束したんです。約束は守らないと」

「コウちゃん……」

「もちろん、りんにもね」

「……うん。わたしも、コウちゃんと司くんと一緒にいたい。仲良くしていきたいよ」

「二人とも……ありがとう」

「なに？三人で何話してただよ」

「タイミング良く、司が帰って来た。」

「葉月さんが、司くんと仲良くしてくれって」

「なんだよそれ。なんか恥ずいな」

「そんなことないわ？私もちゃんと、司くんと仲良くしますって司くんのご両親に約束するもの」

「親の前かよ。もつとムズムズする」

和気藹々と話す司とりんを見て、なぜか急な寂寥が体を包み込んだ。

いつか、りんと、司と、同じ場所に立って、同じ景色を見て、同じ目線で、対等な立場でいたい。魂から、願った。

Re ;

一月三日。冬休みが終わり、会社が再開した。

「うわっ、さむ」

久しぶりに家の外に出たら、一月の冷たい空気が体を引き裂くようにまとわりついてきて、思わず声に出してしまう。

「こりや、今日はバイクはやめといた方がいいな」

そう決意するとすぐに駅に向かって歩く。寒いと、ついつい早歩きになってしまう。どうやら昨日少々雪が降ったようで、道をうつつすらと白く染めていた。これはまた数日はバイク通勤は無理そうだ。

駅に着き、改札を抜け、ホームに出ると、同じく通勤目的のサラリーマンたちが電車を待っている。これまではいつも通りの光景だが、ただ一点、いつもと違うところがある。時刻表のあたりで、自分のメモと時刻表を何度も見比べて泣きそうになっている女の子がいるのだ。十九の俺より明らかに若く見えるので、高校生くらいだろうか。

「どうしよば……。どうしよば……」

何やらブツブツ言っている。間違はなく困っているようだ。しかしサラリーマンた

ちはその姿を尻目に、足早に去ってしまう。薄情なものだ。結局、俺が声をかけることにした。

「あのー、どうかしましたか？」

「ひゃあつー！」

体全体を震わせて、びくりとする。

「あのー」

「な、な、な、なんであうか？わひやし、なにかし、して…」

「え、いや、なんか困ってる風だったので、なにか助けになればと…」

「…」

こちらがやって来た目的を告げると、今度はものすごい警戒する目で睨んでくる。

「ほ、本当に、なんですか…？わ、私が田舎出だからって、弱みを、に、握って…」

「いやいや、そんなつもりないよ！ただ、本当に困ってる感じだったから…。迷惑だったら、何もしないよ」

「…」

「じゃ、じゃあ、頑張つてね…？」

頑張つてね、はさすがにおかしい気がするが、他に何を言えばいいのやら。とりあえず、会社にでも行こうとした時、

「あ、あの……」

この子が声をかけて来た。

「な、なに……」

「あ、阿佐ヶ谷に行きたくて……。でも、メモの通りに進んでも着けなくて、いつの間にか迷ってて……」

「阿佐ヶ谷に？ 阿佐ヶ谷なら、俺の会社があるけど……よかつたら一緒に行く？ あそこの地理なら大体わかってるし……」

「……」

「あー、わかった。じゃあ、行き方教えるから」

「お、お願い、します……」

「……うん」

どうやら人と話すのが苦手な子らしい。ともかく、話が付いた直後に阿佐ヶ谷行き
の電車が来たので、乗り込むことにした。

「東京初めて？」

「……はい」

「どっから来たの？ 俺は愛知の岡崎ってところ」

「……新潟です」

「新潟かあ。やっぱり日本海側だから、雪は多いの?」

「…いえ、そんなに」

「…えつと、こういうことあんまり聞かない方がいいと思うんだけど、年は?」

「…十七です」

「……」

会話が続かない。目も合わそうとしない。やはり人見知りのようだ。しかし、こんな重度の人見知りの子が、一人で東京に来るだろうか。見た所、インターネットに接続できてるものも持っていないようだし、何かしら理由があるかもしれない。

無言の時間がやたらと長く感じられて来た時、阿佐ヶ谷に到着したことを知らせるアラウンスが流れた。

「あ、着いたよ。じゃあ行こうか」

「…」

俺とは別のお扉の前で待ってる。どうやらあ本気で警戒されているらしい。まあ、仕方あるまい。田舎から出て来た人間は都会の人間を不審に思うものだ。かくいう俺もそうだった。

「さあ、着いたけど、これからどこに行くの?場所によっては、送ってくけど」

「…」

彼女は無言で小さなメモ用紙を俺に見せて来る。そこには、こう書かれていた。

『イーグルジャンプ。ゲーム会社。阿佐ヶ谷にある』

「イーグルジャンプ…？これって、俺の勤めてる会社だけど…」

「…！」

彼女はビックリしたように目を大きくする。

「もしよければ、一緒に行こうか…？」

とりあえず、提案してみる。

「い、いえ。あの、場所だけ教えてくれれば…」

「そ、そう？」

ひとまずイーグルジャンプの住所を教える。

「じゃあ、これで。東京も、あまり捨てたもんじゃないよ。そんなに怖がらんであげてな」

「あ、あのっ！」

彼女が俺を呼び止めた。

「私っ、この会社に入りたくて！あのっ、あ、あいがとうございました！」

「…」

驚いた。こんな声も出せるのか。

「うん。俺も、君と働けたらいいなって思うよ」

彼女はそれつきり顔赤くして伏せてしまっている。いつまでも動かない。仕方なく、もう一度「それじゃあ」と言い、会社の中に入った。

結局、彼女は何者だったのだろう。

#

イーグルジャンプの一室。監督室。文字通り、ディレクターが使用する部屋だ。現在、イーグルジャンプにはディレクターの人間は一人、すなわち、葉月しずくしかいない。ディレクターという、ゲーム制作の中でもトップに位置する役職だけに、ホコリひとつない部屋は広いし、デスクトップ等設備も充実している。ただ、一人では持て余す。ここにいれば大体のことができるのに、しずくがわざわざ別部署に出向くのは、単につまんないからだ。

葉月しずくの机には、彼女が撮りためた可愛い社員の女の子たちの写真がずらりと並んでいる。そこには当然、司の姿はない。その写真たちを見つめながら、しずくは考え込んでいた。

暇だなあ。

なんで集合を一月三日にしたんだろう。発売が八日なのに、特にすることがない。仕

事も溜まっていない。要するに、結果が出るまで何もできないのだ。たとえば、結果が良くて、悪くて。

本日三回目のため息を吐く。別に、売り上げ十五万とか考えてない。ただ、本当にやることがない。他の社員も同じだ。やることのないのに、なんで来たんだ、とか考えているだろう。特にやることも言っていないし、適当に時間潰して帰ってくれた方が…。

そこまで考えたところで、ドアがノックされた。

「ディレクター。よろしいですか」

声の主は樫井ミュだろう。

「ミュちゃん？入って入って」

「失礼します」

何も仕事がないとだらけきっていたので、いまいち気合が入らないが、なんの連絡だろう。樫井はやけに険しい顔をしている。

「…ディレクター」

「はい？」

「聞いても、驚かないでくださいいね」

「…はい」

「予約で十万入ったっぽい」

「…はい!？」

#

出社した時にはもう九時を回ってしまっていて、さすがに怒られるかと思ったが、特別にお咎めはなかった。というか、それどころじゃない雰囲気社内にはあった。みんな、忙しく走り回っている。それは、忙しかった時のゲーム制作に似ていたが、一つだけ違う点があった。みんな、笑顔なんだ。

「本当ですか!？」

「ありがとうございます!」

「はい、今後ともよろしくお願ひします!」

そんな声が飛び交っている。

「司くん!」

聞き慣れた声が入ってくる。

「りん。よかった、ちょうどいいところに。こりやいったいどうしたんだ」

「うん!私も司くんに言いたいと思ってたの!」

何やら興奮した様子だ。

「おう。どうしたんだ」

「あのね、予約がすごいらしいの！」

「すごいって？まあ、予約で六万もいけば万々歳らしいけど……」

「もつとよ！十萬行きそうで……」

その時、りんのスマートフォンに電話がかかってくる。

「はい、もしもし……。え、本当に!?うん、うん！ありがとう！また連絡して！」

りんは輝かせた目でこちらをみる。

「十萬突破だつて！知らせてこなきや」

「あ、おい」

呼び止める暇もなく、りんは行ってしまった。しばらくして、隣の部屋から歓声が聞こえる。

予約の時点で十萬本。一般的に見ても成功を示す数字だ。

信じられない。

一人立ち尽くしていると、近づいてくる人影が。

「葉月さん……」

「えーと……」

さすがの葉月さんも言葉が出てこないようだ。

「あ、よかったね。あの……ほら、残留」

「そつちこそ。俺を庇ってくれたの、回避できそうですね」

「あれ、あ、そつか」

「なんで忘れてんすか」

「まあ、ぶつちやけどうでもよかったから」

そこから、二人とも黙ってしまふ。周りにはうるさいのに、俺たち二人の周りだけはあるでボールの中のいるように静かだった。

「…これで、新たなスタートだ。まだまだ終われないよ」

「新たな、スタート…」

「私たちは、これから伝説を作るんだ。私たちも戦いはこれからだよ」

「そんな打ち切りみたいなセリフ言わないでください」

「はは、ごめんごめん」

しずくちゃんは手を差し伸べる。

「また、頑張ろう」

「…うん」

その手を握ると、しずくちゃんの温かい体温が流れ込んでくる。その温みが、新しい一歩を踏み出すための勇気を与えてくれる。手を握る力を込める。俺のわずかな、小さな勇気が伝わるように。それは、俺が俺の夢を叶えて見せると、その宣誓だった。

ひふみん

四月。桜が舞い散り、虫が起き出す、食べ物が美味しい季節。都会の空気をも澄んでいるこの季節は、出会いの季節でもあり、別れの季節でもある。ここにも、新たな出会いに至る少女が一人。

#

東京。ある、築七年の、比較的新しいビルの前に、一人の少女が立っている。桜に囲まれ、桜の花が舞い踊り、その中に佇む彼女は、容姿が良いことも相まって、なかなか絵になる風景を醸し出していた。ただ、その中心たる彼女の顔は、強張って、世界が終わりそうな場面に居合わせたみたいになってたが。

彼女の名は、滝本ひふみ。御年十八歳。本日、この会社『イーグルジャンプ』面接を受ける。自分の何もかもに自信がない彼女はつきり書類審査で落とされると思っていたが、どういうわけか二次審査まで漕ぎ着けてしまった。

「…」

しかし、なかなかその始まりの一步を踏み出せない。そもそも彼女、ひふみは臆病で、今まで地元の新潟からろくすっぽ出たことがないのだ。この前会った優しいお兄さん

のおかげでなんとかここまでくることはできたが、今度は誰の助けもない。あのお兄さんと一緒に働きたいなあと思う気持ちはあるが、世の中そこまでうまく行かないことも知っている。そんなことをうだうだ考えながら、もう十分以上玄関の前に立ち尽くしている。

「あのう…」

「ひゃあつー！」

「またもや声をかけられる。東京人は立ち止まった人に話しかける習性があるのか。今度は女の子だ。ポプカットがよく似合う、しかしそれと言って特に特徴がない、大人しそうな子だ。」

「…」

「あなたも、ここの面接、受けに来たんですか？」

「…?」

「あなたも、ということはこの子も…?」

「あ、ごめんなさい。名乗らず失礼したわ。私は加藤あまね。今日、ここの面接受けに来たの。よろしくね」

「そうやって手を差し出してくる。今までこういうことが全くなかったおかげで、全く、何をしても良いのかわからない。まごまごしていると、加藤さんの顔が曇ってくる。」

「あの…迷惑、だったかな」

「あ、う、ううん！ち、違うの…」

なぜか、この子の悲しい悲しい顔は見たくないな、と思った。

「わ、私、あの。喋るの、すごい、苦手で…。鈍臭いし、トロいし、ええつと…」

「…」

恥ずかしい、穴があつたら入りたい、と思つていたら、

「ふふふ」

加藤さんは笑い始めた。

「え…」

「ご、ごめん！その、あなたがあんまりにも可愛くて…。気を悪くしたなら、謝るわ。

「ごめんなきい」

「いや、その…」

「ねえ、頑張りましたよ。私、あなたと一緒に働きたいと思つたわ」

もう一度手を差し出してくれる。今度は、自然に握ることが出来た。

「あ、あの…滝本ひふみです。私の、名前…」

「ひふみちゃんね。覚えてたわ。これからよろしくね」

それから、行きましよ、とビルに手を引かれて導かれる。あれだけ入るのが怖かった

のに、あっさり足を踏め出せた。

なんだか、私じゃないみたい。こんなに気持ちいが軽いなんて。

#

イーグルジャンプ内、面接会場。

第三会議室と書かれた部屋に入ると、横長の机に三人の男女が座っていた。その中に一人、顔見知りいざいたことに、まずひふみは驚いた。

「さあ、座って」

真ん中に座った、メガネをかけた女性が促す。

「失礼します」

ちゃんと断りを入れてから座る。マナーがまだ出てくるあたり、頭は働いている。

面接のマナーを思い出す。身だしなみも清潔にしたし、髪もさりげなくセットした。あとは、相手の目を見て、挙動不振にならない。敬語の正しい使い方、あとは、笑顔……

!

気にすることが多すぎて、もうパニックになって来た。とりあえず、笑顔だ……!

「さっ」

端の男性が嘖き出した。明らかにこっちを見てた。隣の加藤が肘でつついてくる。

「かおこわいよ」

小さい声でそう囁かれる。

「ーおかしい、笑顔のはずなんだけど。」

「ーもう一度笑ってみよう。」

「…そんなに緊張しなくても良いよ。そんな格式ばつたものじゃないし。この面接では、君たちの人となりを知りたいんだ」

真ん中の女性がやれやれ、といったように宥める。とりあえず笑顔はやめてみた。

「さて、じゃあ面接を始めよう。宮前くん」

「はい」

端の男性が答える。

「僕は宮前司といいます。現在、弊社が中心となっているプロジェクト『フェアリーズ ストーリーⅡ』のプロデューサーを任されています。こちらからいくつか質問させていただきますのでそれに答えていただきます。…まずは、加藤あまねさん」

「はい」

「あなたの履歴書には、芸術系の学校も、塾も何も書いていません。と言うことは、あなたはプロモーションや、プロデューサーを希望しているのですか？」

「いえ。私は、確かに絵を人から学びませんでした。しかし、誰にも教わってないから

こそ、自由な絵を描けると思います」

「では、デザイナー志望ということですか？」

「はい。デザイナーとして、ずっと、私の絵を誰かに評価してもらいたいと思っています」

「…わかりました。では、ありきたりですが。あなたが我が社に応募したのはなぜですか？イーグルジャンプよりもっと有名で環境の良い会社は、たくさんあります」

「…それは、その…」

加藤は言いにくそうにしている。

「加藤さん？」

「あの、私情で恐縮なのですが…。私、フェアリーズストーリーのファンで…。あの世界観に私も参加出来たらいいな、とおもって…」

「…はあ」

「あの、別に点数取りってわけじゃなくて、ほんとに、自分が初めて終わりまでプレイしたゲームだから」

「いえ、わかっていますよ。…はい。では、ひとまずこれまで、ということ。次は滝本ひふみさん」

「ひゃ、あい」

声がひっくり返ってしまふ。

「大丈夫ですよ。落ち着いて。あなたのことが知りたいんです」

「はい…」

どうしてだろう。この人の言葉を聞くと、心が落ち着く。

「はい。では、まず一つ目。あなたの希望する役職とそれを希望した理由を教えてください」

「は、はい。私は、…デザイナーを希望します。なぜなら、…私が初めて褒められたことが絵を描くことだからです」

「はい。それで？」

「それで…？えっと、だから、将来も絵を描く仕事に就きたくて、だから…」

「でも別にゲーム会社じゃなくてもいいですよね」

「それは…。ここしか、二次審査まで通らなかつたからです」

「…そうですか。わかりました。では次に加藤さん」

その後も、面接は私と加藤さんの交互に行われ、無事終了した。

#

面接の後、すぐに結果が出るから待っているとわれ、隣の第二会議室で待っている。

横長の机が長方形の形に並べられ、その一辺のそばに大きなホワイトボードがある。言うなれば、この真っ白なホワイトボードのようにまっさらな気持ちでありたいが、裏腹に私の心内はどんよりしていた。

「ど、どうしたの、滝本さん。そんな落ち込んで」

「…」

こんな気持ちで他人と話すなんて無理だ。そう考えた私はケータイを取り出し、メモ機能を開いた。

『いっばいっつかえちやつたし、絶対無理だよ（；|；）』

「そんなことないよ。確かにつつかえてはいたけど、しっかり答えてたよ。それに、ちやんと帰り際に失礼しましたって言ったし」

『でも加藤さんは堂々としてたじゃん。私はずつとおどおどしてたもん』

「それは人それぞれよ。私はたまたま物怖じしないっただけ。面接なんてものは、相手の目を見て話せばこっちの勝ちなのよ。相手は私たちのマナーと最低限他人とコミュニケーション取れるかどうか見てんだから」

『そうかなあ…』

「そうよ。だから落ち込まないで。一緒に仕事しましょうよ。出来るなら、同じ部署がいいわ」

『加藤さん…。うん、私、元気出してみる（・皿・）ノ』

「うん。よかったよかった」

「加藤さん。ありがとう…」

「うん。それにしても、滝本さんケータイの中じやよく喋るね」

「え、これは、その…うう、いぢめないでよ」

「はは、ごめん。かわいくて、つい」

「もう…」

加藤さんと仲良く話していると、扉が開いた。さっきの面接官の人だ。

「あ、受かったよ。じゃあ早速社内を案内するから、来てくれるかな」

「え…?」

「…」

あまりにもあつさりと告げられてその言葉に、動揺を隠せない。ふと横を見る。加藤さんはまるで動揺を見せていない。

「ん?どうしたの?早くしないと社員カード配れないんだけど」

「は、はい」

男の人からカードと首から下げるホルダーをもらった。

「そのカードは社員証になってるから絶対無くさないように。基本的には朝九時出勤

で、出勤したらあそこにあるカードリーダーにカードを通して。忘れたら必ず経理の人に報告すること。そうしないと給料とか降りないからね。あ、自己紹介しないと。俺は宮前司。プロデューサーやらせてもらってます。よろしく」

矢継ぎ早にまくし立てられ、混乱しているところに、手を差し出される。それを見て、加藤さんは躊躇せず握手した。

「よろしくお願いします。驚きました。まさかこんな早くに結果が出るなんて」

「でしょ？我が社はいつでも有望な社員を募集してるから。入れるか入れないかで悩んでる前に、余所んどこ取られたら一生ものの恥だからね。即戦力になるならよし、ならなくても、育てていけばいい」

「即戦力…」

「君たちの働き次第だ。期待してるよ」

そして私の方を向き直る。

「久しぶり。俺のこと、覚えてる？」

「はい…。でも、あの、どうして…」

「入れたかって？」

「…なんでわかったんですか？」

「そんな顔してたから。まあ、勘、かな」

「勘……？」

「別に君と知り合いだから、とか、そんなくだらない理由じゃない。ただ単に、君は頑張ってくれそうだな、と判断しただけ」

「…そう、ですか」

「ようこそ、イーグルジャンプへ。これから二人と仕事ができることが、今から楽しみだよ」

#

「今、フェアリーズストーリーの続編を作るプロジェクトがある。君たちには明日から早速仕事に入ってもらうから、みんなの雰囲気とか仕事ぶりとかを見てって欲しい」

その後、宮前さんに連れられて、イーグルジャンプを案内された。印象的だったのは、忙しそうにしながらも、どこか余裕を残しているように見えたことだ。曰く、いつもギリギリまで張り詰めていると、いざという時に踏ん張れなくなってしまう。だから、普段から余裕を持って作業をする。そうすれば焦らないし、焦らないことで十全のパフォーマンスを発揮出来る、ということ。葉月しずくというディレクターの方が提案したらしい。特に強烈だったのはキャラ班班長と対面した時だ。ものすごく仏頂面だと思っただけだ緊張してるだけだったことを知った時は、結構かわいい人なのかな、と

思った。

「じゃあ。君たちの希望通り、キヤラ班配属になると思う。今日は色々疲れたでしょ？家に帰ってゆっくり休んで、明日からまた一緒に頑張ろう」

「はい、よろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします…」

最後にもう一度握手をして、彼は仕事に戻っていた。

#

使う駅が一緒だということで、帰りは加藤さんと一緒に帰った。その頃には私は加藤さんに心を許していたようで、途中からはつつかえずに話すことが出来た。

「滝本さん。じゃあ、明日から頑張ろう」

「うん。加藤さんも。気をつけて帰ってね」

今日は色々なことがあった。新しい自分にも会えた。これからもきつと色々なことが起きるだろう。社会人として、大人として、変わることが出来るかな？

#

「コウ、今日の新人二人。どう思った？なかなか将来有望と思わないか」

「…あの、加藤って子」

「…加藤さんが、どうかしたのか？」

「あの子、危ない気がする」

ハリネズミ

『フェアリーズストーリーⅡ』の開発チームが発足したのは、二月の終わり頃だ。『フェアリーズストーリー』の大ヒットを受け、出資会社である芳文堂から指示が下った。もともと機会があれば続編を作りたいと常々思っていた俺たちにとつて、その指示は渡りに船だった。早速その準備に取り掛かったところ、いくつかの問題点が見つかった。続編を作るということは、前作を上回らなければならないという、暗黙のプレッシャーを背負うということだ。前作でなまじっか成功してしまったばかりに、余計に重いプレッシャーがある。前作を上回るためには、いくつかの課題がある。まずは、やり込み要素の追加。前作の評価では、「ストーリーだけでゲームの九割の終わりだった」という意見が多々あった。確かにFFシリーズはストーリー主体のゲームだが、やはりストーリーが終わった後のやり込み要素を楽しみゲームも、一定数いる。サブクエストなどはもちろんだが、ストーリーが終わって、その後のちよつとした追加ストーリーは足してもいいかもしれない、ということ。次に、キャラクターグラフィックの向上。つい先日『PZ3』(Playzone3)という次世代機が発表された。現在主流となっている『PZ2』に変わる存在になることが容易に予想される。全てにおいてバー

ジョンアップした『PZ3』をメインに据えれば、キャラクターグラフィックのさらなる向上が期待できる。最後に、ゲーム自体のスペック強化。何十、何百時間のプレイに耐え、バグを極力起こさない、そういうスペックを作り上げる必要がある。後のシナリオや音楽などはそれぞれが限界を目指すしかない。これら三つを成し遂げるために必要なこと。それは、人数だ。そしてそれは、今のイーグルジャンプに最も足りないものでもある。こういう事情があり、今年のイーグルジャンプはかなりの新人を採用した。結果、キャラクター班二人、グラフィック班四人、背景班二人、プログラム班五人などの、かなりの人数強化が叶った。この世代が次のイーグルジャンプを背負って行く人材となる。

「つつても、これからが大変だよなあ」

「文句言ってもしょうがないでしょ。みんな期待してるし、後には引けないわよ。私だって、新しいキャラクターとか衣装とか、考えるの大変なんだから」

「まあ、そうなんだけどさ…」

コウはメインとキャラ班班長を続投。俺は、前回メインだった樫井さんが別のゲームに引き抜かれたため、メインに繰り上げ。りんは背景班を続投。副班長に就くそうだ。タテビさんは新しいシナリオ作りに頭を悩ませている。大葉さん、新しい音楽作りに忙しい。現在、俺は恒例のスケジュール作成と予算案作成に勤しんでいる。

「だってもうアニメの制作だって話がついてるし、人数だって揃ってきたし…。いい感じじゃない。そんな不安に思うことないんじゃないの?」

「前回がうまく言ったからかなあ。そのぶんプレッシャーなのかも」

「そんなこと思ってたってゲームが完成するわけじゃないでしょ。それよりもう遅いけど、時間、大丈夫なの?」

時計を見ると、午後九時を回っていた。もうすでに周りは帰っている。

「お前は?」

「私も帰る。今日はあんま仕事ないし」

「珍しいな。てつきり俺が帰ってから裸になると思ってたが」

「裸じゃないっつーの。恥ずかしい女みたいに言わないでよ」

「基準がよくわからん。そういうえぱりんは?」

「りんならまだやってると思うけど…」

「とりあえず背景班のデスクまで言ってみた。」

「りん、かえらないか?」

「あ、うん。ごめん。ちよつと待ってて。今スケジュール考えてるから」

「え、でも、それ俺の仕事…」

「でも司くん他にもたくさんやることあるでしょ? だから草案があればちよつとでも

負担が軽くなるかなって」

「りん……お前はなんていいひとなんだ！ありがとう、心に染みるぜえ……
ちらりとコウを見る。

「……なによ」

「いや、何も」

「嘘つけ、絶対こいつはわかってねえなあみたいな顔した！」

「そんなこと思ってるってことはもしや気にしてらっしゃるんですかあ？いやあ、
そっかあ、気にしてくれてるんだああ」

「くっ、調子にのって……」

「はいはい。喧嘩しないの。私も終わったし、そろそろ帰りましょう？司くん、スケ
ジュール草案、明日渡すね」

「おう。んじゃあ、どっか食べに行かないか？腹減ったや」

「私今日はパスタな気分」

「あ、私もー」

「パスタか……。おし、いい店知ってるぜ、いいイタリアン。ピュッフエだから、食べ応
えもある」

「いいね。そこ行こう？私もお腹空いちやったー」

「これから忙しくなるし、今のうちに食べておかないや」

というこことやってきたのは、イタリア料理店『キャナリーロー』。たんまりと皿に料理を盛り、出てきたピザとパスタに舌鼓を打っていると、話は次第に新人の話になった。

「そういえば、背景班のところの新人はどうよ?」

「うん。やっぱりみんな専門学校出てるから、覚えるの早くて助かるよ。」

「あー、俺の事ところにも新人の一人くらい来てくれたら俺の負担が減るのになあ」

「しょうがないよ。むしろ入社一年目でプロデューサーをやるのがおもしろいのよ」

「でも、樫井さんがいなくなったのは寂しいな」

「FFIIの企画が始まる前に別のゲームの方に行っちゃったからなあ。っていうか、

この会社プロデューサー二人って、それこそおかしいだろ」

「まあ、それはゲーム完成してからでいいでしょ。まずは新人を育てないと」

「それもそうだ。コウんとこの新人は、結構頑張ってくれそうだよな」

「加藤さんと滝本さん?二人ともうまいから助かってるよ。でも…」

「でも?」

「加藤さん、ちよつと危ない気がする」

「…その心は?」

「彼女、自分を信じすぎるといふか、猪突猛進といふか、周りが見えなくなる感じがす

る」

「なるほど。つまり、コウちゃんみたいな人ってことね」

「…うん。あんまり認めたくないけど、そんな感じがする」

「なら、同じような性質のお前なら、フオローしてやれるんじゃないか？」

「うん。…でも、なんか、怖いな」

「コウ…」

「私、今まで人とあまり関わってこなかったし、こういう時、どうしたらいいかわかんないから…」

「…お前が、自分のことをまだ以前と同じだって思い込んでるなら、そうなんだろうな」

「…え？」

「でもな、俺から見ても、多分、りんから見ても、お前、変わったよ。気づいてないかどうか知らんけど、会社のみんなもお前のことを認めてる。…だから、なんだ。もつと胸張れよ」

「…うん。ありがとう」

りんがわざとらしく手をパンパンと叩いた。

「さ、そろそろごはんを再開しましょう？せつかく美味しいのに、冷めちゃうわ」

#

帰り道、二人と別れた後、夜道を歩きながら、新人について考えた。思えば、俺たちだつて入社してまだ二年目だ。なのに、もう長いこと所属しているような気持ちなのは、昨年度のあれだけ濃い経験の賜物、と言つてはおかしいだろうが、少なくとも先輩たちと築き上げてきたもの、なのだろう。今回の企画は前作よりも長い期間で制作される。彼女たちにも、同じような濃い経験をしてほしいものだ。

「さて…明日も早いし、今日はさっさと寝るかあ」

#

「ね、眠い…」

結局、昨日は早く寝るといいながらつついゲームをプレイしてしまい、日付が変わってしまった。おかげで今すぐく眠い。目をこすりながら家を出る。そのままフラフラと駅に向かった。五月のうらかな陽気がさらに眠気を助長する。うつらうつらしながら電車を待っていると、見覚えのある後ろ姿が。

「滝本さんじゃないか。おーい」

「あ…お、おはようございます」

相変わらずおどおどしている。

「おはよう。いやー、なつかしいね。確か、初めて会ったところもここだったよね」

「はい…そうですね」

「どう？入社して一月経ったけど、もう仕事慣れた？」

「いえ…そんな。まだまだです」

「コウはどんな感じ？あんまりきついようだったら俺にいつてね？あいつ、突き詰めちやうと周りとか自分がときどき見えなくなることがあるから」

「は、はい。そうします」

「あとは…って、なんか面接みたいだな。ごめんね？俺、後輩とかとちゃんと話したと無くて。なんだか不恰好になっちゃうから」

「…私も、学生の頃、あまり後輩と喋ったこと無くて。怖がられてたんです」

「え、なんで？全然そんな風に見えないのに」

「えつと、多分、人と喋ろうとせずに、こう…仏頂面でいたからだと思います」

「あー。まあ、たしかに後輩と関わらないとそれだけで怖がられるもんなあ。全然そんなつもりもないのに」

「そうなんです。だから、余計話しづらくって」

「もしかして、滝本さんって人見知り？」

「もしかしなくても、そうです…」

「そっかあ。でも、俺とはこうして話せてるじゃない？」

「それは、宮前さんが、なんか、話しやすいっていうか…」

「それは光栄だなあ」

「でも、工作上、やっぱり治さなきゃなって思ってた」

「んん、人見知りを治す方法…。まず、人間以外から慣れるってのは？動物とか」

「動物…」

「あ、電車来た」

やってきた電車に乗り込む。

「それで、滝本さんは何か好きな動物とかある？」

「あ、ハリネズミ、好きです」

「ハリネズミ？それはなんともマニアというか、ハムスターとかじゃなく？」

「あの、昔、友達のお家に遊びにいった時、ハリネズミがいて、すごく可愛くて…」

「じゃあ、今度の休み、ペットショップ行ってみるか。ほら、もう少しで給料日だし」

「…え、いいんですか？」

「うん。まだ忙しい時期じゃないし。俺も動物見て癒されたい」

「はい。じゃあ、今度のお休みで…」

「おう。いやあ、楽しみだなあ、ペットショップ。もう何年も行ってないや。俺、昔は犬飼ってたんだよ。トイプー。滝本さんは、何か動物飼ってた？」

「私は、猫飼ってました」

「あー、猫、いいよね。でも俺学生の時猫アレルギーでね？今は治ってるんだけど……」
その後も和気藹々と滝本さんと話しながら会社に向かった。新しい可愛い後輩は、人見知りでも話すととてもいい子で、一緒にいると心が安らいだ。

あまね

その日のことは、はつきりと思い出せる。五月二十二日。ちょうど、キャラ班に進捗を確認しに行った時のことだった。キャラ班リーダーであるコウに、新入社員であるあまねが序盤で活躍するサブキャラクターの設定画を提出していた。

「だめ。こんなんじゃないだめ。前のと何一つ変わらない」

「…すいません」

「謝らなくていいよ。時間かかってもいいから、これを完成させること」

「あの、せめて何かヒントを」

「そんなことしたら、私の考えが入っちゃうでしょ。それはもうあまねのキャラとは言えない。あまね自身で書き上げるの。だから、机に貼ってある私の絵は全て剥がして」

「でも、あれは私の原点だから」

「ダメよ。何度も言ってるでしょ。このままだと、あまねの絵は私のただのコピーになる」

「…はい」

あまねは自分の席に戻っていった。その目にはわずかだが涙がたまっている。司はおずおずとコウに近づいた。

「おい、お前、少し言い過ぎじゃないか？」

「……ごめん。これはキャラ班の問題だから、あまり立ち入らないで」

「そういうわけにもいかないな。俺はプロデューサーで、制作進行の立場にある。職場内の人間関係の管理も仕事のうちだ」

「……ごめん。少し疲れてたのかも。でも、さつきあの子に言ったことは事実だから。たとえどんな精神状態でも、言ったことは変わらないと思う」

「でもだな、言いかたつてもんをだな……」

「……フォロー、頼める？私が行ってもダメみたいだし」

「……今度なんか奢れよ」

そう言つて、司はあまねの元へ向かった。はつきり言つて、司には絵のことは何一つ分からない。いや、もつと言えば、わかるべきではないと考えている。この領域は、クリエーターにとつて犯しがたい聖域なのだ。中途半端に理解したところで、根底にある苦しみをわかることは、無い。

あまねのデスクに行つてみると、そこに本人の姿はない。反対側の席にいるひふみにどこに行つたか尋ねると、

「あまねちゃんですか…？あの、おトイレに行くって…」

（女子トイレかー）

デスクをみると、端末が無い。恐らく、トイレに持って行ったのだろう。トイレで女の子が籠る用と言えば、相場が決まりそうなものだが…。とりあえず電話をかけてみる。地味に、番号をもらってはじめての電話だった。電話が繋がると、ひつくひつくと、涙を流す音が聞こえる。

「あー、もしもし？」

『…もしもし』

「いま、トイレにいるのか」

『…なんでわかるんです。変態ですか』

「違わい。滝本さんに聞いたんだよ」

『何か、連絡ごとですか？』

「いや、そうでもないっていうか…なんというか、あまり気を落とすなよ」

『見てたんですね』

「ああ。すまん」

『…あれは、いいんです。私の、ミス、ですから』

そういうあまねの声は、だいぶ悔しい色を含んでいた。

「…うん」

『まだ私が未熟だから、いけないんです。八神さんを、失望させちゃう…』

「うん」

『でも私、悔しくて…』

「うん。そりゃ、悔しいよな。正面からあんなこと言われちゃあな」

『でも、八神さんの言う通りなんです。わたしには、「我」がないんです』

「…そうなのか？」

『はい。結局、私は八神さんのコピーなんです。八神さんの絵を見て、八神さんに近づきたいと思って、でも、今まで私がやってきた方法は、八神さんに近づくには、もっとも遠いやり方だったんです』

「…そうか」

『でも…』

あまねが言い淀んだ。逡巡しているようだ。

「いいさ。この際、言っちゃまえ。誰も聞いちゃういないよ」

『…今どこにいるんですか』

「屋上。テキトーに歩いてたら、着いてた」

『…そうですか』

深い、息を吐く声が聞こえてくる。

『私、ひふみちゃんが羨ましい』

心の奥から絞り出すような声だった。

『ひふみちゃんは、天才なんです。与えられた少ない情報で、淡々と絵を描けちゃうんです。私、最初は、この子は鈍臭い子なんだろうな、だから、私が守ってやろう、みたいな、上から目線だったんです。でも、実際には、私は、あの子より何もかもが劣つた。そう思つちゃうと自分でも、気持ち悪い思いが、あふれ出ちゃうんです。冷たい態度、とつちやつてたりして、それで自己嫌悪して、それで自分が何を描けばいいのかわからなくなつて…』

いつのまにか、落ちて着いていた声にはまた嗚咽が混じり始めていた。これが、まだたつた十八の少女の、本音だ。

「…そつか。うん。加藤さんの気持ちは、よく、わかつた」

『…ぐすつ』

「でも、ごめんなあ。おれ、あまり絵には詳しく無いから、俺から見ても、率直な感想を言うぜ。…まず一つ。八神は神様でも王様でもない。そんな格式貼つて、何でもかんでも従う必要はないんじゃないか？八神の絵を原点にしてるなら、それを突き通しやいい。それも、回り回つて自分つてのになるんじゃないか？」

『回り回って…』

「二つに、滝本さんのことだ。確かに、あの子のことはコウもよく話してる。将来有望ってな。ここで人には人の価値があるとかなそんな薄っぺらい話をするつもりはないよ。その、君が言う、人を疎ましく思う、妬ましく思うってのは、人にあつて然るべき感情だと思う。滝本さんから、あまねちゃんは人と話せてすごい、わたしにはできないって話を、散々聞いた」

『ひふみちゃんか…』

「でも、君は君だろう？他人なんて関係ないじゃないか」

『…そんな風に、思えないです』

「人には、結局自分ひとりの面倒を見れるくらいのキャパしかないんだよ。自分の出来る範囲で、自分に来る最大熱量で、最高のパフォーマンスをするしかないのさ」

『…』

「そうすれば、自ずと余計な情報はカットされる。それこそ、コウがいい例だよ。あいつは、目の前に集中すると、何も聞こえなくなる。でも、それは八神コウが天才だからじゃない。自分に対する欲求が強いだけさ」

電話の向こう側は、何も答えない。ただ、かすかな息遣いが聞こえるだけだ。

「まあ、頑張ってくれよ。俺、君の絵、結構好きなんだぜ。なんと言うか、クールな感

じつ」

『…宮前さん』

「ん？」

『ありがとう、ございます。私なりに、もうちよつとだけ、頑張ってみます』

「よし、偉いぞ。それでこそ、我がイーグルジャンプ期待の新人だ」

『もう、茶化さないで。…本当に、ありがとうございました』

「…ああ」

通話を切る。最後の言葉は、少し湿っていたが、それでもなんとか気丈に振る舞った声だった。

(それでいい。頑張れ、加藤さん)

同時に、心の中でエールを送ることしかできない自分が、少し不甲斐なかった。

#

トイレから出たあまねは、鏡で自分の顔を確認する。案の定、泣き腫らしたひどい顔だった。ため息を吐くと、持ってきたポーチから化粧用具を取り出す。いくらなんでも、この顔のまま人前に出るわけにはいかない。黙々と化粧を済ませていると、トイレにひふみが入ってきた。

「あ、あまね、ちゃん」

「ひふみちゃん…」

お互いに何も言わない。あまねは数日前から突き放した態度をひふみにとってしまっていた。ひふみも自分に非があると思っていてどう接すればいいのかも分からない。要するに、お互いに気まずい。

「あの、ひふみちゃん」

先に口を開いたのは、あまねだった。

「ここ数日、変な態度を取って、ごめん。私が悪いの。ひふみちゃんは何も悪くないわ」

「…ううん。私が悪いの。私が、あまねちゃんの気持ちをわかってなくて、それで…」
「わからなくてもいいよ」

ひふみは思わず顔を上げた。また突き放されたと思ったからだ。しかし、わからなくてもいい。そういったあまねの顔は、穏やかだった。

「ううん。本当は、人が何考えてるなんて、わからないんだ。わからないから、その人のこと、考えれるんでしょう？」

「…そうなのかな」

「私はそう思ってるよ。だから、ひふみちゃんは私のことわかってもらいたんで

しよ？ひふみちゃんが悪いなんてことは、絶対にないよ」

「…でも、私は」

「ひふみちゃん」

あまねがひふみの肩を抱く。

「私、もつと強くなるよ。たしかに、天才のひふみちゃんには勝てないかもしれないけど、でも、凡才は凡才なりに精一杯やらなきゃね」

「わたし、天才なんかじゃないよ…」

「そんなことない。ひふみちゃんは天才だよ。…だから、私の目標にさせてよ」

「…私なんか？」

「ひふみちゃんがいいの。ひふみちゃんを追いかけさせて」

「…」

そう懇願されるひふみの表情は、曇っていた。

あまねがそう言っている理由がわからない。ただ、友達を悲しませないようにするた
めに。

「…うん」

ひふみは、頷くことしか出来なかった。

「大丈夫」

今年の三月。その月に、司たちに役職が発表された。しずくがメモ用紙を読み上げる。しばらくして、司たちの順番が回ってきた。

「宮前司、制作進行兼、イーグルジャンプ側プロデューサー。遠山りん、背景班副リーダー、八神コウ、キャラ班リーダー兼、AD」

司にとって、樫井が抜けた穴に重い役職が来るのは覚悟していたことだった。まだ二年目とはいえ、前年度の濃い経験は自分にとって、強い自信になっていることはわかっていた。だからこそ、事前にしずくから頼まれた時には、流石に戸惑ったが、最終的に引き受けたのだ。そもそもイーグルジャンプには人材がいなく、この時点で満足に仕事を任せられる人材がいなかったことも原因の一つではあるが。

「始まったな…。新しいゲーム制作」

「これまで以上に頑張らないと」

「…」

その時の、コウの表情をもっと読み解いてやればよかった。司には、コウが単に新し

い役職に不安を抱いているだけだと、ただそれだけだと思ってしまったから。

#

「それでは、会議を始めます」

五月末。あまねのあの一件から一週間後に、初めての月例会議が開かれた。ここで、初めて全ての班のスケジュールを確認し、この会議ですり合わせる。それを鑑みて、制作進行は本格的なスケジュールを組んでいくという流れだ。それぞれの班長が提出したスケジュールに簡単な操作を施し、プロジェクトに映し出す。

その後、それぞれの進捗をまとめ、ここでスケジュール通り行っていたらよし、遅れていたら、その都度修正を繰り返していく。マスターアップ、発売日を決めるのは大体来年あたりになりそうだ。

「では次はキャラ班。お願いします」

「…はい。ここではキャラ班に加えて、ADとして全体的な進捗も合わせて発表します。背景班、モーシヨン班は当初のスケジュールより少しペースが早いです。この余裕のある部分を後からの修正に当てられると思います。あと、エフェクト班はスケジュール通り、そして…キャラ班は、だいたい遅れています」

「その遅れは、どのように取り戻せますか？」

「…すいません。これから対策を練るところです」

「わかりました。では、後ほど対策案を提出してください」

「…はい」

一抹の不安を残し、その日の月例会議は終わった。

#

「なあ、コウ」

会議が終わり、コウを呼び止める。

「大丈夫か？最近、どうもおかしいぞお前」

「…大丈夫だから、気にしないで」

「いいや、気にするね。なんでも話せとは言わないけどさ、辛いなら、ほら、あるだろ

？」

「…大丈夫だから」

コウは先程言った言葉を繰り返し、仕事に戻っていつてしまった。

「…まったく」

思わずため息をつく。

「なんでうちの連中は大丈夫で済まそうとするかね」

#

数日後。六月になって、そろそろ梅雨時が目の前に迫る。この日、ようやくあまねのキヤラクターデザインにOKが出た。

「ありがとうございます！」

「うん。いいものに仕上がってくれて、私も嬉しいよ。ただ、どうしても加藤さんの描く絵は生物感っていうか、生きてる感じが足りない気がするから、今後もそこを注意してほしい」

「はい」

「それに、絵が私っぽくなくなって、全体的に自分の味が出てきた気がするよ」

「はい、でも、やっぱり私の根底にあるのは八神さんです。それをどうすればいいのか悩んでた時、宮前さんに相談に乗ってもらって」

「そっか、司が…」

「はい。すごく感謝してます」

「じゃ、なおさら頑張らなきゃ。早めにスケジュールを元どおりにしないと、司も困っちゃうから。とりあえず、残りのNPCのモデリング頼むよ。滝本さんの分を分けて貰って」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

あまねはコウの席から離れる。コウに自分の姿が見えないように、廊下の影に隠れた。

「う…」

胸を押さえてうづくまる。

「大丈夫…大丈夫だから…」

#

昼下がり。昼ごはんを取って少し眠くなってしまうような、心地よい日差しの中、司は自分のデスクで作業をしていると、突然、

「あの、相談が…」

ひふみが司を訪れた。

「あまねちゃんの、話なんですけど…」

「加藤さん？」

はて。あまねについての相談とは。この前の一件は解決したのでは無かったのか。とは言え、まずは話を聞いてみなければなんとも言えない。

「あの、別に、困ってるとかじゃないんです。でも、なんかおかしくって…。空元気っ

ていうか…。この前、あまねちゃんのデザインにOKが出たんです」

「やったじゃないか」

「…そうなんですけど、あまねちゃん、時々、すごく悲しそうな顔をしてて…でも、訳を聞ける風でもなくて…」

「それで、とりあえずここに来た」と

「…はい」

困った。ぶつちやけそんなこと言われても何も出来ない。なぜなら、あの一件以来、司は激務に追われて、りん、コウ以外の他人と話さなかったからだ。もちろん、あまねとも会ってないし、話してもいない。

「わかった。それじゃ、俺の方からも気にかけては見るよ。でも、加藤さんにここで一番近いのは滝本さんだから、いざという時、力になってあげなよ」

こんな漠然としたアドバイスしか送れない俺を許してほしい。司は心の中で謝罪をしたが、ひふみは顔を綻ばせて、

「…はい！」

と出て行ってしまった。

#

そこからというものの、特に問題は見当たらず、静かな毎日が過ぎていった。クオリティをあげ、バグを取り除き、少しずつ少しずつトンネルを掘り進めていく。そんな作業が続けている。

この日から、コウがだんだんおかしくなっていた。

変調

「あつちい…」

六月に入つて、暑さと湿度が本格的になつてきた。その日、司は久々の外回り、つまり出資会社である芳文堂との打ち合わせ諸々や、取り扱い店舗の確認をしてきたところだ。現在、イーグルジャンプ周辺まで帰ってきた。お偉いさんとの会談で凝った肩に、阿佐ヶ谷の町は優しくほぐしてくれるようだ。きたばかりの時は見なれなかつたオシヤレなカフエも、今ではすっかり慣れたものだ。しかし、町に慣れても気候には慣れない。今は暑いとはいえまだ六月。クールビズ期間は訪れておらず、スーツは脱げない。すでにカッターシャツは気持ち悪いほど汗を吸つていている。

「あー、これは一回家に帰つて着替えて来ようかな」

話す相手もないのにとりあえずぼやいてみる。流石にこの格好のまま会社に戻るのには抵抗がある。ちようどお昼時だし、昼食ついでに一旦帰宅しようか。ただでさえ女の子ばかりの職場は気を使うのだ。そこまで考えたところで、ふと目線を彷徨わせる。今、視界の隅に見覚えのある金髪が見えた気がした。

「…コウ？」

しばらく止まって周囲を見回すが、いない。

「…気のせいかな？」

チームのみんなは、今出社して仕事しているはずだ。あのコウが仕事をサボるとも考えられないし、りんに注意されて以来、昼食をコンビニに買いに行かないはずだ。コウが仕事に出歩く理由がない。その微かな違和感を抱えたまま、とりあえず家に戻った。

#

結局、昼食は会社で取ることにして、着替えるだけでさっさと戻ってきた。

「お疲れ様です。進捗、どうです、か…」

ブースに入ると。

ひふみが泣いている。

あまねがうずくまっている。

空気が、冷たい。

「…なんだ、これ」

「司くん！」

後ろから、りんが現れた。

「りん」

「コウちゃん、見なかった!？」

その瞬間思い浮かんだのは、一瞬映った金髪の影。

「コウがどうかしたのか？」

「…理由はあと！とにかく、見つけないと…。みんなも！」

りんはそう言つて振り向くが、誰も何も言わない。

「…っ」

りんは苦しそうに顔を歪ませ、出て行つた。

「…?」

司は未だ、何が何だかわからない状況だ。

「い、一体、何が…」

「行つてあげなよ」

先輩の一人が声を上げる。

「友達なんですよ。私たちは…そんな気分になれないから」

ここで状況を聞くべきか、それともコウを探しに行くべきか。司は迷わなかった。

「ちよつと行つてきます」

一目散に外に出て行った。

#

「もう、無理です」

あまねが立ち上がった。

「もう、限界です。ついていけない。何考えてるんですか、あの人。他人に無茶なことばかり押し付けて。もう、無理……」

「あまねちゃん……」

「ひふみちゃん。ごめん」

そう言つて、出て行ってしまった。

「……どうするのよ、これ」

「知らないわよ！責任取るんでしょね、あの子……」

誰かのヒソヒソとコウのことを非難する声が聞こえ、いつしかブース中が怒りに満ちていった。

ひふみは自分の胸が締め付けられるように痛むのを感じた。

（嫌だな、これ）

ただ、嫌だ。

（なんでこうなっちゃうの？なんでそんなに関わりたがるの？わかんないよ、もう…。どうでもいいじゃん、他人なんて。そんなことより、みんなやることあるでしょう？）
そんなことを心の中で思ったところで、他人に伝わるわけがない。コミュニケーションしなければ、人間は意思疎通できない。しかし、ひふみにはそんな勇氣はない。声が出ない。みんな、あまねのことじゃなくて仕事の遅れの責任をどうコウに取らせるかばかり考えている。その話に熱中するばかりに、本来自分がすべき仕事をやっていない。

（なんでこんな時でも、私は自分の気持ちに喋れないの!?そんな自分が嫌だったんでしょ!?あまねちゃんの後ろにいるのはもう嫌なの！）

「あの…」

「いい加減なこと言っていないで手を動かしてよ」

声が響いた。

「くだらないんだよ。他人のこと気にしないで今日のノルマこなしてよ。そうしないとスケジュール遅れるんだよ。そうなたらあんたらの大好きな責任取らなきやいけなくなるけど」

声を発したのは山本真弓。かつてコウと対立して負け、メインになれなかった。彼女の声は、決して大きくはなかったが、不思議とブースの隅まで届いた。

「で、でもさ…あんたも八神のこと嫌いでしょ？ムカつかないの？自分勝手なこととしてこれかよ、みたいな」

「個人の感情とゲーム制作は関係ないでしょ」

そう言つてさつさとコウに命じられたモデリングを黙々とこなす。それを見ていた他は釈然としなさそうにしながらも、だんだんと仕事に戻つていった。

ひふみはそんなとりに座る先輩をじつと見ている。

「…なによ」

この怖い先輩がひふみは苦手だったが、自分に話しかけてこない人は、基本的にいい人だと思ふひふみの気質からして、山本はいい人だった。

「いや、あの…。ありがとうございます」

「なにか」

「あの、私の言つて欲しいこと、言つてくれたから…」

「別にあんたのためじゃないわよ」

「…です、よね」

やっぱ怖い。

「ま、ムカつくのはみんな一緒よ」

「…へ？」

「あの子のこと。嫌がらせした側から言うのも変だけどね…。いや、知らないんだっけ。なんでも良いや」

「…」

「でも、思っていることあんなら言った方がいいわよ。ストレス溜まるわよ、その性格」

「…ですよね。でも、あの、どうすればいいか…」

「そんなの私に聞かないでよ。まあ、自分の好きなこと好きなようにやったら？」

「好きなこと…」

その後も会話を続けようとしたが、仕事に集中してしまっただけらしい。

「…疲れた」

誰にも聞こえないようにほっそり呟いた。

（私の好きなこと…。アニメ、とか？そういうえば、ちよつと前にアニメのキャラクターの服かわいくなってると思ってたっけ。デザインの参考になるし、コスプレ、やってみよっかなあ）

そう思っているとあまねが帰ってきた。

「あまねちゃん、大丈夫…？」

「…」

そのまま荷物をまとめている。

「え？ちよ、ちよつと…」

「今日のノルマ終わったから」

「ま、まっつて…」

追いかけてようとすると、止められた。

「いいから。ひふみちゃんは仕事してて」

「でも…」

「早退だから。明日また来るよ」

はつきりと『こないで』を突きつけられる。何も言えない。

「あまねちゃ…」

あまねは悲しそうな顔に歪ませる。そして背を向けると、ひふみから去っていった。

「じゃあね」

#

司は全速力で走っていた。革靴のせいで足が猛烈に痛い。

やがて、先程通った道まで戻ってきた。あれからもう小一時間は経っている。おそらく周辺にはいないだろう。ここは東京だ。行こうと思えば隅から隅まで何処へでもい

ける。

「くそ……」

全くもって状況を理解してないが、とりあえず本人を見つけてなければ話にならない。ならないが、こうも手がかりがないと途方に暮れてしまう。ひとまずコウのスマホに電話をかけてみる。

「……くそ。そういうえばデスクに充電器挿しっぱなしのやつが置きっぱだったな」

確か、ちらりと見たコウのデスクには、スマホ、小さなカバン、そしてりと買いに行つたというフェアリーズストーリー店舗特典の財布と*S u i c a*が置いてあつた筈だ。

「……ん、財布?」

東京は、行こうと思えば何処へでもいける。いけるが、それはある程度金がある時の話だ。

「じゃあ、まだ遠くには行つてないか……?」

コウが行きそうな場所を考える。この辺りのカフェなんかには行きそうにないし、カラオケに一人で入りそうでもない。とすると、考えられるのは、自宅か、それかネットカフェ。自宅は電車に乗らなければならない。そういえば、この前ネットカフェの会員のポイントがたまつてるとかなんとか、聞いたことがある。とりあえず目星をつけた

後は、阿佐ヶ谷周辺のネットカフェを検索する。

「よし、とりあえず行ってみるか」

りんから連絡が来た。

「もしもし」

『どう？ 見つかった？』

「まだ。でも目星は着いたから、とりあえず向かってみる」

『何処？』

「コウのことだから、ネットカフェだろうな」

『わかった。もしかして、コウちゃんがよく行ってるところ？』

「よくわかったな」

『うん…全く。女の子が一人は危ないってあれだけ言ったのに』

「ま、説教はとりあえず後だ。一旦集まるか」

『うん。それがいいと思う』

りに自分の現在の場所を大まかに伝える。

『了解。今から行くわね。できる限り急ぐわ』

「頼む…よし」

全く、あの家出娘め。何があったんだよ。見つけたら散々文句言ってやる。その思い

を胸に、りんを待った。

#

コウのネットカフェで使う部屋はいつも決まっている。入り口から右の通路に行つて、七つある部屋で、前から四つ、後ろから三つの位置にある真ん中の部屋だ。だいたいの席は空席で、入ってるにしてもものの数分で出てくることが多い。理由はよく分からないが、コウ曰く、呪われてるから、らしい。

今、司とりんは、そのコウのよく利用する部屋の前にいる。

「よし、開けよう」

「待って。私にやらせて」

「…どうした？」

振り向けば、りんがえらく深刻な顔をしている。

「…今まであえて聞かなかつたんだが、コウに何があつたんだ？今、チームに何が起きてるんだ」

「…私から言うのは簡単だけど、私は当事者じゃないから。いい加減なこと言えないわ。だから…」

ドアノブに手をかける。

「コウちゃんから聞いて。私も怒ってるの」
ドアを開けた。

#

「……」

そこには、予想通り、コウ本人が居た。

「…なあ、コウ。お前、どうしたんだよ」

「……」

しかし、そこに居たのは、コウではない。この覇気の無い姿は、コウではない。

コウは、狭いスペースに体育座りをして、顔を埋めて、動かなかつた。なんの反応もない。ただ、体が上下に動いていることから、生きていることは分かる。そんな状態だった。

「コウちゃん、何してるの？会社に戻らなきゃ。こんな所にいる場合じゃないでしょ？」

「……」

コウは何も話さない。ただ、肩が小刻みに震えているだけだ。

「コウ…なあ、話してくれよ。何があつたんだよ？どうしてお前がそんなのか教えて

くんないと、俺もその、なんて言うか、言葉の掛けようがねえよ」

「……」

何も応えない。

「とりあえず、会社に行こう？ みんなにきちんと話せば、分かってくれるよ」

「……」

コウは動かなかった。

「……ごめん、司くん」

「ん？」

「コウちゃん、負ぶってもらえる？」

「そこまでしても連れ帰るのか？」

「うん」

「…それは本当にコウのためになるのか？」

「何が言いたいのか？」

「…きつとコウは疲れてるんだよ。人には休息期間が必要だろうか？ だから…」

「そんなの、意味ないよ…」

りんはうずくまった。

「もう遅いよ…このままじゃ、みんながコウちゃんの敵になっちゃうよ…。じゃ、どう

すればいいの……」

涙声で話すりに、司は。

「……」

何も、言えなかった。

何も無い

あの後、会社に今日は三人とも早退します、とだけ伝え、コウを半ば引きずりながら、司とりんはコウの家まで運んで行つた。りんが合鍵を持つているからだ。コウは司に負ぶわれている間、ただ、静かに涙を流しているだけだった。家に着いた後も一言も喋らず、呆けたように座っているだけだ。もはやりんも諦めたらしく、一言も話さない。

こういう時、どうするべきか。何だかんだ一年以上の付き合いになって、この人らとの喧嘩はもちろんあつた。司とりん、コウが言い合えば、りんとコウも喧嘩することもある。そうなつたら、対処法は、ただ一つ。

司は立ち上がり、キツチンに向かつた。まるで買ったばかりのように、随分と綺麗だ。コウが掃除するとも思えない。おそらく、りんがご飯を作りにきたときにしか使わないのだろう。上にある棚を漁る。すると、以前に買った、少々値が張るいい緑茶の茶葉が残つていた。以前司が出張に行つた際のお土産だ。りんは喜んでくれたが、コウは微妙な顔をしていた。あまり興味が無いのかもしれない。

やかに水を入れ、コンロにかける。IHなんて良いものじゃない。その間に茶葉の準備をする。体全体に染み渡るような、茶の香りが鼻をくすぐる。やがて、やかに入

れた水が沸騰すると、茶葉を入れた急須にお湯を注ぐ。お湯に茶葉の成分が行き渡るまでに、また上の棚を漁る。すると、またもや出張先で買ってきたチョコクッキーが出てきた。こちらは随分と減っている。茶を三人分のコップに入れ、チョコクッキーと一緒にお盆に乗せて、二人がいる背の低いテーブルまで持つていく。

「ほら」

「あ、ありがとう」

「コウも」

「…りがと」

掠れた声で応じた。もうすでに五時を回っている。昼時から何も口にしていないのだろう、コウの限界が見て取れた。

その後はひたすら三人の茶を啜る音とクッキーを食べる音が部屋に響いた。しばらくして、クッキーも茶も無くなる。

「…なあ、りん。ここは一旦解散にしないか？コウも疲れてるだろうし、明日は休みだろ？そこで話聞けばいいじゃないか」

「司くんはそれでいいの？」

「構わない」

「…分かった。じゃあ、今日のところは諦めるわ。でも…」

りんはコウを見る。睨むように。

「明日、ちゃんと話してもらおうからね」

「……」

コウは、かすかだがたしかに頷いた。

#

家に帰って、とりあえず風呂を浴び、簡単な料理を作って、コーラで喉を潤しながら考える。結局、司はこの状況を全く知らないのだ。何が起きたか分からない。分からないが、それなりに推測出来ることがある。会社に帰った時に見た、あまねの歪んだ顔とブース内の空気。全く、自分が嫌になる。コウが前から張り詰めていたのは分かっていた筈だ。緊張の糸をほぐしてやるのが自分の役目なのに。ましてその糸を切ってしまうなんて。

「はあ……」

思わず頭を抱えてしまう。その時、スマートフォンが鳴った。見てみると、葉月から連絡の通知だ。今日はどうしたの？といった内容のメールだった。

気づいたら、葉月に電話をかけていた。二回目のコールで出てくれる。

『もしもしっ？どうしたっ？』

「…あの」

声音で察してくれたらしい。電話の向こうで神妙な空気になるのが分かった。

「今、大丈夫だった？」

『全然大丈夫だよ。…やっぱりなんかあったんだね』

「うん。…話、聞いてる？」

『私も今日出張だったから、人づてだけだね。なんでも、コウちゃんか新人の子に酷いこと言ったらしくて』

「そっか…」

ため息が出る。

「これは…どうすればいいんだ…？思うに、これは本人たちの問題でしょ？俺たちが干渉したって、本人たちが納得しなかつたら、ずっと残り続ける」

『私たちが出来ること…。そうだな。単純に、話し合いの場を作るとか』

「話し合いの場…」

『そう。逃げられないようにして、とことん、それこそお互いが納得するまで、話し合わせる』

「そ、それだ。それがいいかも」

『とりあえずそうしてみて、危なそうだったらまた考えればいいよ。…司。やれる？』

「うん、大丈夫。やるだけやってみるよ」

『ごめんなさい、私が仕事を立て込んで、司に負担かけて』

今更だが、現在葉月は芳文堂のプロデューサー、大和・クリスティーナ・和子とともに、出張中で、あと数日は帰ってこない。

「全然。そんなことないよ。そっちこそ体、気をつけて」

通話を切る。

「はあ…」

安堵のため息だ。自分のことを心配してくれる人がいることに、その人とながれることに、ひどく心が落ち着く。

ちらりと時計を見ると、十一時を回っていた。いつもならもう少しゆっくりしているのだが、今日はもう寝よう。今日は今日でも、目覚めたら違う朝だ。なるようになる。

#

翌日。朝のうちに、りんとかウを家に呼び出した。ここに来て、ウとりんは話さないままだ。

椅子に座った二人に、熱々のコーヒーを出す。

「さあ、とことんまで言ってもらおうからな。お前の正直な気持ちを言ってくれ」

「うん…」

コウは昨日よりも落ち着いたようだが、まだ元気がない。まるで、何かに諦めたかのようだ。

「昨日、おこったことは…」

嫌だ

その日、コウやあまねたちキャラ班は、いつも通り、普通に仕事をしていた。いつも通り、誰も喋らず、課せられたノルマを片付けていく作業を。司はこの日まで外回りが詰まっております、会社に戻る暇がなかった。りんも背景班が忙しい。三人は、この日、バラバラになっていた。

「……」

この日でコウは二徹目。どうしても新作のキャラデザに納得がいかない。さらには、ADとしての責任、重圧。正直、任命された日から気がおかしくなりそうだった。最近では実際に気を失いかけたこともある。でも、誰にも言わない。一番親しいはずのりんにも、司にも言わない。二人に追いつきたいから。隣に居たいから。二人に返しきれないほどの恩を返したいから。きつとこの仕事をやり遂げれば、私は変わる。胸を張れるんだ。ただ、それだけの思いが、彼女を動かしていた。

無心になってペンを動かす。無心の方がアイデアがスツと出てくることもある。

「出来ました」

あまねが完成した、キーモブキャラの設定画を提出する。

「ありがとう、そこ置いといて」

今見ている暇はない。自分は、このゲームの顔を書いているんだ。そんなモブキャラ程度、なんだっていうんだ。

「…すいません。モブキャラ程度で」

「…っ」

声に出てた？まさか。もう、声も出ないくらい疲れてるはずなのに。

「出てますよ、声に。先輩、疲れると隠し事できないんですね」

「…ああ、そう。ごめんね。でも、今はちよつとキャラデザに集中したいから。後でいいかな」

「そう言つて、昨日も結局見てくれませんでした」

あまねがデスクのある一点を見つめる。コウもその目線を辿ると、目に入ったのは、大量の設定画。そういうえば、昨日も提出された気がしないでもない。

「…ごめん」

「いいですよ、謝らないでください。先輩が頑張ってるって、みんな知ってますから」
字面だけ見れば、なんていい後輩なんだろうと思つてしまった。しかし…。

コウは、その言葉に、悪意を感じてしまった。

「…ありがとう」

その違和感を胸にしまい、作業に戻るためにデスクへと向き直る。ふと、周りを見渡していた。みんなちゃんと仕事やってるかな、程度の気持ちだった。

偶然だったのかもしれない。たまたま、その時、後ろを向かなければ、こんな思い抱かなかったのかも。

あつたのは、悪意の目。

自分だけ特別だと思いやがって、という汚い声。

「……え？」

思わず声に出してしまった。同時に悟ってもいた。ああ、やっぱり私は、そういうやつなんだなって。

「ふざけないでよ。一人だけ頑張ってるって顔して。やってんのはあなただけじゃないのよ」

「あんただけ辛いみたいなの顔しないで。あなたに付き合わされる私たちはたまったもんじゃないわ」

「もう嫌だ……。疲れた……」

みんな、口からブツブツと声を漏らしている。普通なら、聞こえない程度の声だろうが、誰も喋らない静かな、しかも狭いブースだったのが不幸だった。いや、招き寄せた。

「……」

薄々気づいていた。みんなが私のことをよく思っていないって。一年前から続く因縁は、まだ無くなつてないことに。それを承知で放つて置いた、私のせいだ。私の、せい…。

「あれ…」

視界が歪む。鼻が熱くなつて、耳がぼうつとする。視界がクリアになつたと思つたら、手元の資料に大きなシミができた。

「ふっ…。う、ふうう…」

声を抑えきれない。嗚咽が大きな大きくなる。狭いブースだ。すぐに周りも気づく。

「ちよつと…なに泣いてんの…？泣きたいのはこつちよ…！あんたのせいで、みんなどれだけ疲れてると思つてるの!？」

「あなたが全部抱え込むから、キャラ班が余計に働かなきゃいけないんじゃないじゃない！」

「だいたい、あんたがキャラデザじゃなければ、もつと…」
もうやめて。

「もつと、みんな幸せだった!」

ポタポタと涙が落ちる音がやたら大きく感じられる。

ブース内は私への怒号の大合唱だ。

でも、私の周りに薄い膜があるみたいに、音がぼやける。

なにもきこえないの。

なにもきこえないの。

みんなわかってないんだから。

わたしのきもちなんて。

しらないから、ひどいこといえるのよ。

あのふたりなら、そんなこといわない。

あのふたりなら。

りん。

つかさ。

「みなさん、やめてくださいよー！」

あまねが叫んだ。

「こんなところで言い合いしても仕方ないじゃないですか！私たちゲーム作ってるんですよね!? ケンカするためにここにいるわけじゃないですよね!? 八神さん責めても何にも意味ないじゃないですか！八神さんだって、人一倍頑張ってる…」

「あなたに私のなにがわかるの…」

口がいつのまにか声を発していた。

「え…?」

「誰も私の気持ちなんてわからないよ…。あの二人以外、だれも…」

「八神さん…?」

「うるさいっ！触らないでっ！」

彼女の手を払った。

「才能がないくせに、私と同じ場所になくせに、なにわかった風なこと言うの！ムカつくんだよ！お前らも、私ばかりだけどな、自分ならどうなんだ!? やってみろよじゃあ！ふざけるな！私を悪者にして！私と同じ思いをして、同じ努力をして、同じ屈辱を味わえ！」

もう、止まらない。

「もう、知らない」

だれかたすけてよ。

……という夢をみたんだ」

全てを語り終えた後、コウはしばらく上を向いて黙っていた。何も喋らず、シミひとつない天井をじっと見つめていた。

しばらくして、また口を開く。

「これで、昨日あったことは全部話したよ」

「…いや、話したよって…。だ、大丈夫なのか?」

「大丈夫なわけじゃないよ。でも、もう、いいやって感じ。なんでも、どうでもいいよ。ごめんね、心配かけたみたいで」

「いや、いやいや、ちよつと、ちよつと待って。なんでそんな諦めた風なんだよ。おかしいだろ。俺たち今からこの状況なんとかしようつつって、それで」

「別にいいよ。これは私一人の問題だから」

「それは違うだろ。俺たち三人で解決すべき問題だ。…要は、一年前のコンペの溝がまだ埋まってないって話だろ?もう一回話し合っけきっちり納得しあえばいいじゃないか」

「だからいいって。もうこれ以上何もしなくていいから」

「そんなわけには行かないだろ？なあ、なんでそんな投げやりなんだ。これからのイーグルジャンプにも、フェアリーズストーリーにも、お前は必要なんだ。…頼むよ」
「…これは、私ADを降りればいい話だよ。後任は山本さんにやってもらおう。明日葉月さんにも話す。これでいいでしょ？」

「なんだよこれでいいでしょって。なんで俺に確認取るんだよ。ADを降りるだつて？そんな勝手が許されるのか？」

「でもみんなこれを望んでるよ」

「みんなって…。そんな関係ないだろ？お前はどうしたいんだ」

「私は…」

コウは続く言葉をつつかえた。そして静かに涙を流した。

「私、は…ADを降りたい」

「…ああ。そうかよ」

司は強張った体を脱力させた。

「じゃあいいや。よくわかったよ。お前が望んでないなら、俺は何もしない。りんにも頼めば？」

「りんにも頼まないよ。これは、私一人の問題だから」

「…そうか」

コウは言い終わると自分の荷物をまとめだす。

「じゃあね。心配してくれてありがとう」

「…」

司は黙ったままだ。

コウはそんな司を尻目に、玄関まで行き、出て行った。

「…なんで、なんも言わないんだ？」

「…昨日、コウちゃんから相談されたの。明日私が言うことに納得してって。口を挟まないでって」

「それは相談とは言わないだろ」

「でも、これで私は助かるのって言われたら、何にも言えなくなってる…」
りんは今にも決壊しそうな目で司を見る。

「ねえ、このまま私たちが介入してかき回したら、それこそコウちゃん、困っちゃうんじゃないかな？私、コウちゃんの言ってること、案外間違ってるんじゃないと思うの。このままADを続けるなんて言ったらそれこそ反対意見が出てくるでしょ？これが一番角の立たないやり方じゃないかな？」

「…」

確かに、りんの言ってることは一理ある。ここまでこじれた場合、それしか方法が無

いと言っても過言ではない。しかし、それならコウは？ADをやめて、味方もほとんどいないキャラ班で、ずっとやって行くのか？

きつと、コウは大丈夫だろう。大丈夫と言い続ける。心配しないで。私なら平気なの。慣れてるから。泣きそうな顔で言うに決まってる。本当は辛いのに。

「…ふざけるな…」

ポツリと呟く。許せるはずがない。こんな状況になってしまったことも、それを放置することも、一瞬たりともそれを思ってしまった自分自身も。

「ならどうする？どうすれば正解だ？」

「…司くん？」

りんが心配そうに覗き込んでくる。

「司くんこそ大丈夫？無理してるんじゃない？少し休んだら？」

「いや、待ってくれ。もうちよつとで考えがまとまるんだ。もう少しで…」

「…司くん。もう、やめましょう？」

「なんで？」

「さつき言った通りよ。今最優先すべきはゲームを作ること。一社員の都合で遅らせるわけにはいかないわ」

「それがコウでも？」

「……」

「迷ってるんだったら、自分の好きな方を選ぶべきだ」

「……」

「……」

「ごめんなさい。私、帰るわね。ちよつと頭がこんがらがってて……」

「……ああ、送ってくよ」

「いいわよ。ちよつと、一人で考えたいの」

「そっか。じゃあ玄関まで行くよ。俺も考えたい」

玄関までついて行く。

「じゃあ、またね。明後日」

「ああ。じゃあ」

扉が開き、ゆつくりと閉まって行く。

さあ、考えるか。

つま先がつつかえる。

風景がスローモーションで再生される。

ゆつくりと床が迫ってくる。

「……ええ？」

#

#

意識が黒く染まる。

#

#

「こんにちは。私は遠山りんっていうの。同期は私たちだけみたいね。あなたは？」

「…八神」

「八神さん！よろしくね！下の名前はなんていうの？」

「…コウ」

「じゃあ、コウちゃんね。よろしく、コウちゃん！」

「な、名前呼びは、ちよつと…。恥ずかしい」

「か、かわいい！その照れ顔、かわいいわ！」

「ちよ、ちよつと、やめてよ…」

「ごめんなさい。つい面白くて。でもこれから長い付き合いでしょ？よろしくね、八神さん」

#

#

#

「ひどい、ひどいよ！八神さんは悪くないのに！」

「と、遠山さん。泣かないで。私は、大丈夫だから…」

「大丈夫なんて言わないで。嘘つかないでよ」

「う、嘘なんかついてないよ」

「じゃあ、なんで泣いてるの!？」

「……」

「お願いだから、嘘はつかないで、自分自身につく嘘ほど、悲しいものはないから」

#

#

#

「やったね、コウちゃん！メインキャラクターデザイナー担当おめでとう！」

「うん。これも、りんの応援のおかげだよ。ありがとう」

「ううん、そんなことないよ。コウちゃんが頑張ったからよ。私はただ側で見てただけ…」

「その応援が、私の力になったんだ。側に大事な人がいるなんて、それだけで頑張れるよ」

「コウちゃん…」

「今度は私がりんの力になるよ。だからこれからもよろしくね」

#

#

#

「…はは。心配、かけないつもりだったんだけどな」

「コウちゃん…」

「ごめんね、こんなことになっちゃって」

「…なんでコウちゃんが謝るの？」

「え？」

「これだけは言わせて。私は、あなたの味方。どんな状況でも、何を言われても」

「…ぐすつ」

「よしよし。もう、泣かないの」

「ごめん。ごめんね、りん」

「違うの。こういう時は、ありがとうって言うのよ」

「うん。ありがとう、りん。大好きだよ」

#

#

#

「聞いた？話」

「聞いたわ。あなたに反発してた人たちが一斉に辞めるんでしょ？」

「うん。でも、これでよかったかもしれない。言い方悪いけど、これで仕事しやすくなったよ」

「…でも、ずっと戦力だった人がいきなりいなくなるのは、流石にきついんじゃない？」

「それは、後輩指導しかないよ」

「コウちゃん、それは」

「わかってる。でも、葉月さんがADとキャラリーダーの分業化してくれることになったし、専門学校からも何人か良い子はいるの」

「……」

「もうフェアリーズは終わっちゃったけど、私、変わるよ。もっと明るくなって、みんなから慕われて、頼りにされる先輩になるよ。…だから、もし昔の私に戻っちゃいそうなら、りんが引き戻してくれる？」

「もちろんよ！だって私、コウちゃんの味方だもの！」

#

#

#

#

#

「…っ！」

目が覚めた。頭がいたい。なにやら濡れているようだ。生温い。

「血…」

「ちよつと、司くん！大丈夫!？」

玄関の扉が激しく開かれ、血相を変えたりんが飛び出て来た。

「いきなり大きな音がして…。ち、血が出てる！きゅ、救急車呼ばなきゃ、えつと、」

10番かしら119番かしら」

「…はは」

不意に笑いが出る。

「笑って!?!これはいいよ危ないわ…!ちよつとまつてね、もうちよつとの辛抱だから」

「いや、いいよ…」

「そんなこと」

「いいんだ。それより、聞いてくれよ。いや、ほんと笑わずにはいられねえよ…」

「…頭打ったからおかしくなったのかしら…?」

「そうか、そうかもな…。だつてよ、俺がいなくても良かったんだ。きつと、あれが正しい歴史なんだよ。俺はいらない存在なんだ」

血とは違う、透明で、しよっぱくて、なぜか無性に悲しくなるものが溢れてくる。

「司くん?」

「俺がいなくなつて、コウはなんとかなつてた。完全にじゃないけど、ある程度うまくいつてた。俺が何かしなくなつて、よかった。あいつは、笑つてた」

なにかを耐えるように。

「頑張るつて。変わるつて言つてた。俺がいなくても!」

「つ、司くん、落ち着いて」

「ちつくしように…。なんだよ、俺が出来ることはないのかよ」

あの顔をさせたのは誰だ。

「俺が出来ること…」

あの顔をさせたのは誰だ。

「あの時、俺は、なにを誓ったんだ…!？」

それは、――だ。

「りん」

「は、はい!」

「すまんが、協力してくれ。今回ばかりは、りんの意見には乗れない」

「どう言うこと…?」

「正しい歴史を変えるのさ」

そいつにあつて、頭を叩くまで。

「変えてやる…!」

笑つてくれよ

年は過ぎゆき、今と同じものはない。

全てが変わっていき、「新しい」と言うものをただ繰り返す。

人の思いも、関係もまた然り。同じ瞬間など二度とないのだ。

何が言いたいのかと言うと、もうすでに11月だという事だ。司もコウも無事十九歳になり、来年には二十歳になる。

六月からコウは会社に出てこない。事態を知った葉月がコウに自宅作業を命じたからだ。しかし、コウがいなくなったところで仕事場の空気が良くなることはなく、誰も話さない、ただ作業をして定時に上がる、という状態がずっと続いている。一部では、この状況の真の原因は、自体を収束しようとしないう状態がずっと続いている。一部では、この話が出回っている。最近では、プロデューサーからの催促も無視され、スケジュール調整が厳しくなっている。

そんな中、その渦中にある例のプロデューサー、宮前司は、自分のデスクに座ってただ黙々とタイプしていた。ある作業の締めに入ろうとしたのだ。これから彼は、一世一代の大勝負に出ることになる。

「お疲れ。どう？進捗は」

「りん」

不意に声をかけて来たのは、同僚である遠山りんだ。愛知出身で、同郷である。

「ああ。もうちよつとで終わる」

「そう？でも少し休んだら？そんなに気を張ってたら疲れちゃうでしょ？」

そういえば、肩がえらく凝っていることに気づいた。どうやら疲れたと自覚しないと疲れない体らしい。

「それはまだ若いからでしょ」

「お前だつて俺と同じ年だろうが」

「はいはい。じゃあ肩揉んであげるわね」

そう言つて司の肩に手を置く。その絶妙な力加減は、思わず昇天してしまいそうだ。

「あくあくあく」

だから、こんな声も出てしまう。

ふと、りんが心配そうに訪ねてくる。

「…今更だけど、本気なの？」

「うん」

「…そつか。そうだよね」

「別にお前までそこまでしなくてもいいんだぞ」

「協力してもらおうって言ったの司くんじゃない」

「まあそうだけど…」

「大丈夫よ。私も出来るわ。だってこれも全部コウちゃんのためなんですよ？」

「まあな。知られたら怒られそうだけど」

そう言つて二人で笑い合う。

「…よし。出来た」

「よかつたあ。間に合わないと思つたよ」

「それより、どれくらい集まつてくれた？」

「予想よりだいぶ多いよ。今までの司くんの積み重ねね」

「よし。じゃあ決戦は二日後だ。一斉メールよろしく」

「任せて。…せっかくだから今日はもう休んだら？司くん、ここ最近ずっと根詰め
たから。コーヒー持つて来てあげるから、それ飲み終わったら帰つてね」

「ああ、じゃあお言葉に甘えてそうしようかな」

「よろしい。じゃあ持つてくるね」

りんが嬉しそうにデスクを離れる。話す相手がいなくなるといよいよひどい疲れを
感じた。本当に休んだ方がいいかもしれない。

「少しよろしいですか」

うつらうつらし始めると、誰かから声が掛かった。見れば、焼けた肌に意志の強そうな目の持ち主が。

「阿波根さん」

「うみこって呼んでください。阿波根はやめてと言いましたよね?」

「あ、はい。すみません」

この年上のやり手プログラマーは二週間前、他のゲーム会社から移って来た。最初は企業スパイか?と噂されていたが、彼女の確かな腕は、このイーグルジャンプに必要な不可欠なものになった。が、未だに会社に馴染めていないようだ。司が言えた話ではないが。

「それで、どうしたんですか?うみこさん」

「ああ、そうです。話が逸れてしまいました。∴あのメールは、いったいなんですか?」

「それは、二日後に説明するつもりだったんですけど∴」

「添付された資料は読みました。でも、まだ今やってるものも完成してないのに、新しいものをやる意味が、果たしてあるのですか?」

「ありますよ」

沈黙が二人を支配する。

「それは、いなくなつたというメインキャラクターデザイナーのことですか」
「そうです」

「八神さん、でしたっけ。彼女は負けたんでしよう？ 負けた人間はどこまでも逃げ続けますよそんな人間を、連れ戻す価値があるのですか？」

「いいえ、ひとつだけ間違ってます」
うみこを見据える。

「あいつは、まだ戦っているんです」

「……」

再びの沈黙。しかし、今度はそう長く続かない。

「分かりました。明後日、楽しみにしています」

「はい。期待しててください。最高の出来ですから」

うみこは会釈してブースを離れて行った。
しばらくして、りんが戻ってくる。

「くる途中に阿波根さんとすれちがったけど、もしかして喋ってた？」

「ああ。あと、阿波根さんじゃなくて、うみこさんって呼んだ方がいい」

「なんで？」

「命の保証はされなさそうだから」

#

あれから、司は仕事で行けない日もあるが基本的に毎日、コウの部屋の前に来ている。りんがしょっちゅう来ていると行ってもどうせコンビニ弁当とかインスタントラーメンとか体に悪いものを食べてるだろうから、健康にいい食材を使った手料理を持参して。そこで今日あったことをただひたすら話すのだ。しかし、いくら話しかけても中から返事すらも返って来ない。最近では近隣の人々から一人で扉へ向かってずっと話しかけるやばいやつと認識されてるらしい。一度本気で通報されかけた。

「なあ、コウ。今日は早めに帰るから聞いてくれよ。近々大きな説明会があるんだ。まあ、非公式だけど。そこでうまくいったらお前に正式に依頼がある。ぜひ、受け入れて欲しいんだ」

返事はない。

「楽しみにしてくれよ」

扉の向こうにそう投げかけ、歩き出す。

決戦の時は近い。

#

「……………」

扉の向こうの声を聞くたびに心が擦り切れそうだ。

彼は決して、嫌味とか、恨みつらみでここに来ているわけじゃないことは充分わかってる。

わかってるからこそ、自分の弱さが浮き彫りになる。

恩を返す、二人のとなり並びたいとぬかしていたくせに、いざとなったら逃げた卑怯者。

その事実が自分の内側を搔きむしって、死にたくなる。

けど、その勇気もないんだ。

だれか私を笑ってよ。

そうすれば楽になるから。
お願い、司。

たたかい

そして二日後、運命の日。

司が目を覚ますと、目の前には見知らぬ天井が。

「…どういふことだ？」

とりあえず起き上がって、周りを見渡してみる。二年前まで使っていた部屋だ。細部まで何も変わっていない。ということは、これは司の部屋、さらには、葉月の家だということだと至った。

「…ますますどういふことだ？」

なぜ俺はここに居るのだ。自分の姿を見てみると、ご丁寧にパジャマまでもが二年前のものだ。サイズが変わっていないのは多少なりともシヨックだが…。

昨日までの記憶を引っ張り出してみる。昨日は出社して、スケジュールの調整や外回りなどの通常業務が終わったあと、明日、つまり今日の説明会の最終確認をしていたはずだが、その後の記憶がない。

…酒でも飲んだか？

「…つていうか時間！」

主催者は早めに行つて準備しなければいけない。これはたとえ社会人でなくても常識だ。説明会は午後四時からなので、少なくとも午後二時には会場にいなければならない。そこから逆算して考えると、あまり悠長はできない時間だ。

近くにある時計を確認すれば午前九時。動き出すにはちようどのタイミングだ。

「よし、じゃあまずは。…しずくさんに挨拶だな」

そうひとりごちて部屋のドアを開けようとしてドアノブに手をかけると、向こう側へ一人で開く。

「あれ？もう起きたの？もう少し寝ても良かったのに」

「はづ、じゃなくてしずくちゃん…。俺はどうしてここに？」

「うん。会社で疲れ果てて寝てるのをりんくんが発見して、私がここまで引きずつてきたんだ。よっぽど無理してたみたいだね。ここ数日ずっと顔色悪かったし。でも今はスッキリしてるよ。君の部屋を残しておいて良かった」

「あ、ありがとうございます…」

思わず敬語になってしまう。

「さ、ここです突つ立つてても始まらない。朝ごはんにしよう？」

#

「いただきます」

「い、いただきます…」

朝ごはんは、味噌汁にサケの白米というオーソドックス。ここで食事するのもほぼほ二年ぶりだ。心なしか緊張してしまう。

「今日、大事な発表があるんだってね」

「うん。まあ、バレルよね」

「元から隠し通せるとは思っていない。」

「ちなみに、誰から？」

「大葉ちゃんから。昨日嬉しそうだったよ。私宮前さんに嫌われてなかったーって」

「そんな、嫌うなんて、あるわけないじゃないか」

「それにタテビくんからも行ってくるのかなんとかきてたし」

「まさかの内部リークだった。」

「でも、どうして教えてくれなかったの？」

「…怒んない？」

「怒んないよ」

「…反対されると思ったから」

「中学生か」

「はは…だよね」

「まあ、たしかに私の相談されても反対しかできないけど。立場的にね」
「…悪いと思ったけど、君のカバンのなかの企画書、読ませてもらった」

「…うん」

「すごく良かった。本当に始めて？」

「実は、大和さんに…」

「道理で。クリスティーナの書き方だったもん」

「しばらくの沈黙。お互いの箸が食器に当たる音と、咀嚼音だけが響く。」

「これは野暮かもしれないけど」

「うん」

「八神くんのためだよね」

「うん」

「彼女のためだけに行動したの？」

「うん」

「これでもし彼女が乗らなかつたら、とかは、ちやんと考えた？」

「考えたけど、途中でやめた」

「どうして？」

「絶対叶えるから」

「………そっか」

今度は静かに笑った。

「やつと、一歩ってこと？」

「そうだね。やつとだ」

「ここが始まりなんですよ」

「うん。終わりの終わりまで、始まりだよ」

「使い古されてるなあ。企画を進めるなら、もう少し良い言い回しを考えなきゃ」

「ふふ、精進します」

「さて……じゃあ、今日頑張つてね。フェアリーズⅡのディレクターは応援できないけど、君の叔母は応援してるよ」

そう言つてしずくは司の頭に手を伸ばす。ポン、と優しく頭を叩いた。

「姉さんも、義兄さんも、どっかで見守っていてくれる」

「うん。じゃあ、頑張ってくるよ」

「なんのため？」

「え？」

急に、ミステリアスな雰囲気醸し出して、しずくは問う

「なんのために頑張るの？」

「……そうだな。ま、陳腐だけど」

「自分のためかな」

#

時刻は午後四時十分前。控え室である小さな会議室、『第一会議室』で司とりんは待機していた。

「みんな、だいぶ集まってきてくれてるよ。来ないかもって思ってた人も来てるから、予想より全然多いわ。それに、結構有名な人もいるし、ひとまず成功ってことでいいんじゃない？」

「ああ。でも、これからが本番だ」

「これでみんなが企画に賛同してくれば、数の力で企画は通る。あとは……」

「まあ、それを考えるのはあとだ。今のことに集中しないと」

「そ、そうよね、ごめん」

「別にいいさ。…コンピュータの操作は任せた」

「任せて。今日のためにたつきさん練習したんだから」

「そいつは頼もしいな、あとは台本も作ったし、マッピングの調子もいいし、停電の恐れもない」

「今日は会社、休みだもんね」

「だからこそ借りれたんだけどな」

ふたりに笑いがあつた。

「あ、そろそろ時間。行かなきゃ」

「…ああ」

「ラストのシンとアスカも、こんな感じだったのかな」

「重みが違うよ。あつちは負ければ世界が滅ぶ。こっちは負ければ…」

「負ければ?」

「…いや、やっぱり同じ重みだな。負ければ仲間を救えない」

「囚われのお姫様じゃなくて?」

「戦友だよ」

#

「本日は、『フェアリーズストーリー外伝(仮)』の説明会にお越しいただき、ありがとうございます」
うごごいます

深々と頭を下げる。パラパラとまばらな拍手が聞こえた。

「さて、まずはこちらをご覧ください…」

ここで説明するのは、三点だ。まずは、このタイミングでこの企画を進める意味。

「それは、私が考えるに、『フェアリーズⅡ』だけでは、この物語は完成しないからです」

「完成しない？」

どこからか疑問が聞こえる。

「はい。前作で、アスカは死んだように描かれています。本当に生きてるか死んでるか。ユーザの解釈に任せる形になっており、実際ネットでも議論が分かれています。目にしました。今作では公式でアスカは死んでないとし、アスカが主役の話を作ります」

りに目配せし、プロジェクターを進める。

「これが関係図です。そしてここに、『フェアリーズⅡ』の内容の中に穴を作り、この関係図をそのまま挿入します」

「それは間に合うんですか？」

「…現在、『フェアリーズⅡ』の現場は進捗が遅れており、不幸中の幸いというか、今からでも多少の内容変更は容易だと考えます」

『フェアリーズⅡ』では、アスカの生死は最後まで隠されており、ラストでアスカのような人影が見える程度だ。そのアスカのような人物に助けられ、シンはもう一度世界を救う、という運びとなっている。

次の点は、この話題の延長線上だ。この時期に開発を開始する意味。

「この時期から開発を始めることができれば、私たちはある恩恵を受けることができます。その恩恵とは、『フェアリーズⅡ』が発売されたそのちやうど一年ほどに発売できることです。すなわち、『フェアリーズⅡ』の謎をある程度考察させた上での、アンサーとしての位置付けを得られることです。その点を持って、この『フェアリーズストーリー』というコンテンツは完成されるものと、私は考えております」

『フェアリーズシリーズ』の完成……」

誰かがポツリと呟く。全く無名の所から突如として流星のごとく現れた、新進気鋭のダークホースの完結。見たくないと言ったら嘘になる。

「この点を踏まえて、最後のポイント。それは、いま、ここに集まって頂いてる方々の協力があってこそ、成り立つもの。すなわち、歴史に名を残すことができることです

……正直に言って、これは分の悪い賭けです。しかし、成功すれば、このゲームはかの名高い殿堂の仲間入りを果たすことができます。これは、予想ではありません。確信です。このゲームが完成した暁には、必ずや、我々に栄光をもたらすでしょう……」

「終わったね…」

「…ああ」

誰もいなくなった会議室で、司とりんだけが抜け殻のように佇んでいた。

「みんな、協力してくれるかな」

「さあ、それはもう、天命を待つしかないんじゃないか？」

「…そうね。人事は尽くしたんだし」

「それに、最後の大仕事が残ってるしな」

「これがひとまず成功したらだけどね」

「…でも、ちよつと疲れたな」

「もう休んだら？まだ返事が来るまで少しあるんだし」

「色々と草案も作んなきゃいけないから、あんま時間ないんだよな」

「それでもよ。この計画は司くんが中心なんだから、しつかり休むのも仕事のうちよ」

「…じゃあ、お言葉に甘えようかな」

そう言つてノロノロと立ち上がる。

「さ。帰るか」

「うん」

会議室から出る前に、どちらからともなく、拳を突き出し、コツンと合わせた。

そこにはたしかに、抗ったものたちが、いたのかもしれない。

失恋

「…司くん、待って」

駅の改札。別の線に行くりんと分かれる前に、声をかけられた。

「ちよつと聞きたいことがあって」

「何？」

「これをやったのは、コウちゃんのためなんだよね」

「ああ」

もう何回も聞かれてきた問いだ。

「コウちゃんのこと、好きなの？」

「……………は」

一瞬、息が詰まってしまった。

「答えて」

「なんの冗談を…」

「お願い」

りんのあまりの真剣な表情に、思わずこちらも真剣になってしまう。

「…ああ、好きだよ」

「女の子として？それとも、友達として？」

「…女の子として」

「…そっか」

りんは一瞬、ほんの一瞬だけ、悲しそうな顔をした。それが気のせいだと思ってしまうくらいに。

「ごめんね、変なこと聞いて。もう大丈夫だから、ゆつくり家で休んで」

「…ああ、うん。今日までほんと、ありがとう」

「いいのよ。じゃあね」

そう言ってりと分かれた。

その間に、何の意味が含まれているのか、終に司には分からなかった。

#

司と分かれたりんは、自宅とは反対の方向に向かった。向かう場所は、コウの家だ。コウは唯一、りんだけは家に上げている。それも、りんの熱烈なラブコールの末によろやくだが。

この日も、りんはいつも通りコウの部屋のインターホンを押し、コウを待っていた。
「…りん」

「こんばんは、コウちゃん。ご飯作りに来たよ。上がってもいい？」

「…うん、ありがとう」

家上がるたびに、私は、いつからコウちゃんの笑う顔を見てなかっただろう、と思う。元からそこまでコウちゃんは笑う子じゃなかったけど、でも、ここ数ヶ月は特にそうだ。

「コウちゃん、今日は大丈夫だった？」

こうして台所に立って料理を作りながらそう聞くのがいつもの流れ。

「うん、大丈夫だよ」

そして、こう言うのもいつもの流れだ。

「…そう」

「うん」

私の包丁で食材を切る音だけが部屋にこだまする。

「ほんとにそうなの？」

「…どういふこと」

今日は少しだけ踏み込んでみることにした。

「今日ね、司くんと新しい企画の発表会をしたの」

「うん、知ってる。前、司が言ってたから」

「そっか」

「うん」

「ねえ、コウちゃん」

「なに」

「いつまでそうしてるつもり？」

「…え？」

「司くんは、コウちゃんのために、この企画を一人で作って、完成させて、みんなに頭を下げてたんだよ。全部、全部コウちゃんのことを考えてたの。郵便受け、見た？」

「…ううん」

「設定の資料とスケジュール表が入ってるでしょ？司くんは、コウちゃんの居場所を作りたいの。コウちゃんの帰ってくる場所を作りたい、無茶してるのよ」

「語感を強める。コウちゃんは苦しそうな顔をした。しばらく何も言わなかったが、やがて、」

「…別に、頼んでない」

「……」

「私は、頼んでないし。私がない方が、物事はスムーズに動くし、それに…」
「やめて」

その言葉を聞くと、胸が苦しくなる。心臓から血が溢れそうになる。

「私の大好きな人の、悪口言わないでよ」

「大好きな人…?」

言葉がとめどなく溢れる。支離滅裂だ。

「私ね、コウちゃんが好きなの。心から愛してるの」

「あい、してる…」

「そうよ、愛してるの。初めて会った時から、ずっと」

コウちゃんは何も言わない。

「コウちゃん、覚えてる? 私の学校とコウちゃんの学校が姉妹校で、交流会があったのを。私は一目惚れしたのよ。その子はとても強くて、でも優しくて、気高さがあったの。なんとか連絡を取ろうとか思ったけど、できなくて、でも、また会えた。運命だと思っただ。ステキなお友達もできた。でも、私の好きな子は傷ついて、私の前から消えちゃった…」

「りん…」

「消えちゃったの…。私が大好きで、心からだいすきで、いつも想っていたあの子は変

わったの…。でも、その子にとっては、それが本当に幸せなんだな、って思えた」

私はコウちゃんをみる。コウちゃんは戸惑って、訳が分からないような顔をしていった。

鼻をすすする。目頭が熱い。いつのまにか泣いてしまったようだ。

「私ね、このこと、ずっと言わないつもりだったの。だって、気持ち悪いでしょ？女の子が女の子のことを好きなんて。でもね、コウちゃんは、ずっとそのままにいるんですよ？ずっと向き合わないんでしょ？なら、その人生、私に頂戴？」

「な、何言ってる…」

「必ず幸せにするから。会社辞めて、別のところに行ってもいい。最悪、養ってあげる。だから、コウちゃんも私のことを愛して。疲れた私が帰ってきたら、おかえりって言ってる。私と一緒に、歳を取って行ってください」

「…私、は」

「私は、本気だよ」

コウちゃんしばらく黙ってじっと立っていたと思ったら、へなへなと座り込んでしまった。

「わ、わかんない、わかんないの…」

やがて、そんな言葉が出てきた。

「私、は、ずっと、立ち止まってるの…？私…私…」

「……」

「……」

無言の時間が続く。

静寂。

「…………ごめん」

コウちゃんが出した答えは、拒絶だった。

「私、やっぱり…。…ごめん」

「……………いいのよ」

私は精一杯、笑顔を作った。

「よかった。ようやく、コウちゃんらしくなった。今のコウちゃんの方が、すきだな」

「りん…」

「でも、ごめんね。ちよつと帰るね。用事、おもい、だしちやって…」

「まだだ、まだだめだ。」

「りん…！」

「お料理、もうほとんどできてるから、自分でできるよね？じゃあ…」

そう言って、逃げるように玄関へと走った。

力任せに扉を開ける。

コウちゃんのアパートから全力で走った。途中で転んだ。

「ううううう……うわああああ……！」

コンクリ塗装の道路に突っ伏したまま泣きわめき、地面を拳で殴りつけた。空を見上げようとしても、涙で歪んで見えやしない。

声が枯れたって構わない。

だってこれが私の始まりなんだから。

この声は産声だ。

そうだとしても、

納得はしていても、

初めて、司くんに対して、嫉妬してしまった。

最低

変わらずにはいられない。

どんなことも、何があっても。

転がり続ける石のように、坂の果てまで。

行く末は、まだ、わからない。

#

昨日からりんの連絡がない。

初めは、「昨日、お疲れ様」とメッセを送り、その後数時間経って、寝る直前になつても返信がなかったのを少しおかしいと思つたが、疲れているんだろうな、と納得した。

不安が現実になつたのは、翌日、会社にりんがいなかったことだ。いくらメールや電話をしても返ってこない。

この日、司はボツチだった。

「よし、ぱっぱと終わらせて、りんのところ行つてみるか」

きつと体調でも悪いんだろう。そういうわけで、いつもより早めに仕事を切り上げ、

プリンやスポーツ飲料などをコンビニで購入した。

#

『ごめん、今は会いたくないの』

そう言われて追い出されてからもう十分。司はトボトボとりんの家がある中野周辺を散策していた。中野は家賃が高いと聞くが、よく住めるなあと感心していたが、そんな気持ちももう失せてしまった。そもそもだが、司には友達というものがあまりいなかったのも、信頼した人に一時的とはいえ拒否されると傷つくどころでは済まないのだ。

「そうだ、今日もコウのところ寄らなきゃな」

そう思い出し、お土産を買うのにちょうどいいと中野の南口付近の商店街を物色する。これから中野からコウの住んでいる荻窪まで10分以上かかるのを考えると、また余計な思案をしてしまいそうで、少し参った。

#

コウの家の前。ここに通つてもう半年近くになるが、未だに顔を出さない。

「はあ……」

毎週必ずインターホンを鳴らし、世間話をし、時には管理人に誰だお前は何しに來たと厳しく問い詰められながらも、通い続けた。その間一度も嫌だ、めんどくさいと思つたことはないが、今、初めて、不確かなマイナスの気持ち掠めた。

気だるくインターホンを押す。

「……」

数秒待つが、やはり反応はない。もう一度ため息を吐き、扉から離れようとした、まさにその時。

「……司」

驚いて振り向く。そこには、たしかに、想つて止まなかつた友人の姿が。髪はボサボサで、最後見た時から明らかに痩せている。お世辞にも健康とはいえなさそうだった。

「……コウ、お前」

「司、聞いて欲しいことが、あるんだけど……」

コウは遠慮がちに部屋を指す。

「上がって、くれる?」

#

半年ぶりに訪れたコウの家。思ったより綺麗で少し驚いた。

「りんが来てくれて掃除手伝ってくれたから。一人だったら今頃ゴミの山だな」

「……」

こういうときどう返答した方がいいのかわからない。肯定すれば嘘だと言われるし、否定すれば失礼だと怒られる。結局司は答ええないという道を選んだ。

「それで、話したいことって」

「うん……」

コウは押し黙ってしまふ。きっと、コウの中でも色々な葛藤があるんだろう。辛抱強く待つ。

「……あのね」

ついにコウが口を開いた。

「私を、新しい企画のチームに入れて欲しいの」

「」

息をするのを忘れてしまうくらい、これまでの全てが「嵌った」気がした。

「……司?」

コウが不安げな顔をする。返事がないのを不審に思ったんだろう。

「…ありがとう」

もう止められなかった。涙が溢れ出す。

「ちよ、司」

「その言葉を聞きたくて、俺は、ここまで来たんだ」

「司…」

「ありがとう…!」

コウをひしひしと抱きしめる。

コウは司の頭を優しく撫でる。

「司、私こそ、ありがとう。でもね、りんのおかげなの」

「りんの?」

「りんが、私をひっぱっていたくれたの。このままここに居続けるつもりかって。私は前に進むけど、あなたはそのままなのねって」

「…」

「だから、私も進みたいって思ったの。私は、今度こそ、二人の追いついてみせるって。

まだただだけど、必ずやり遂げるから」

「ああ。じゃあ、俺も負けてられないな」

「あ…」

と、コウは付け足した。

「この後、りんのとこ行きたいの。バイク、乗せてつてくれる?」

「え、でも俺歩きなんだけど…」

「家、ここから近いでしょ? 風を感じたい気分なの」

#

「ほい、ヘルメット」

「ありがと」

コウにヘルメットを投げて寄越す。二人乗りなんて生まれて初めてだ。

「よし、できる限り安全運転で行くからな。しっかり掴まってるよ」

「前から思ってたけどさあ…」

コウがバイクを見下ろす。

「この蛍光緑、悪趣味だよね」

「なんんだとお!?!お前、このカワサキニンジャ250の素晴らしさがわからんのか!?
この粋な配色、絶妙な流線型、エンジンは248cc水冷4ストローク並列2気筒DO
HC、これだけのハイスペックを誇り、なおかつお手頃値段の良さがなぜわからない!?!」

「あ、うん。司ってこんなに面倒だったっけ」

「まあ乗ってみればわかる。もう一度言うが、しっかりと掴まってくれよ」
エンジンをふかす。心地よい振動が尻を揺らす。

「おおっ」

「じゃあ行くぞ」

アクセルを切り、車体を前進させた。初めはゆっくりと。しかし少しずつスピードを上げ、法定速度に近づけて行く。

「……」

「どーだ、気持ちいいだろ」

ヘルメット越しにも感じる、他の何にも例えられない感覚に、コウはご満悦のようだ。

「…」

すると、コウは司の体に回した手の力を強めた。

「どうした？」

「…うん」

「言ってみ」

「…うん。あのね…」

おずおずと話し出した。

「私、今まで人に好かれたことなくって。こんな性格だから、恋人どころか友達もいなかったの。だから、なんというか……大事な人との仲直りの仕方がわかんないの」

「そんなの簡単だろ。自分の気持ちをつづつやりやいなよ」

「そんなこと」

「それが出来ない奴が多いんだ。多すぎる。みんな、建前だとか上っ面で我慢するんだ。それで損をする。俺もそうだった。お前はそうはならないで欲しいけどな」

「司……」

「俺が前に俳優だったことは話したろ？」

「うん」

「俺はぶつちやけ言えば、父さんと母さんのために、あの二人から褒められるために頑張ってたんだ。それがたまたま上手いこと行ってたんであって、特に有名になることにごだわつちやいなかった。ただ、あの人たちに誇りに思ってた欲しかったんだ。ま、血は繋がってなかったけどな。そんなのは関係なかった」

「……」

「でも、俺が十五の時、二人が事故にあつて亡くなつて。そこからがむしやらになつてつた。そこで人も上っ面の厚さとかだらなさを知つたんだ。だんだん腐つていって、ついには事務所もクビになった。悪いこともいっぱいやったなあ。そこで、出会つたの

がお前なんだ」

「え……？」

「お前、よく新宿の画材屋行ってただろ」

「うん、でも、なんで」

「あそこ俺の根城だったから。びっくりした。こんなに綺麗な人がいるのかって思った。一目惚れだった。それから、あの人に見合う男になろうと思って、悪いことも全部やめて、しずくさんのところ転がり込んで、武者修行した。スケジュールの組み方、人の動かし方、仲介の仕方、コンペの仕方、なんでもやった」

「そっか、だから……」

「しずくさんには迷惑かけたけど、感謝してもし足りない。だから……。あ……。何を言おうと思ったんだっけ」

「……大丈夫。いいこと、伝わったから」

「そ、そっか。ならいいんだ」

「私も、ぶつかってみるよ」

「……ああ。頑張れ」

#

インターホンが鳴る。寝ていたようだ。時計を見れば、もう七時近い。今日はもう誰にも会いたくない。何か宅配頼んでたつけ…？お腹が鳴る。そういえば朝から口に入れたものはコップ一杯の水だけだった。なんとか気力を振り絞り、ドアまで向かう。何も考えてなかった。

「…りん。こんばんわ」

「よう」

そこにいたのは、最愛の人と、大好きな友人だった。寝ぼけていた頭がいきなりフル回転を始めるが、燃料が足りない。

「スープパスタの材料持ってきたんだ。食うだろ？」

「どうして…」

「どうしてって、心配だろう。連絡もろくにしないで。体調悪いのか」

「え、えっと」

口が裂けても、失恋の傷心とは言えない。

「う、うん」

「よし、安心しろよ。俺のスープパスタは重くない。病人にも安心設計だ。台所借り

るぞう」

「あ、どうぞ」

許可を取る前にもう色々出して作業している。それより気になるのが。

「……」

いそいそと座っているコウだ。気まずいにもほどがある。

「あ、俺ちよつと水がうるさくて何も聞こえないからー。安心して大声で喋ろよ」
司も司でなんだかよくわからない気の使い方をしている。

「あ、あの、コウちゃん」

「りん」

コウが真剣な目でこちらを見ている。

「私」

「わああああ、待って、待って！」

「へ？」

「け、化粧、いま、顔ひどいから！」

「別に気にしないけど……」

「私が気にするのは、せめて顔はきちんとさせて！」

慌てて洗面所に逃げ出した。

「コウちゃん…」

油断すると涙が出てくる。

ーダメよ、りん。昨日涙は流し尽くしたでしょ?!これ以上みつともなくならないの

!

冷水で顔を洗い、化粧を塗りたくる。自分でもなんだが、化粧は上手い方だという自負はある。

十分ほどで、とりあえず人前に出れる最低限になった。

「…よし」

これからは、何もなかったように振る舞おう。失恋の痛みは時間とともに消えるらしい。コウちゃんに気づかれなくても、一緒に入れるだけで幸せなのだから。

「ごめん、コウちゃん。おまたせ。…あれ?司くんは?」

「生クリーム足りなかったんだって」

「そう…」

大方気を利かせてくれたのだろう。しかし、二人きりだと余計に気まずい。

「えつと…コウちゃん。今日はなんで来てくれたの?」

「昨日、ちゃんと返事しなかったでしょ?りんがしてくれたように、私もぶつかってみようと思って」

「……」
俯く。忘れなきや。

「気にしないで？昨日のは、冗談だから。本気にしないで、ね？私たちは明日からいつも通りよ。今日はたまたま風邪引いちゃっただけなの。心配しないで」

「りんはあんなに辛そうな顔で冗談を言うの？」

「…それは」

「りん、私、私ね」

「りんとは付き合えない」

「……うん。わかってた」

「ごめんなさい。せつかく、私を好いてくれたのに」

「いいのよ。私も、ごめんね。困らせること言って」

「ううん。困ってないよ。嬉しかったから」

「嬉しい……？」

「うん。だって、私、今まで人に好かれたことってあんまりないからさ」

「そう、なの」

「昨日言ってた交流会だって、すごく覚えてる。もともとお嬢様学校で、私は奨学生だったから馴染めなくて。もし、学生時代に会えてたらって思うと、すごく悔しいよ」

「…そっか」

「でも、今、りと会えたことは、意味があることだとおもう。…ありがとう。私を好いてくれて」

「…なら」

目の前で、とても優しい笑みを浮かべているコウちゃんに、私は少しわがままになつてしまう。

「なんで、私じゃダメなの？私が女の人だったから？それとも、距離が近かったから？それとも…」

「ううん。違うよ。私じゃ、りんを幸せに出来ないから」

「どうして？そんなこと…」

「今までだって、今回だっていっぱい迷惑かけたし、これからもいっぱい迷惑かけると思う。私、不器用だから、りんが今よりもっと大切にしたら、きつとりんのためになんだってやつちゃう。司だって、葉月さんだって怒らせるかもしれない。りんま

で傷つけちゃうかもしれない。りんに負担、かけたくないんだ」

「…私のためってこと？」

「そんなに自惚れてないよ」

「そっか。コウちゃんは優しいね…」

ぼろぼろと水滴が手の甲の上に落ちている。視界が歪んで目頭が熱い。また泣いているみたいだ。

「でも、最低…！」

「ごめん」

「最低…！最低…！私みたいないい女そうはいないからね！それを振るなんて、不幸者…！」

「ごめん」

「もうコウちゃんなんて知らない！知らないんだから！もう助けてあげないんだからあー！」

「ごめんね」

コウちゃんは私をそつと抱き寄せた。私はコウちゃんの胸に顔をうずめ、思いつきり泣き叫んだ。コウちゃんの服が涙で濡れても構やしない。コウちゃんは私の頭をそつと撫でてくれる。

「うるさい、振ったんだから、これ以上優しくしないで…」

「ごめんね。でも、りんは大切なんだ」

「最低…！そんなことされたら、諦められないじゃない！」

「…うん」

「うわああああああん！」

#

司は扉の前で二人の漏れ出る声を聴きながら、安心していた。

「よかった。あいつら、とりあえず大丈夫そうだ」

司は心から願った。コウとりん、そして、ひふみやあまね。これから動き出す人々へ。

どうか、後悔だけはしないでくれ。

これから

あの日から、半年が経った。『フェアリーズⅡ』の開発も折り返し地点に立ち、すでに初夏の香りが漂ってくる。

「…本気なんだね？」

ゲーム開発会社イーグルジャンプの一室では、『フェアリーズ』シリーズの責任者兼ディレクターの葉月しずく、そして、去年入社した、加藤あまねが居た。

「はい」

あまねは静かに短く返事をする。葉月はあまねから渡された紙、退職願に目を落とす。

「…もう一度言うが、考えなおしてくれないかい？ たしかに、君の怒りはもつともだ。しかし、君はまだ若いし、フリーでやっていくには苦勞するだろう。だから…」

「すみません。でも、決めたことなんです」

葉月は浅い溜息を吐いた。

「…わかった。じゃあもう何も言わない。けど、困ったらいつでも言ってくれ。私も、宮前も必ず力になってくれる」

「はい。ありがとうございます」

あまねは深々と頭を下げた。そして、部屋から退出する。

思えば入社してから良い事がなかった気がする。自分に才能が無い事を思い知らされ、それでもなんとか食らいついてきたのは、ただの意地だ。八神コウという天才に会ってしまったことが、自分の人生を良くも悪くも変えてしまった。この先どうなるかは分からない。教科書の型通りの自分の作風で、専門学校講師になつて、毒にも薬にもならない事をタラタラ教え続けて終える人生も見ようによつてはアリかもしれない。なんて、まだ人生の五分の一も行きていないのに達観ぶつて語り始めるなんて、それこそ終わりかも。

心の中でくだらない事を考えながら、仕事場に戻り、荷物を手にとって、エントランスに向かう。今日はイーグルジャンプで最後の仕事だった。与えられた仕事を口を開けたまま脳死でするのはもう終わりだ。これからは自分で考えなくては。

前を見ると、ひふみが立っていた。イーグルジャンプでできたはじめての、そして最後の友達。

「あの…あまねちゃん」

「今までありがとう、ひふみちゃん。ひふみちゃんは頑張つてね。何かあったらいつでも連絡して。相談に乗るから」

「…うん、ありがとう。でも、別に用がなくても連絡して良い？」

「全然大丈夫だよ。…じゃあ、行くね」

なんとなく居心地が悪くて、逃げるようにひふみの横を通り過ぎた。自分と違って、ひふみは認められて、頼られて、生き残っている。追い込まれて、逃げた私とは大違いだ。ひふみに嫉妬した日だって、一日、二日じゃない。だとしても、ひふみは大事な友達だ。大事な想いだけを、持って帰りたい。

ーああ、なんか嫌だな。もう、止まってるや。

エントランスから外に出て、大きく息を吸う。都道4号線を挟んだラーメン屋も、となりにあるヤクルトも、微妙に寂れたこの街ともおさらばかもしれない。

そんなノスタルジーな気分浸っていると、不意に声をかけられた。

「加藤さん。ちよつとお話しいいかな」

「宮前さん…」

『フェアリーズ』のプロデューサーで、チームの中で三番目に偉い人。最初はこの若さに驚いたが仕事の速さや正確さ。そして人当たりの良い、会社のヒーローだ。女性ばか

りのチームの唯一の男性。黒一点とも言える。

「何ですか、話って」

「まあ、立ち話も何ですから。近くに新しい喫茶店が出来たんです。時間がありませんら、お付き合いください」

そう言つてホイホイついて行くのもどうかと思うが。

喫茶店に着いて、席に座つた司は、おもむろに数枚のB4用紙を取り出した。

「……これは？」

「あなたのですよ」

「え？」

確かめて見ると、たしかに自分のものだ。中には、いわゆるメカが描かれている。小さい頃からメカが好きだったのを思い出す。しかし、自分の通つていた学校では人物専門コースに進んでしまったため、機械系は本格的に学べなかつた。

「えつと、何が言いたいのか……」

「今、僕たちが新しいゲームを作ろうとしているのは知っていますか？」

「はい。噂程度ですけど……」

その噂を口にはしている人たちは、概ね否定的だ。なんでも、「フェアリーズであつてフェアリーズでないもの」らしい。今まで自分たちが作り上げて来たものを壊される

と、危惧しているのだ。新しいチームに葉月が参加していないことも、アンチに拍車をかけている。

「そこにメカニックデザイナーとして参加して欲しいんです」

言葉が出なかった。まさかこんな早く仕事が来るなんて。しかし頭が回らないまま出した答えは、否定の言葉だった。

「光栄なんです、その、本格的に習ってもいない新参者が、参加するというのは…。それに、私よりもっともっと上手なデザイナーさんがいるんじゃない」

「あなたがいいんです。実は、本当に密かにですが、協力してもらっている方々のそれぞれの会社で、メカニックデザイナーをやっている人たちの落書きとか、今までの作品とかを集めてもらったんです。今テーブルにあるこれらは、滝本さんが持って来てくれたんです」

ここで、注文していたココアとコーヒーが来た。司はココアを一口含む。

「あ、ちなみに滝本さんも参加してもらっています。今やっている仕事が終わったらすぐ来るって」

「ひふみちゃんも…」

心が揺れた。

「でも、なんで私が…?」

「あなたの絵を気に入ったからです。タテビさん…ああ、脚本の方ですが…も、これがいいって言っていました」

「…私の絵を」

「でも、一番推したのは、コウですよ」

その名前を聞いた途端、背筋が凍りついた。まだあの言葉が残っているが、同時に奇妙な感謝の気持ちもある。あの言葉のおかげで、自分の本当の実力を知れたし、思い切ることもできた。

「そう、ですか」

「まあ、あとは本人に任せますよ」

「え？…」

そう言っただけで席を立つ。気がつくやうに、後ろのは金髪が。

八神コウだった。

「あ…」

「…久しぶり」

司は別の席に移ってうまそうのココアを飲んでる。

「…」

「…」

こちらは空気が凍りついたように二人ともピクリとも動かない。話し下手なコウに加え、何が何だか状況が整理するできていないあまねが話す労力を考えることに回しているからだ。

それでもやつと出すことができた言葉は「なんで」だった。

「…なんで。なんで今更、こんな…」

「……」

「私、あなたに会いたくなかったよ…」

「…私は、たしかに許されない事をした」

コウはゆっくりと口を開いた。

「でも、これだけは言いたかったの。…私が言えた事じゃないんだけど」

「諦めないで」

「私みたいに、ね」

コウは微笑む。

「私みたいに手遅れになるようなことはしないで。道が少しでも繋がっているなら、歩き続けて欲しいの」

「コウさん……」

「これだけ。……ごめんね、時間取らせて」

コウはそう言つて席を立つた。

入れ替わるように司が元いた位置に座る。

「答えは？」

目まぐるしく回る思考。

混沌としたそれらの中にも、たしかな答えがあつた。

「やります」

やれることがあるなら。

可能性を信じて。

おわりではじまり

日々が過ぎて

年が過ぎて

大切な人達が過ぎて

急がなくちや 急がなくちや

なんだか焦って つまずいて

もう駄目だ

動けねえよ

うずくまっても時は過ぎて

考えて 考えて

やつと僕は僕を肯定して

立ち上がって

走り出して

その時見上げたいつもの空

あの頃とは違って見えたんだ

あの日の未来を生きてるんだ

全てを無駄にしたくないよ

間違いないで無かったよ

今の僕を支えてるのは

あの日挫けてしまった僕だ

#

朝、起きると、不意に頬が濡れていることが。よくある。自分の本当になりたい者のなれなかったからだ。今日もまた、濡れている。なぜだ？これからも、泣き続けるのだろうか。

シャワーを浴びて、身支度をし、家を出る。いつものバイクに乗って阿佐ヶ谷まで向かう。会社に着いて、タイムカードを通す。いつもの決まった行動。ルーティンワークだ。だが、この決まった行動の中にも、変化したことが多々ある。

「司、おはよう」

「うん、おはよう」

コウが明るくなったことだ。かつてそれを相談されたときは正直、呆気にとられたが、やはり好きな人が毎日笑っていると気持ちいいものだ。後輩に頼られ、先輩から信頼され、同僚からは友愛の念を持たれる。私のなりたい私に近づいてる気がする、と笑顔で漏らしていたことを思い出す。

「本当に今度こそは、司たちに恩返しをしたいの。だから、私は、私の誇れる私になりたい」

その言葉が今でも胸に焼き付いている。

俺は、俺のなりたい俺に、俺が誇れる俺になれてるだろうか。

思えば、腐ってた時期からここに至るまで四年ほど、がむしやらにやってきた気がする。後ろを振り返る暇も、これで正しいのかと思いつく時間も余裕もなかった。フェアリーズⅡの製作が落ち着き、フェアリーズ外伝の製作に入ってから、超がつくほどの優秀なスタッフが集まったお陰で、やることはもうほとんどない。会社に行つてからも、たまに入る確認作業をこなすだけだ。活気つくチームの面々を見てみると、企画、声をあげたことに誇りも感じられる。

ただ、過ぎて行つてしまふなあ、という後悔とも心残りともとれない、奇妙な残り力

スが自分の中に沈殿しているだけだ。

会社から上がり、家に帰って煙草を吸いながら資料や、スケジュールを整理して、自炊して風呂入って寝る。ただそれだけの生活で、時間が過ぎて行くのは、勿体無いような、それでいて幸運なような。自分の身体だけ浮遊しているような感覚だ。

ベッドに入り寝ると、決まって夢を見る。鮮明な夢だ。はつきり細部まで思い出せる。自分の過去をまざまざと見せつけられるのは、どうも嫌な気分になる。

どこにでもあるような話。俺の両親は死んだ。交通事故。俺が七つの頃。俺だけ助かった。その後引き取られたのが、母親の同僚だった葉月しずくという女性の姉夫婦だった。姉夫婦は不幸にも子供が出来ない体質だったようで、俺のことをほんとうの家族のように迎えてくれた。

俳優になろうと思ったのは、些細なことだ。母さんがテレビを見て、「この人、かっこいいわねえ。演技も上手で」と漏らしたからだ。その俳優になんとなく母さんをとられた気がして、ムキになった記憶がおぼろげにある。どうやら俺には才能があつたようで、幸運にも、認められるまでに時間はかからなかった。そんな俺を両親は誇りに思ってくれたし、俺も両親から褒められることが生きる糧になっていた。

そんなある日、母さんのお腹に命が生まれた。滅多に泣かない父さんが泣きじゃくっているのが印象的だった。俺が十五の頃だ。両親が、「お前にやっつと弟を見せてやれる」

と俺を抱きしめてくれた。本気で一晩中泣いた。

病院に行くために両親が乗った電車が脱線事故を起こし、両親が亡くなったと知ったのは、その二日後だった。

目が覚める。

やはり頬が濡れている。

もう吹っ切れたと思っていたが、まだ悲しみに溺れているらしい。

俺がなりたいた俺の答えを、きつとこの夢は持っている。

だから、俺は泣いているのだ。

俺がなりたいた俺を。

大事な人に誇れる俺を。

だからと言って、何か出来るわけでもなく。

時間が過ぎて行く。

いつしか随分と完成が近づいた。

世間の期待度も桁違いだ。

そんな中で、俺は自分の問題を抱えている。

その摩擦で、どこかが痛い。

なぜか、いたい。

自分だけが、置いていかれるような、痛みが。

「父さん、母さん。おはよう」

両親の墓に、手を合わせる。

「なんだか最近、変なんだ」

「ここだと、自分の思った気持ち正直に話せる。」

「まだ始まったばかりなのに、半年しか経ってないのに、なんだか終わりみたいない気分

なんだよ」

墓に手を置く。まだあつたかい気がした。

「…また会いたいよ」

そのままうずくまってしまった。悲しいのか、寂しいのかよく分からない。ただ、ここには漠然とした不安と焦燥と諦念があつて、それが汚く混ざりあつた絵の具みたいになつて、自分の心のキャンパスを塗りたくっているようだ。

俺は、まだ温かみが欲しい。

人の温もりを感じたい。

自分が生きていると思いたい。

そんなどうしようもない強い欲望が、俺を動かしたがつている。

「……」

冬の差し掛かりで、少し寒い。木枯らしが吹き抜け、どこまでも透き通るはずの青空は、曇っていた。

やがて雨が降ってくる。突き刺すような鋭い痛みが、身体中を襲う。俺を蝕んでいる苦しみが、雨に変わったのか。雨曝しだ。

ふと、地面を踏みしめる音が聞こえた。音はだんだん近づいて、俺の身体を影で包ん

だ。

「司くん」

「…りん」

俺の大事な友人、遠山りんだった。

「やっぱりここに居た」

「なんで分かった？」

「なんかモヤモヤしたらここに来るって言ってたじゃない」

「…言ってたっけ」

「言ってたわよ」

「…そっか」

未だに風は強く墓地を吹き抜け、雨は次第に強くなる。

「なんか、用があるんだろ？なんだよ」

「用っていうか…うーん。喝を入れに来たっていうか」

「喝？」

「だって、司くん、なんだかららしくないから」

「らしくない、か…」

自嘲気味に薄く笑う。

「俺らしいってなんなんだよ…。わかんない、わかんないんだ…」

「大丈夫よ。自分がなんなのか分かってる人なんて、いないから」

「でも、俺らしくないって」

「だって、司くん、何かあつたら相談してくれてたじゃない。みんなで解決しようって、そう言う人でしょ？でも、最近は私たちのこと避けるし、寂しくて」

「そんなことかよ…」

「そんなことって何よ。私たち、一緒にいるって、ずっと前に言ったでしょ？」

「…そっか」

「そうよ。だから、いま何か抱えてるなら、言つてよ」

「…ありがとな」

それから、りんに至てを話した。自分のどうしようもない願望のこと。自分と周りの摩擦。話した後も、りんはいつもと変わらず、優しい微笑みを浮かべてくれた。

「前に、コウちゃんが今の司くんとおなじようなことを言つてたの。やつぱり似た者同士ね」

「そうかな」

「司くん、忘れないで。司くんが辛いと思つてること、嫌だと思つてことは、みんな辛い、嫌だつて思うの。キミは普通よ。だから安心してね」

「うん、ありがとう」

素直に感謝の言葉が出た。まだ雨は晴れてないけど、この苦しみの雨曝しでも、それでも、背負いながら進んで行きたい。

もう一度りに礼を言っつて、俺は走り出した。

昼下がりのイーグルジャンプ。ずぶ濡れのまま帰つて来て、そのままコウのデスクまで直行する。

「話がある。来てくれ」

「え、何？ここじゃダメなの？」

「ダメだ。大事なことだ」

「…分かった。良いよ」

ちやうど作業がひと段落したところのようだ。不承不承と知った感じについてくる。着いたのは、俺たちが始めて会った場所。第一会議室。

「コウ、好きだ」

たった五文字に全てを込め、言い放った。

「……………」

コウは少しの間フリーズした後、頭の前から首まで真っ赤にして、バグを起こしたように挙動不審になった。

「な、な、なん、な…」

「コウが好きなんだ」

駄目押しのもう一発。

コウは口を手で隠しながら、テーブルに手をついた。

「ど、どうして…」

「前に言ったよな？確か。一目惚れだ」

「でも、でも、私、ぜんぜん、司に釣り合わない…」

「俺の方こそ、お前にはぜんぜん釣り合わないよ。でも、好きなんだ」

「はうう…」

コウはしばらく固まっていたが、やがて俺をしつかりと見つめる。

「私も、好きだ」

「うん。良かった。振られたら死んでた」

「そんなこと言わないでよ…」

コウに向き直る。

「これから、よろしくお願いします」

「うん。よろしくお願いします」

二人揃ってお辞儀をして、たまらず吹き出した。

これが終わりで始まり。

一人が終わりに、二人の始まり。